大府市文化財調査報告書　第１１集

瀬戸Ｃ古窯群
久分古窯群

～大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ～

２０１４年
大府市教育委員会

大府市文化財調査報告書　第１１集

瀬戸Ｃ古窯群
久分古窯群

～大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ～

２０１４年
大府市教育委員会

序

愛知県大府市は知多半島の基部、名古屋市の南側に隣接した都市で、年々人口増加に伴う様々な開発事業が展開されています。開発は市に人口増加や活気をもたらす半面、森や田畑等の景観や自然が失われていくという面が伴います。一方で、我々の祖先が残した貴重な歴史的、文化的遺産を後世に伝えていく責務は、不変でなければなりません。

大府市教育委員会では、平成１６年度から１７年度にかけ、大府共和西特定土地区画整理事業に係る開発工事に先立ち、地内に所在する瀬戸Ｃ古窯群及び久分古窯群の発掘調査を行いました。その結果、中世のこの地方の窯業に関わる遺構・遺物を検出することができました。このたび調査結果をまとめ報告書として刊行いたします。本書が地域の歴史資料として広く活用され、また埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の刊行にあたり、多大なるご指導・ご協力をいただきました関係機関及び関係者の皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成２６年３月吉日

大府市教育委員会

教育長　細谷　正明

例　言

１．本書は、愛知県大府市共和町７丁目に所在した瀬戸Ｃ古窯群（愛知県遺跡番号 440170）及び同市共西町４丁目に所在した久分古窯群（県遺跡番号 440100）の発掘調査報告書である。

２．調査は、大府共和西特定土地区画整理事業に伴う事前調査として、大府市教育委員会が主体となり、玉野総合コンサルタント株式会社に調査業務を委託し実施した。

３．調査期間は、瀬戸Ｃ古窯群が平成１６年７月４日から６日まで範囲確認調査、本調査は第１次調査を平成１６年１１月４日に、第２次調査を平成１７年６月１日から１０月１５日まで行った。久分古窯群は平成１７年２月１８日に範囲確認調査、平成１７年６月１日から１０月２７日まで本調査を行った。

４．遺物整理作業は、瀬戸Ｃ古窯群は平成２０年度から２３年度にかけて愛知玉野情報システム株式会社が、実測や図化、写真撮影は平成２４年度に株式会社イビソクが行った。また久分古窯群は、整理作業を平成１７年度から２０年度にかけて玉野総合コンサルタント株式会社が、遺物の接合を平成２３年度に愛知玉野情報システム株式会社が、実測や図化、写真撮影は平成２４年度に株式会社イビソクが実施した。

５．発掘調査体制は、発掘担当者が古田功治（当時、大府市歴史民俗資料館主任）、現場担当者が前田武志（玉野総合コンサルタント株式会社）、調査担当者が中村伸吾（玉野総合コンサルタント株式会社）、調査補助員を服部孝信（玉野総合コンサルタント株式会社）が担当した。

６．発掘調査および報告書作成にあたっては、次の各機関をはじめ多くの方々からのご指導、ご協力を得た。記して感謝の意を表す次第である。（順不同）

愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、　　大府共和西特定土地区画整理組合、大府市区画整理課（現：都市計画課区画整理室）、青木修氏（瀬戸市埋蔵文化財センター）、中野晴久氏（とこなめ陶の森資料館）

７．熱残留磁気測定は、大阪大谷大学文化財学科教授（当時）広岡公夫氏に、炭化物分析は株式会社パレオ・ラボに依頼した。

８．本書の編集は鈴木智恵・伊藤羊子が行い、第２・３部第２章及び総括の執筆を行った。なおその他の執筆は第１部を古田功治、第２・３部第１章を服部孝信、第２・３部第３章第１節を広岡公夫・重松愛弓・井上裕香、第２部第３章第２節を藤根久・中村賢太郎が、第３部第３章第３節を黒沼保子が行った。

９．本書内図面等の座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠する。

１０．土色には『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を使用した。

１１．調査記録および出土遺物は大府市歴史民俗資料館で保管している。

目　次

第１部　調査と遺跡の概要

第１章　　調査までの経緯 …… 2
第２章　　調査概要 …… 6
第３章　　遺跡の位置と地形および周辺の歴史的環境 …… 11

第２部　瀬戸Ｃ古窯群

第１章　遺　構
　第１節　窯体について …… 18
第２章　遺　物
　第１節　器形分類 …… 28
　第２節　出土遺物について …… 30
第３章　自然科学分析
　第１節　瀬戸Ｃ古窯群の考古地磁気学的研究 …… 43
　第２節　瀬戸Ｃ古窯群出土炭化材の樹種同定 …… 58
　第３節　総括 …… 62

第３部　久分古窯群

第１章　遺　構
　第１節　窯体について …… 64
第２章　遺　物
　第１節　器形分類 …… 84
　第２節　出土遺物について …… 86
第３章　自然科学分析
　第１節　久分古窯群の考古地磁気学的研究 …… 118
　第２節　久分古窯群出土炭化材の樹種同定 …… 130
　第３節　市内および周辺地域の古窯の燃料材に関する考察 …… 134
　第４節　総括 …… 138

報告書抄録

挿図目次

【第１部】調査と遺跡の概要

第１図　遺跡位置図（国土地理院１／５万地形図「名古屋南」に加筆）…… 3
第２図　瀬戸Ｃ古窯群調査前地形図 …… 4
第３図　久分古窯群調査前地形図 …… 4
第４図　瀬戸Ｃ古窯群調査現況位置図（1/1500）…… 5
第５図　久分古窯群調査現況位置図（1/1500）…… 5
第６図　瀬戸Ｃ古窯群調査前地形図 …… 7
第７図　久分古窯群調査前地形図 …… 9
第８図　江戸末期の瀬戸Ｃ古窯群・久分古窯群付近（『大府市誌』近世村絵図集より）…… 12
第９図　大府市の表層地質図（『日本地質図大系』〔名古屋市南部、知多半島より加筆・修正〕） 13
第10図　周辺遺跡分布図　（『瀬戸Ｂ古窯跡群・奥谷古窯跡』所収図面を修正）…… 15

【第２部】瀬戸Ｃ古窯群

第１図　遺構配置図（1：100）…… 18
第２図　調査区略図 …… 20
第３図　１号窯平面図・エレベーション図（1:40）…… 21
第４図　２号窯平面図・エレベーション図（1:40）…… 22
第５図　３号窯平面図（1:40）…… 23
第６図　３号窯エレベーション図（1:40）…… 24
第７図　碗類器形分類 …… 28
第８図　皿類器形分類 …… 28
第９図　片口山茶碗器形分類 …… 29
第10図　１号窯皿 …… 32
第11図　２号窯碗 …… 32
第12図　２号窯皿・片口碗・片口山茶碗 …… 33
第13図　３号窯碗・皿 …… 34
第14図　灰原碗 …… 34
第15図　灰原など碗・皿・片口山茶碗 35
第16図　東海版考古地磁気永年変化（広岡・藤澤、2003 による）と瀬戸Ｃ古窯群の考古地磁気測定結果 …… 49
第17図　出土炭化材の試料位置と検出樹種 …… 60

【第３部】久分古窯群

第１図　遺構配置図（1:200）…… 67
第２図　遺構図略図 …… 68
第３図　２号窯平面図（1:40）…… 69
第４図　２号窯エレベーション図（1:40）…… 70
第５図　３号窯平面図（1：40）…… 71
第６図　３号窯エレベーション図（1：40）…… 72
第７図　３号窯床面下施設遺物配置図（1：20）…… 73
第８図　４号窯平面図（1：40）…… 74
第９図　４号窯エレベーション図（1：40）…… 75
第10図　４号窯床面下施設遺物配置図（1：20）…… 76
第11図　５号窯平面図（1：40）…… 77

第12図　５号窯エレベーション図（1：40）…… 78
第13図　５号窯床面下施設遺物配置図（1：20）…… 79
第14図　碗類器形分類図 …… 84
第15図　小碗器形分類図 …… 84
第16図　小皿器形分類図 …… 85
第17図　鉢類器形分類図 …… 85
第18図　２号窯碗・皿 …… 91
第19図　３号窯碗・皿 …… 91
第20図　４号窯碗・皿 …… 92
第21図　４号窯皿 …… 93
第22図　５号窯碗・皿 …… 93
第23図　灰原碗 …… 94
第24図　灰原皿 …… 95
第25図　灰原その他 …… 96
第26図　カクラン碗・鉢 …… 97
第27図　カクラン皿・その他 …… 98
第28図　西暦700～2000年の東海版考古地磁気永年変化曲線（広岡・藤澤、2003）と久分古窯跡群の考古地磁気測定結果 …… 124
第29図　出土炭化材の試料位置と検出樹種 …… 132

表目次

【第１部】調査と遺跡の概要
第１表　調査工程表 …… 10
第２表　周辺遺跡一覧表 …… 16

【第２部】瀬戸Ｃ古窯群
第１表　遺物観察表１ …… 40
第２表　遺物観察表２ …… 41
第３表　遺物観察表３ …… 42
第４表　瀬戸Ｃ古窯群から採取した考古地磁気試料個数と試料番号 …… 50
第５表　瀬戸Ｃ１号窯のＮＲＭの磁化測定結果 …… 50
第６表　瀬戸Ｃ１号窯の２．５ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 50
第７表　瀬戸Ｃ１号窯の５．０ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 51
第８表　瀬戸Ｃ１号窯の７．５ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 51
第９表　瀬戸Ｃ１号窯の１０．０ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 52
第10表　瀬戸Ｃ２号窯のＮＲＭの磁化測定結果 …… 52
第11表　瀬戸Ｃ２号窯の２．５ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 53
第12表　瀬戸Ｃ２号窯の５．０ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 53
第13表　瀬戸Ｃ２号窯の７．５ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 54
第14表　瀬戸Ｃ２号窯の１０．０ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 54
第15表　瀬戸Ｃ３号窯のＮＲＭの磁化測定結果 …… 55
第16表　瀬戸Ｃ３号窯の２．５ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 55
第17表　瀬戸Ｃ３号窯の５．０ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 56
第18表　瀬戸Ｃ３号窯の７．５ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 56
第19表　瀬戸Ｃ３号窯の１０．０ｍＴ消磁後の磁化測定結果 …… 57
第20表　瀬戸Ｃ古窯群の考古地磁気測定結果 …… 57
第21表　瀬戸Ｃ古窯群から出土した炭化材と樹種同定結果 …… 58

【第３部】久分古窯群
第１表　遺物観察表１ …… 106
第２表　遺物観察表２ …… 107
第３表　遺物観察表３ …… 108
第４表　遺物観察表４ …… 109
第５表　遺物観察表５ …… 110
第６表　遺物観察表６ …… 111
第７表　遺物観察表７ …… 112
第８表　遺物観察表８ …… 113
第９表　遺物観察表９ …… 114
第10表　遺物観察表１０ …… 115
第11表　遺物観察表１１ …… 116
第12表　遺物観察表１２ …… 117
第13表　久分古窯群から採取した考古地磁気試料個数と試料番号 …… 125
第14表　久分２号窯のＮＲＭの磁化測定結果 …… 125
第15表　久分２号窯の７．５ｍＴ（最適消磁段階）の磁化測定結果 …… 125
第16表　久分３号窯のＮＲＭの磁化測定結果 …… 126

第17表　久分３号窯の１５．０ｍＴ（最適消磁段階）の磁化測定結果 …… 126
第18表　久分４号窯のＮＲＭの磁化測定結果 …… 127
第19表　久分４号窯の１２．５ｍＴ（最適消磁段階）の磁化測定結果 …… 127
第20表　久分５号窯のＮＲＭの磁化測定結果 …… 128
第21表　久分５号窯の２．５ｍＴ（最適消磁段階）の磁化測定結果 …… 128
第22表　久分古窯群の考古地磁気測定結果 …… 129
第23表　久分古窯群から出土した炭化材と樹種同定結果 …… 130
第24表　大府市内における燃料材の樹種一覧 …… 137

写真・図版目次

【第１部】調査と遺跡の概要

写真１　共和西特定土地区画整理事業地区(空中写真) …… 2
写真２　瀬戸Ｃ古窯群の調査区の遠景 …… 8
写真３　瀬戸Ｃ古窯群の調査区の近景 …… 8
写真４　久分古窯群の調査区の遠景 …… 10
写真５　久分古窯群の調査区の近景 …… 10

【第２部】瀬戸Ｃ古窯群

図版１　１号窯 …… 21
図版２　調査区全景 …… 25
図版３　２号窯 …… 26
図版４　３号窯 …… 27
図版５　遺物写真１ …… 36
図版６　遺物写真２ …… 37
図版７　遺物写真３ …… 38
図版８　遺物写真４ …… 39
図版９　木材組織の走査型電子顕微鏡写真 …… 61

【第３部】久分古窯群

図版１　調査区全景 …… 80
図版２　窯体全景 …… 80
図版３　２・３号窯 …… 81
図版４　４号窯 …… 82
図版５　５号窯 …… 83
図版６　遺物写真１ …… 99
図版７　遺物写真２ …… 100
図版８　遺物写真３ …… 101
図版９　遺物写真４ …… 102
図版10　遺物写真５ …… 103
図版11　遺物写真６ …… 104
図版12　遺物写真７ …… 105
図版13　木材組織の走査型電子顕微鏡写真 …… 133

第１部　調査と遺跡の概要

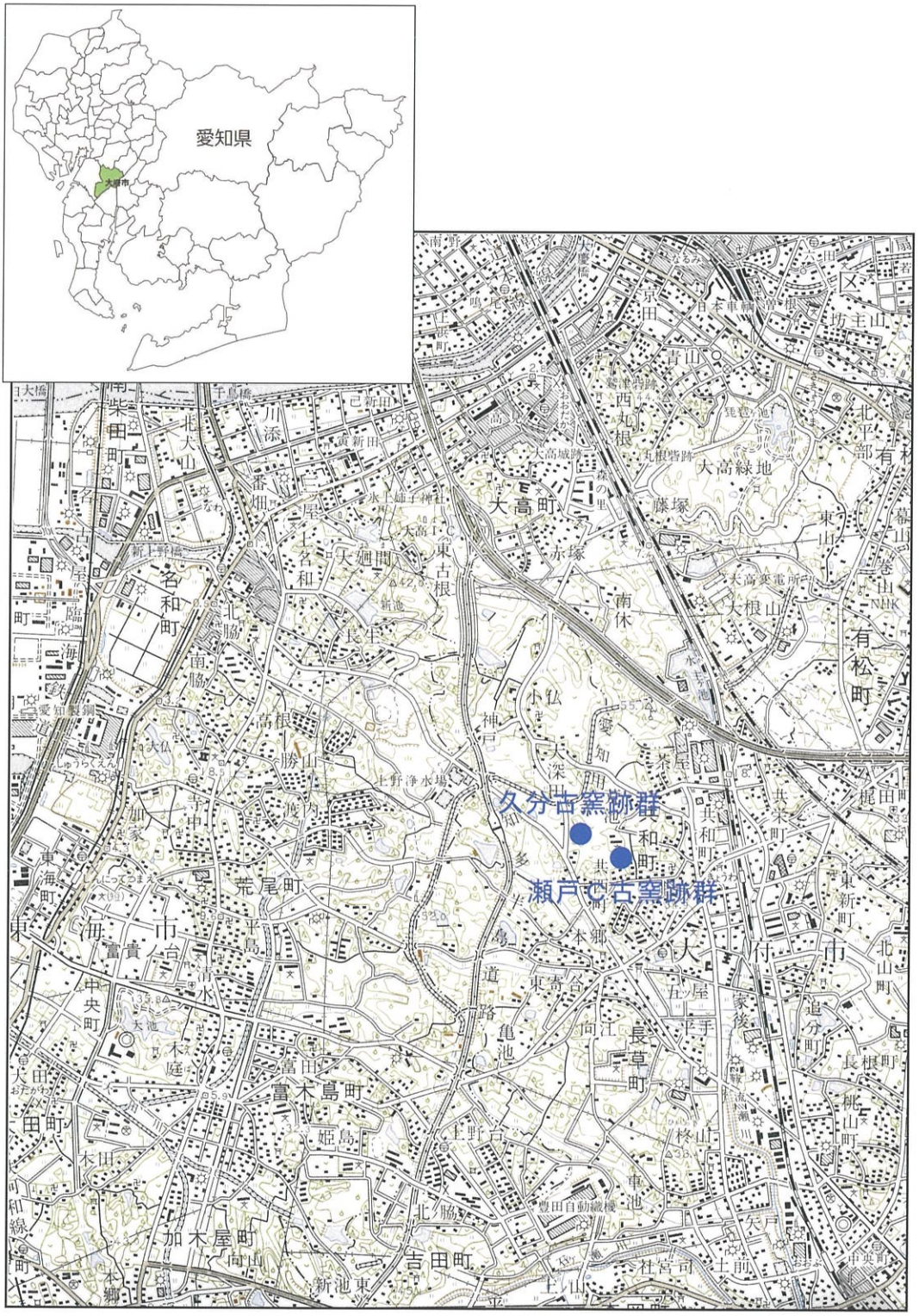
第１章　調査までの経緯

愛知県大府市は、面積33.68平方キロメートルを有し、約８万８千人の人口を抱える市である。愛知県西部、伊勢湾と三河湾にはさまれた知多半島の基部にあり、北は名古屋市緑区と豊明市、西は東海市と知多市、南は東浦町、東は刈谷市と接する①。旧郡名は知多郡である。

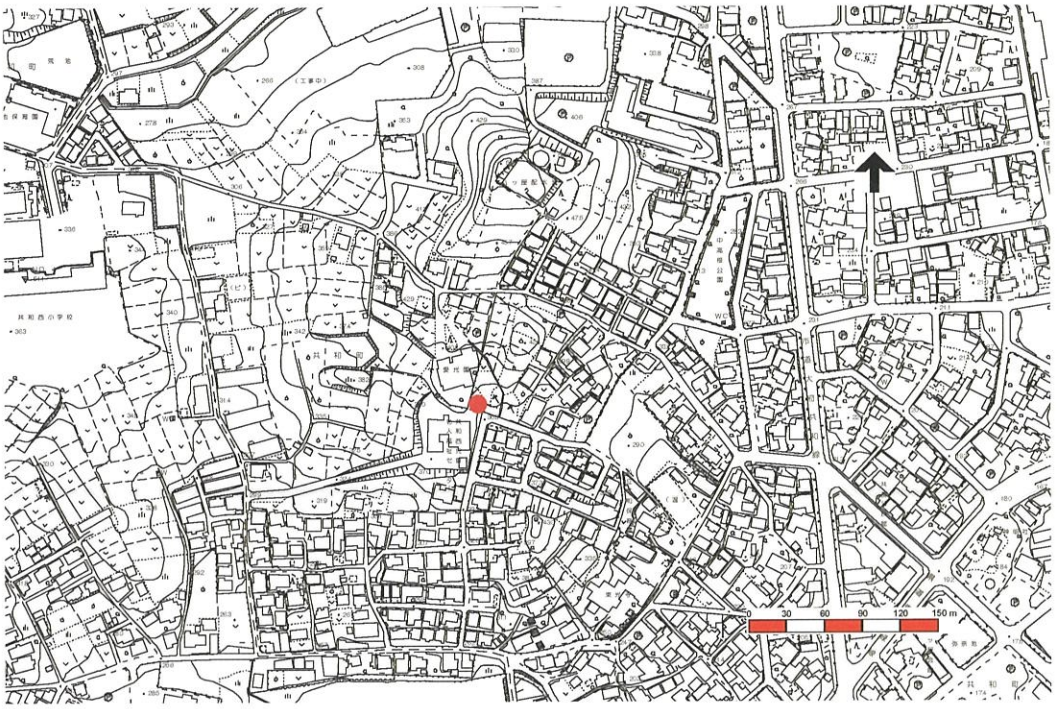
さて、県の中心都市名古屋市に接している大府市は、名古屋中心部への交通アクセスや住環境の良さから各地で住宅や工場、店舗の建設が旺盛である。特に、ＪＲ大府駅やＪＲ共和駅に近接した地域やその沿線の畑・田や雑木林は区画整理事業の対象とされ、土地利用が変化している。その中のひとつに、大府共和西特定土地区画整理事業がある。この区画整理事業が計画された頃、大府市役所区画整理課（当時）から予定地内での遺跡所在の有無の照会があり、平成１０年３月頃から随時、大府市歴史民俗資料館では事業予定地内での遺跡の踏査を行い、砂原古窯・奥谷古窯・瀬戸古窯（後に瀬戸Ａ古窯と改称）・瀬戸遺跡（後に瀬戸Ｂ古窯群と改称）・久分古窯群の所在を把握するに及んだ。さらに、瀬戸Ｃ古窯群は平成１６年に瀬戸Ｂ古窯群の発掘調査中に偶然発見するに及び、瀬戸Ｃ古窯群と命名した。以上の結果は、毎年改定している「大府市遺跡等分布図」に掲載し、周知させた。

久分古窯群では平成１７年２月１８日、大府市教育委員会（大府市歴史民俗資料館実施）が本発掘調査前に範囲確認調査を実施した。その結果、窯は窯本体の遺構を５基確認、基灰原など関連遺構が現在も残存していることを突き止めた。だが、遺構に愛知用水支線（土管状）が横切っていることも判明した。瀬戸Ｃ古窯群は平成１６年度に実施した瀬戸Ｂ古窯群の本調査時に範囲確認調査を行った。両遺跡の本調査は平成１７年度に実施し、市教育委員会が業者に委託して、瀬戸Ｃ古窯群と久分古窯群を平成１７年６月１日から開始した。なお、瀬戸Ｃ古窯群は、前年度に一部調査した箇所からの継続であった。なお、それぞれの調査面積は１０００㎡、１１０㎡とした。

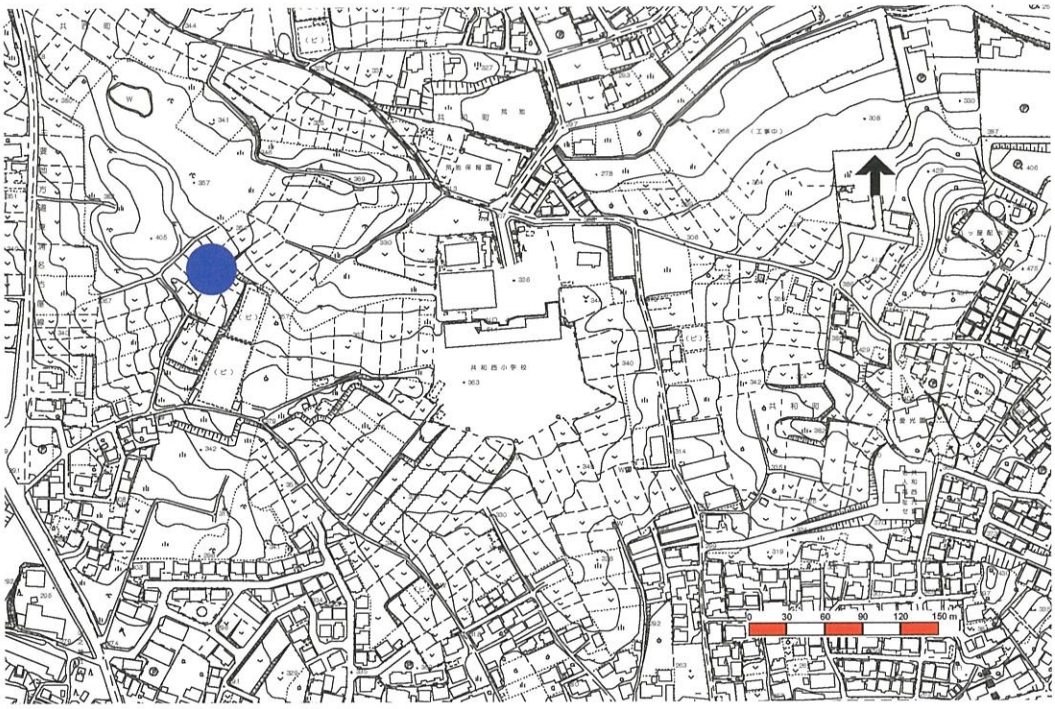
写真１　共和西特定土地区画整理事業地区（空中写真）



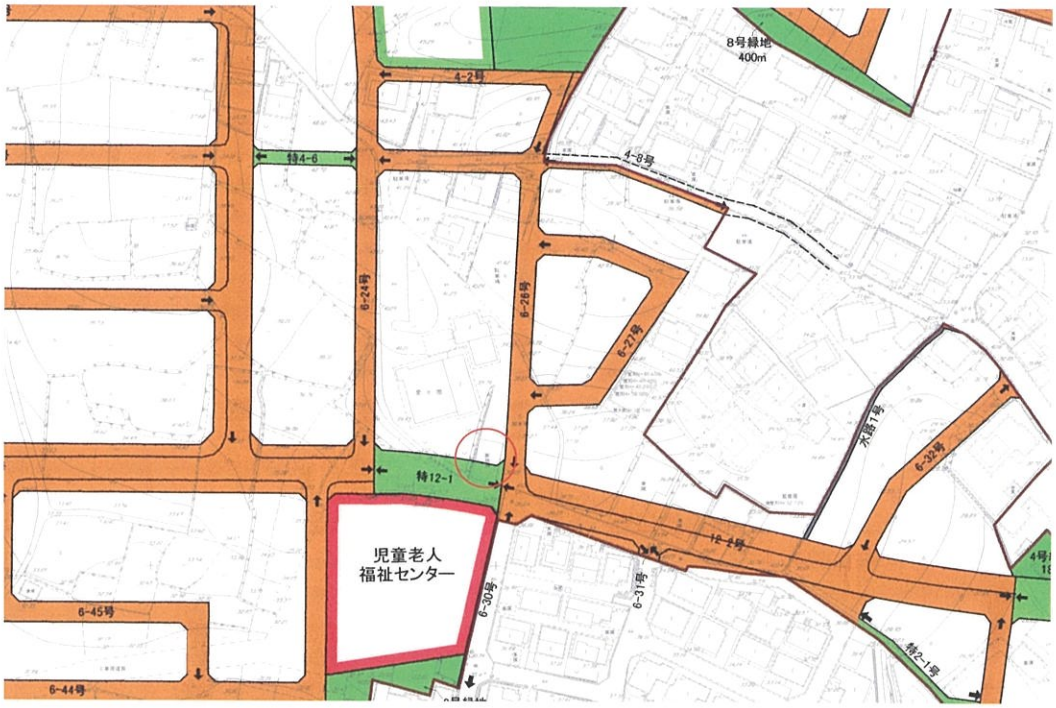
第１図　遺跡位置図（国土地理院１／５万地形図「名古屋南」に加筆）



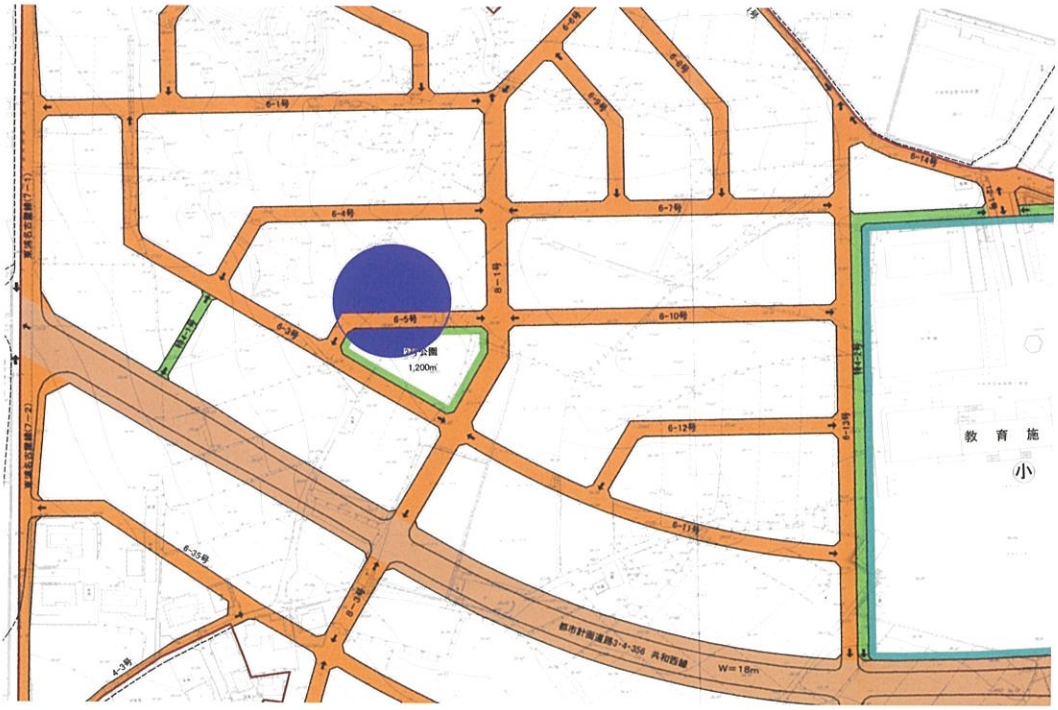
第２図　瀬戸Ｃ古窯群調査前地形図



第３図　久分古窯群調査前地形図



第４図　瀬戸Ｃ古窯群調査現況位置図（1/1500）



第５図　久分古窯群調査現況位置図（1/1500）

第２章　調査概要

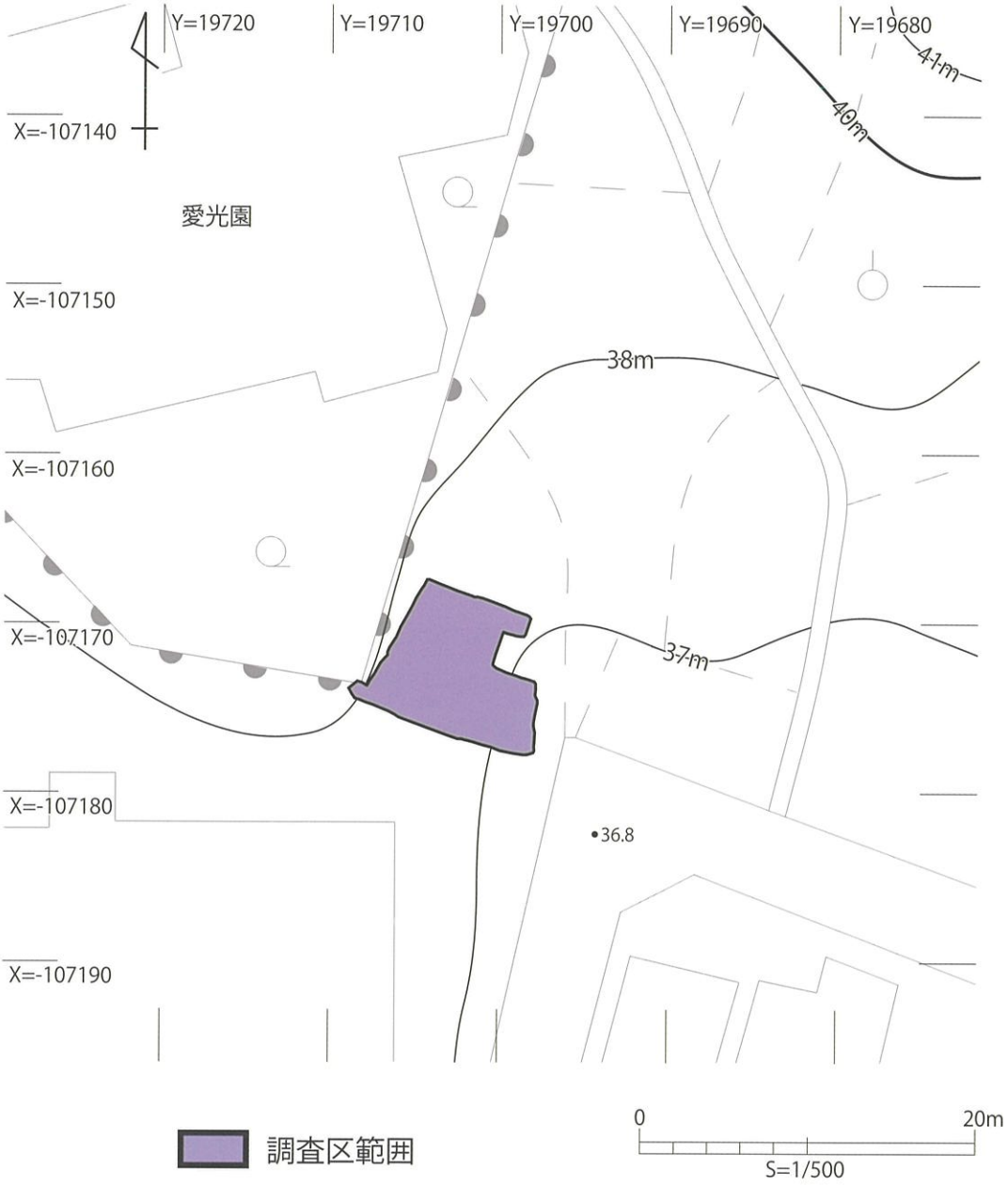
瀬戸Ｃ古窯群

遺跡は丘陵地の標高が高い場所の一角で、すでに造成など人の手が入った土地であった。発見されたのは平成１６年１０月頃で、この時は建設資材置き場の跡地で、西隣は愛光園（当時）という障がい者施設が建っていた。南隣は、南に傾斜した畑であり、そこには碗・皿の破片を拾うことができたが、瀬戸Ｃ古窯群発見以前のことだったので、どこの遺跡の遺物か、ここに遺跡が隠れているのかは不明であった。この畑には現在、大府市共和西児童老人福祉センターが建設されている。瀬戸Ｃ古窯群の所在地は、地主の記憶によると１９６０年代は畑として利用しており、当時窯跡のような物を目撃したという証言がある。遺跡の周辺には、北に瀬戸Ｂ古窯群（調査済）、東に瀬戸Ａ古窯が近在する。

遺跡の状態は悪く、遺構の上部が整地による削平により破壊され、平面的にも半分ほどが削り取られていると思われる状態であった。残存している窯跡は削り取られた面で確認でき、丹念に痕跡を確認すると、３基の窯が存在した。遺物は皆無であった。遺跡の位置は、把握できていたので、試掘調査は行わず、確認できた遺構を中心に１１０㎡の調査区を設定し、平成１６年１０月以降に本調査を開始し、残りの部分を１７年度に調査することとした。

第１次調査は、平成１６年１１月４日に着手し、窯体本体を確認した場所を中心に調査区を定め、その調査区には国土座標に準じたグリッド杭を設定した。遺構の位置は確認しているので、遺構跡にしたがって全体像を確認することから始めた。第１次調査で窯体の全体像を検出後、窯内にベルトを設定し、窯内埋土の除去、埋土の土層図面を作成して終了した。第２次調査は、平成１７年６月１日から開始し、２号窯・３号窯の掘下げを開始した。調査は、窯内→灰原→床面下の順で進めた。窯内のベルトを除去し、平成１７年９月２１日に遺跡の空撮を行った。その後、床面下に遺構が埋もれていないかを確かめるために、窯内に掘削位置を定め、そこを溝状に掘下げた。必要な図面を作成し、記録写真の撮影をした。その後、窯体の断ち割り、窯体床面下の確認作業と記録作業、熱残留磁気測定調査のサンプリングと順次すすめ、灰原の補足調査を行って、１０月１５日までに現場での作業を終了した。

瀬戸Ｃ古窯群と久分古窯群の出土品整理作業は、前者が平成１８年度、後者が１７年度から開始し、１８～２１年度にかけて遺物の洗浄、注記・接合・仕分け・分類、２３～２４年度は遺物の図面作成と調査記録の整理、原稿作成などを行った。報告書刊行準備は平成２４～２５年度にかけて準備し、報告書として刊行に及んだ。



第 6 図　瀬戸Ｃ古窯群調査前地形図

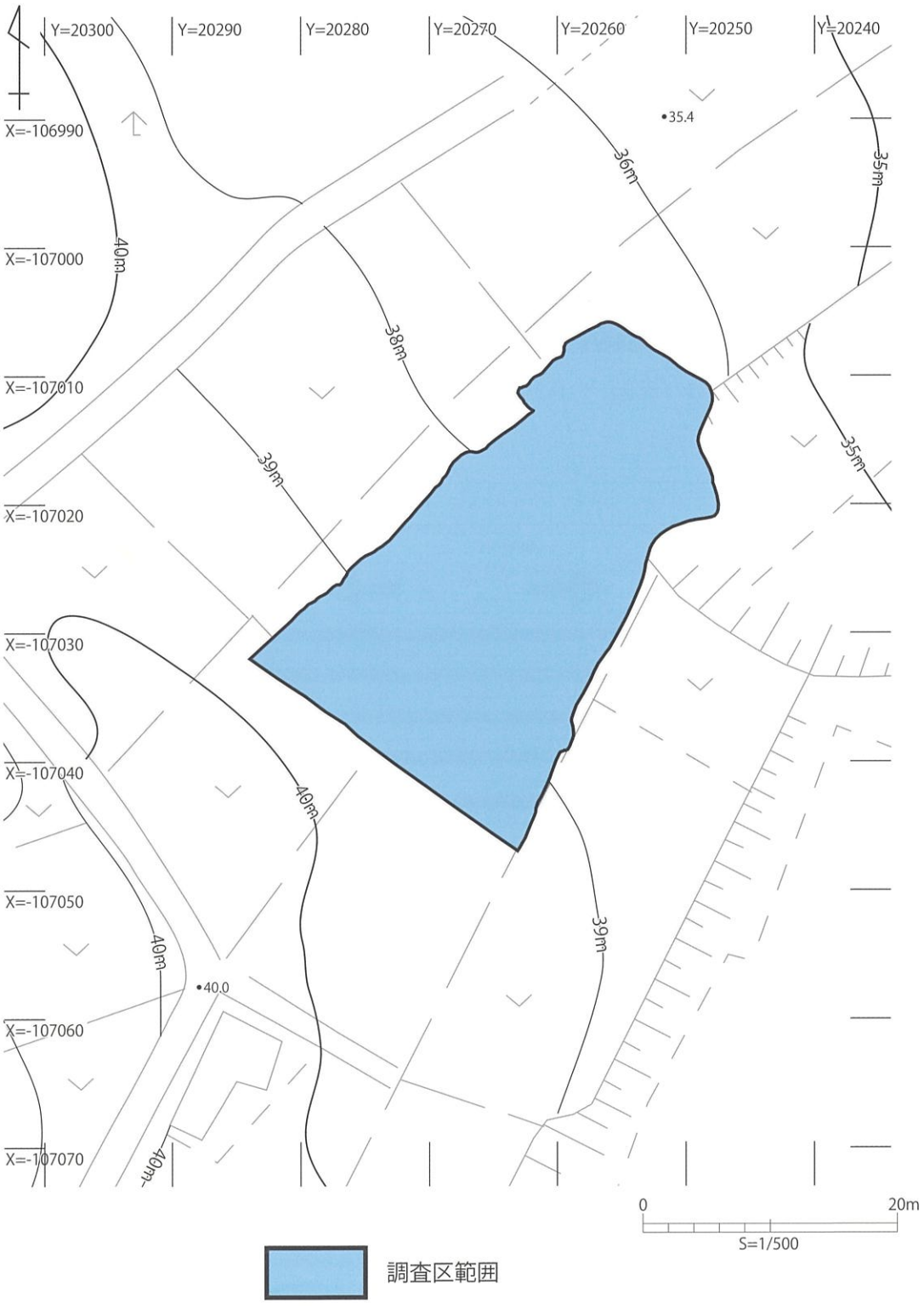
写真２　瀬戸Ｃ古窯群の調査区の遠景

写真３　瀬戸Ｃ古窯群の調査区の近景

久分古窯群

この久分古窯群は、大府市立共和西小学校から西へ数百メートル離れた農地の中に存在した。ここは丘陵地の高台に開墾された農地の一角で、北方向に傾斜していた。遺跡発見は遺跡分布調査の成果によるもので、近年になって公式に確認された。農地には碗や皿の破片が散見されたことは言うまでもないが、雨水により耕作土を押し流して地山が露出しているところに、窯体の一部が見えていた。これにより、ここに遺跡が埋もれていることはまず間違いないと思われた。ただし、規模については試掘調査を経てからでないと確かなことは言えない状況であった。そこで平成１７年２月１８日に試掘調査を行った。遺構らしきものが存在するところに焦点を絞り、重機によって畑の耕作土を剥ぐようにして遺構（窯跡）を探った。また畑の傾斜と直交する東西の試掘坑を決め、掘削も実施した。合計２本程度の短い試掘坑であった。その結果、５基の窯体と灰原を確認した。遺構の一部は工事区域外の東へ広がっていた。また遺跡を斜めに横切る形で愛知用水のコンクリート製の土管が埋設されていることも同時に判明した。愛知用水建設時に破壊されている部分はあるものの、遺跡は相当程度残存していることが把握できた。

本発掘調査は、平成１７年６月３日から開始した。表土を重機により剥ぎ、調査区を検出して遺構の位置を見定め、国土座標に準じたグリッド杭を設定した。手掘で調査を進め、灰原→窯体→窯内→床面下の順で進めた。窯体には縦１本と横３～４本の埋土状況を確認するためのベルトを設定し、図化した。図面が完成したベルトを除去し、平成１７年９月２１日に遺跡の空撮を行った。その後、床面下に遺構が埋もれていないかを確かめるために、縦１本と横２～３本の溝を窯内に定め、そこを溝状に掘下げ、床面下に遺構が隠れていないかを確認した。調査中は随時、報告書に必要な情報を収集し、図面の作成や記録写真を撮影した。熱残留磁気測定を１０月１日に行い、炭化物採取などを加えて可能な限り科学的調査を付け加え、１０月２７日に現場での調査を終了した。



第７図　久分古窯群調査前地形図

写真４　久分古窯群の調査区の遠景

写真５　久分古窯群の調査区の近景

年度	内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平成16年度	試掘・本調査				●瀬戸C			←	本調査		→		
平成17年度	本調査			←	久分　本調査			→					
平成19年度	出土品一次整理	←										→	
平成20年度	出土品一次整理	←										→	
平成21年度	出土品一次整理	←										→	
平成22年度	出土品二次整理	←										→	
平成23年度	出土品二次整理	←										→	
平成24年度	出土品二次整理・資料整理・編集	←										→	
平成25年度	報告書編集・刊行	←										→	●刊行

第１表　調査工程表

第３章　遺跡の位置と地形および周辺の歴史的環境

地形地質

愛知県の地質は、新生代古代三紀までと、新第三紀中新世以降とに大別される②。伊勢湾周辺の地域には、やや固結した礫・砂・シルト・泥層からなっている丘陵が拡がっており、これらは東海層群と呼ばれ、地層が見られる地域毎に呼称が異なる。例えば、濃尾平野より東のものは瀬戸層群、知多半島の北中部は常滑層群、半島南部は師崎層群、と呼ばれる。

地質年代は、最下部層は中新統最上部、下部層は下部鮮新統、中部層は上部鮮新統、上部層は鮮新統最上部、最上部層は下部更新統と考えられている③。半島南部の師崎層群は、今からおよそ 1,600 万年前の第三紀中新世中頃に堆積した砂岩・凝灰質泥岩および凝灰岩からなる海成層である。半島北中部の常滑層群は、師崎層群よりも新しく、第三紀末の鮮新世に存在した東海湖と呼ばれる淡水湖に堆積した淡水性堆積物で、砂層・泥層・亜炭層・砂礫層から構成されている。この地層は、尾張丘陵の瀬戸層群の延長と考えられている。

知多半島は、南端部分を除けば、おおむね南北に標高 50～80ｍほどの丘陵地が続いている。その北端は尾張丘陵の南端と半島北部の大府丘陵との境になると言われている④。大府市が位置する知多半島北部は、地形的には尾張丘陵の延長と考えられ、尾張丘陵に属する有松丘陵と大府丘陵および知多丘陵とからなる。有松丘陵と大府丘陵は、北流する大高川（伊勢湾に注ぐ）と南流する鞍流瀬川（三河湾に注ぐ）の谷中分水界が見られる低地を境とし、大府丘陵と知多丘陵は、大田川（東海市）の本・支流の作る谷によって隔てられている。これら三つの丘陵のうち、大府市には、有松丘陵と大府丘陵が含まれ、それぞれ東部の丘陵、西部の丘陵と称される。東部の丘陵は、標高 40～50ｍでやや急な斜面をなしている。それに対して西部の丘陵は、標高 70ｍを超える丘陵もあるが、およそ 40ｍで傾斜のゆるやかな丘陵地が広がる。

河川流域の地形は、大府市では丘陵の上にわずかに残る高位段丘面を別にすれば、境川右岸や石ヶ瀬川の河岸段丘が見られる。これは、第四紀(*Quaternary*)更新世(*Pleistocene*)後期(*Late*)に形成された低位段丘層(*Lower terrace deposits*)や中位段丘層(*Middle terrace deposits*)で、標高 10～20ｍの各段丘面は比較的小規模で点在している。この地層は、名古屋市の熱田台地を形成している熱田層や知多半島の半田層・野間層などと同時期のものである。低地は、第四紀(*Quaternary*)完新世(*Holocene*)の潮汐低地(*Tidal flat*)・後背湿地(*back swamp*)・河道堆積物(*channel deposits*)や谷低平野堆積物(*Valley plain deposits*)からなり、開析された丘陵深部まで入り込み、平坦面を形成している⑤。

土質について参考となる資料が存在する。大府市長草町において実施された深度 800ｍに達するボーリングでは、厚さ約 520ｍの東海層群の下位に、厚さ約 260ｍの海成中新統が存在することが確かめられている⑥。

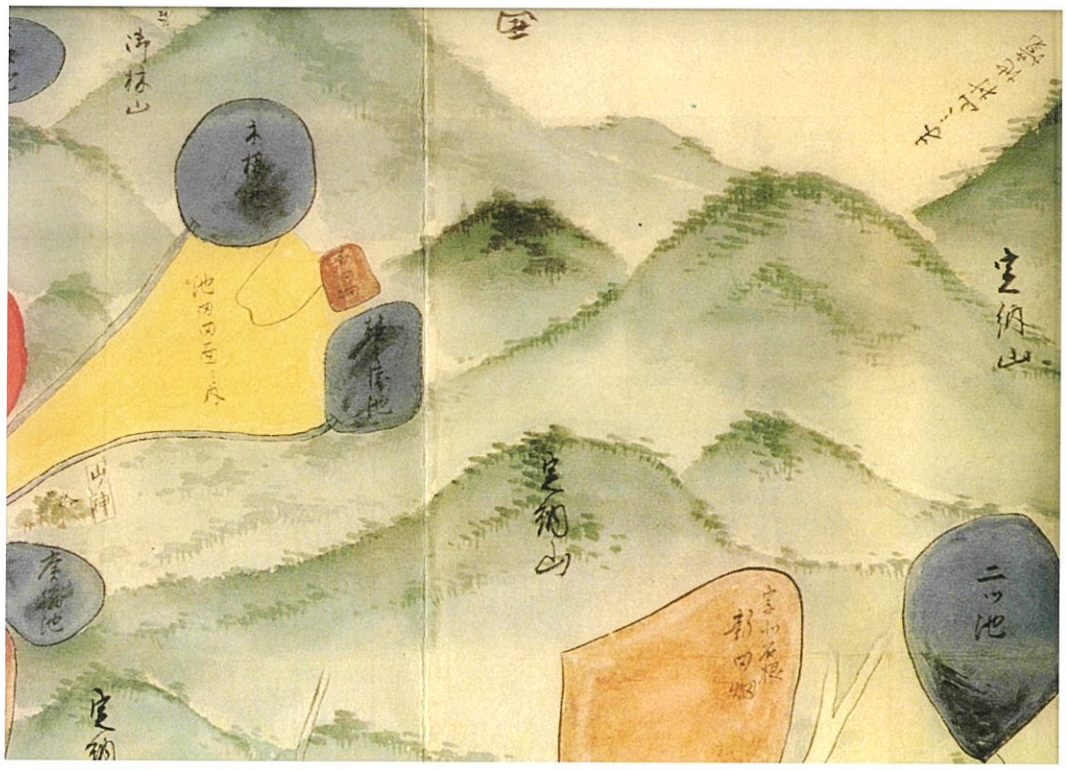
本窯跡の立地する丘陵は、常滑層群という陶器原料粘土やみがき砂（火山灰）・褐炭が含まれてい

る地層が広がる。常滑層群は、厚さ２～３ｍ程度の粘土層と砂層とが交互に積もった地層群である。粘土層は陶器生産の原料を供給するとともに窯体を構築するベースとなったと考えられ、周辺に窯跡が分布している事実がそのことを物語っている。

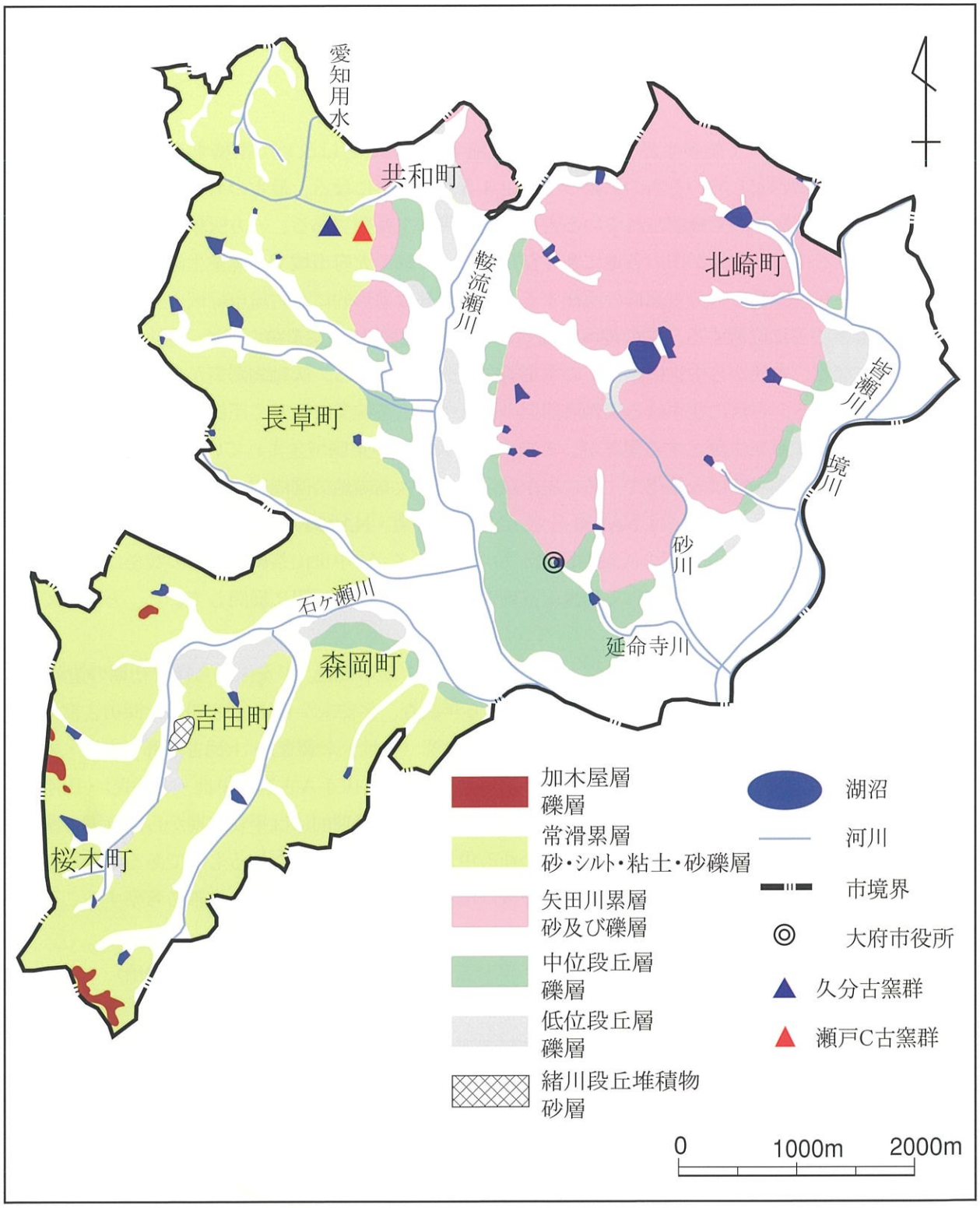
地名

現在、瀬戸Ｃ古窯群や久分古窯群のあった地区は大府市共和町という地域であるが、小字を調べると、かつては「瀬戸」「久分」という小字が付けられていた。遺跡名はこの小字を生かした命名である。

瀬戸Ｃ古窯群や久分古窯群のあった地区は、江戸期には八ツ屋新田の領域に属した。徳川林政史研究所所蔵の天保１２年（１８４１）の「知多郡八ツ屋新田図面」という村絵図によれば、遺跡のあった想定されるところは「定納山」・「御林山」と名付けられた森として描かれている。残念ながら遺跡の存在を示唆する記載はない。しかし「瀬戸」という地名は焼き物を連想させるものであるが、この小字名は天保の絵図には記されていないし、管見の限り江戸期の文書でも確認できない。だが、明治１５年（１８８２）の「愛知県郡町村字名調」には記載されているので、明治期以降の地名と目されるが、窯業遺跡が存在する事実と関連させて考えると「瀬戸」という地名は焼き物の存在を暗示したものと言えよう。



第８図　江戸末期の瀬戸Ｃ古窯群・久分古窯群付近（『大府市誌』近世村絵図集より）



第９図　大府市の表層地質図（『日本地質図大系』〔名古屋市南部、知多半島より加筆・修正〕）
（『瀬戸Ｂ古窯跡群・奥谷古窯跡』所収図面を修正）

周辺の古窯・歴史的環境

古代から中世にかけて知多半島基部は窯業生産地であったことは改めて指摘するまでもない事実である。その数は判明しているものに限っても１４５か所以上になる。最古のものは野々宮古窯や高根山Ｃ古窯群など数か所で確認されている古代の灰釉陶器生産窯である。一方灰釉陶器の技術を継承したといわれる中世常滑窯が市内各地に多く存在する。これが大府市域での窯業生産の概略である。

さて、瀬戸Ｃ古窯群や久分古窯群の所在する市内北西部は地形的に名古屋市緑区・東海市の丘陵地につながるところに位置する。この地区は周知のとおり圧倒的に窯業遺跡が多く、図示すると第 10 図のようになる。古代から中世にかけての窯業遺跡が分布している。灰釉陶器窯から中世山茶碗窯に属する遺跡である。古代に含まれる灰釉陶器窯の数は中世山茶碗窯に比して圧倒的に少ない。灰釉陶器は猿投山西南麓を発生源とする窯だが、その南限に大府市の東側が含まれている⑦。大府市北西部や東海市では灰釉陶器窯は未確認で、名古屋市緑区のうち大高緑地公園周辺（国道２３号線と名古屋鉄道本線に挟まれたエリア）には NA203 号窯・NA204 号窯・NA205 号窯・NA305 号窯（南平部２号窯群）・銭瓶谷古窯群の５箇所の灰釉陶器窯が知られているが、中世山茶碗窯はその数をはるかに上回る遺跡が確認されている。おそらく中世山茶碗窯は、ほぼ丘陵地一円に展開していた、と考えても無理はない状況を呈している。

瀬戸Ｃ古窯群や久分古窯群の周辺には、砂原古窯（平成１５年調査、平安末から鎌倉初期の遺跡）・奥谷古窯（平成１６年調査）・瀬戸Ｂ古窯群(平成１６年調査、平安末から鎌倉初期)・大深田古窯（中世・未調査）・荒池古窯群（中世・未調査）・権兵衛池古窯（中世・未調査）・上徳古窯群（中世・未調査）・才田Ａ古窯（中世・未調査）・才田Ｂ古窯（中世・未調査）山手Ａ古窯（中世・未調査）・山手Ｂ古窯（中世・未調査）など数多くの窯業遺跡が存在している。時期的には平安末期から鎌倉期の窯業跡と想定され、主力焼成品と窯規模から、いわゆる中世山茶碗窯に分類されるものである。今後も同地域での分布調査を進めていけば、さらにその数は増加し、中世窯業の展開を詳細に考察することが可能となろう。

（古田功治）

註（第１～３章）

①大府市役所『大府市誌』資料編　自然　18 頁　（大府市役所　1998 年）

②大府市役所『大府市誌』資料編　自然　14-36 頁（大府市役所　1998 年）

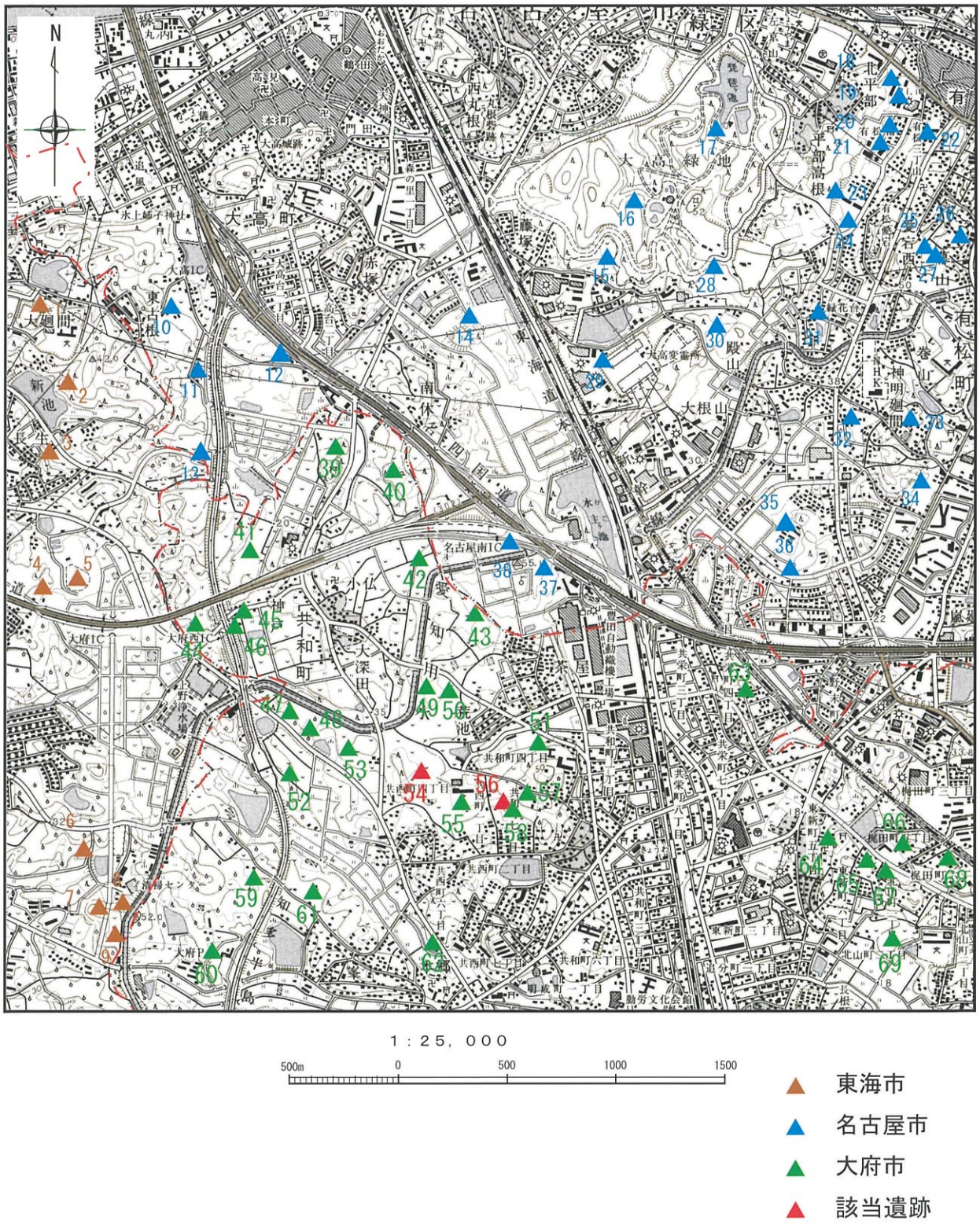
③山下　昇編『日本の地質５　中部地方の地質Ⅱ』130－177 頁（共立出版株式会社　1988 年）

④牧野内猛・中山勝博「東海層群－1　伊勢湾東岸地域」（『URBAN　KUBOTA』№29　1990 年）

⑤猪木幸男『日本地質図大系　中部地方』（朝倉書店　1991 年）

⑥桑原　徹『濃尾盆地と傾動地塊運動』7　235－347 頁（第四紀研究　1968 年）

⑦斉藤孝正「中世猿投窯の研究～編年に関する一考察～」（『名古屋大学文学部研究論集』Ｃ１史学 34　1988 年）、藤澤良祐「山茶碗の生産体制」（「中世常滑焼をおって」資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所　1994 年）、「第１節　序説」『愛知県史』別編窯業３　中世近世常滑系（愛知県　2012 年）



第 10 図　周辺遺跡分布図（『瀬戸 B 古窯跡群・奥谷古窯跡』所収図面を修正）

東海市

番号	遺跡名称	主要遺物
1	大根古窯	碗・皿
2	膳棚古窯	碗・皿
3	西萌山古窯	碗・皿
4	座頭ケ峰古窯	碗
5	法秀古窯	碗・皿・鉢・短頸壺 子持器台
6	奥山池４号窯	碗・皿・鉢
7	奥山池第1号窯	碗・皿
8	奥山池第2号窯	碗・皿
9	奥山池第3号窯	碗・皿

名古屋市

番号	遺跡名称	主要遺物
10	天楽山古窯	碗・皿
11	蔵王殿古窯	碗・皿
12	銭瓶谷古窯群	須恵器・灰釉陶器・碗
13	定納山古窯群	碗・皿
14	東植松古窯	碗・皿
15	NA205号窯	灰釉陶器・碗・皿
16	NA307号窯	碗・皿
17	NA306号窯	碗・皿
18	NA302号窯	碗・皿
19	NA203号窯	灰釉陶器
20	NA204号窯	灰釉陶器
21	NA305号窯（南平部2号窯群）	碗・皿
22	NA304号窯	碗・皿
23	NA311号窯（露根西古窯群）	碗・皿
24	NA312号窯	碗・皿
25	NA309号窯	碗・皿
26	NA308号窯	碗・皿
27	NA310号窯	碗・皿
28	NA313号窯（北忠治山古窯群）	碗・皿
29	NA315号窯	碗・皿
30	NA314号窯	碗・皿
31	NA316号窯	碗・皿
32	NA317号窯	碗・皿
33	NA318号窯	碗・皿
34	NA323古窯群（六ヶ廻間）	碗・皿
35	NA321号窯	碗・皿
36	NA322号窯（清水山古窯群）	碗・皿
37	高根山古窯	碗・皿
38	NA335古窯	碗・皿

大府市

番号	遺跡名称	主要遺物
39	子安古窯	灰釉陶器・碗・皿
40	別岨古窯群	碗・皿
41	下入道古窯	碗・皿
42	大廻間古窯	碗
43	上徳古窯群	碗・皿
44	上入道古窯	碗・皿
45	才田A古窯	碗・皿
46	才田B古窯	碗・皿
47	木根A古窯群	碗・皿
48	木根B古窯群	碗・皿
49	大深田古窯	碗・皿・壺
50	荒池古窯群	碗・皿
51	砂原古窯	碗・皿
52	木根C古窯	碗・皿
53	権兵衛池古窯	碗・皿
54	久分古窯群	碗・皿・鉢・壺
55	奥谷古窯	碗・皿
56	瀬戸C古窯群	碗・皿・片口
57	瀬戸B古窯群	碗・皿・鉢・硯
58	瀬戸A古窯群	碗
59	西怱場古窯	碗・皿
60	石原古窯群	碗・鍋
61	笹山古窯	碗・皿
62	下北山古窯群	碗・皿
63	上り戸古窯	碗
64	八代山B古窯	
65	八代山A古窯	碗・皿
66	梶田B古窯群	碗・皿
67	八代山C古窯	碗
68	梶田古窯	碗
69	北山古窯	碗・皿

※緑色で塗りつぶしたところが報告書対象遺跡である

第２部　瀬戸Ｃ古窯群

第１章　遺　構

第１節　窯体について

瀬戸Ｃ古窯群では窯体を３基検出した。南東から北西側にほぼ平行に並び東から順に１号窯、２号窯、３号窯と名付け、焚口はいずれも北東を向いている。１号窯と２号窯の間は約４ｍ離れ、２号窯と３号窯は約２ｍの距離がある。いずれの窯体も後世の掘削により部分的にしか遺存していない。窯体上部や天井、窯壁の多くは破損していたが構造からいずれの窯も窖窯（あなかま）であると考えられる。遺物内容の中心は山茶碗と皿がほとんどである。

第１図　遺構配置図（1：100）

１・２号窯は焼成室の一部、３号窯は焼成室から燃焼室、焚口付近の一部が残存している。今回の調査では敷地に制約があったため３号窯については南東部分のみの調査となった。前庭部や灰原は後世の掘削による影響のため不明瞭で詳細は判然としなかった。

１号窯

１号窯は調査区の南東部で調査区南東角より西へ約１m、標高約 37.00m 付近に位置し残りはほぼ平坦である。主軸はＳ－19°－Ｅを指向し、確認可能な長さは約 3.70m で、幅は約 1.30mである。焚口・焼成室・分焔柱・燃焼室の大半と煙道部はほとんど遺存せず、焼成室の一部が遺存していたが残存状況は不良で焼成室の傾斜も測ることが出来ないほどであった。床面は一部が被熱で焼き締まり、色は赤褐色を呈していた。床面を断割る調査を実施したが、遺物は確認しなかった。

２号窯

２号窯は調査区の中央部に位置し、標高約 36.50m付近である。主軸はＳ－19°－Ｗを指南し、窯体は焼成室の一部を残し、後は消失していた。窯体は焚口を北東に向けて築窯されており、残存長は約 4.20mで燃焼室の残存幅は約 2.50mを測る。遺存していた燃焼室の状態はやや良好である。側壁は左右両方とも一部が残存した。床面の傾斜は確認できなかった。

分焔柱は基底部が僅かに残存し、基底部の幅は約 60 ㎝で楕円形を呈し、地山掘り残しによって作られたものと推定される。分焔柱中央部での幅は、床面で約 1.80m、通焔孔の床面幅は北側が約 50 ㎝で南東側は約 70 ㎝を測る。

床面は被熱により一部が焼き締まり、赤褐色を呈していた。床面を断割る調査を実施したが、遺物は確認されなかった。

３号窯

３号窯は調査区の北西部に位置し、標高約 37.00m付近が遺存している。窯体は焼成室と焚口付近が残り、焚口を北東に向けて築窯しており、煙道部は南西にあったものと推定される。焼成室には一部天井部分が遺存している。

窯体の残存長は約 6.00m、燃焼室の幅は縦半分の東側部分しか測定出来ないため１m 以上としか言えないが、恐らく約 2m 以上になるであろうと推測される。

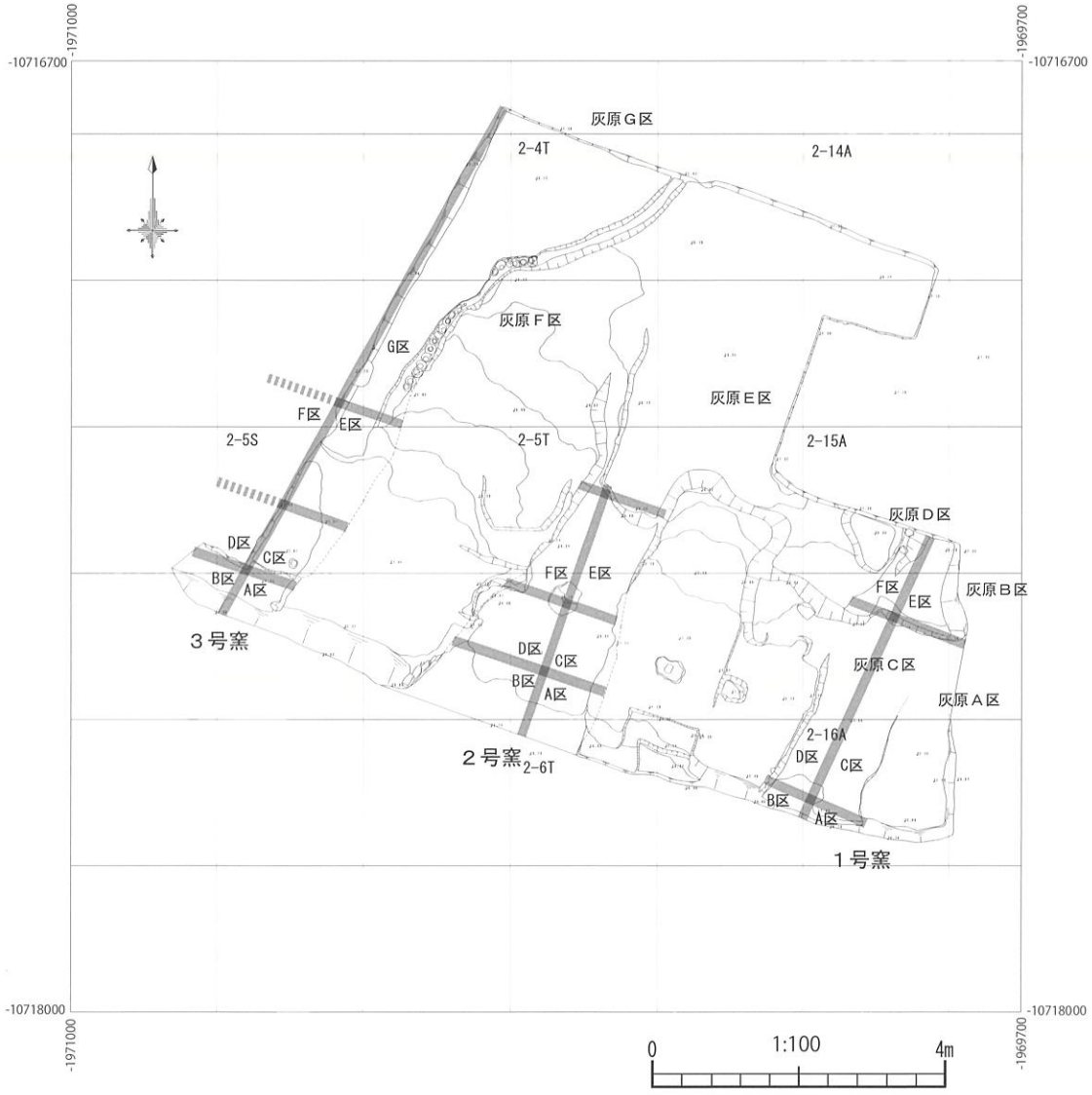
主軸はＳ－19°－Ｗを指南し、遺存していた燃焼室の状態はやや良好である。側壁は左右両方とも一部が残存していた。

床面の傾斜は残存する焼成室で約 17°を測る。床面は被熱により一部焼き締まり、上層から黒褐色、明黄褐色、明赤褐色、にぶい黄色を呈していた。

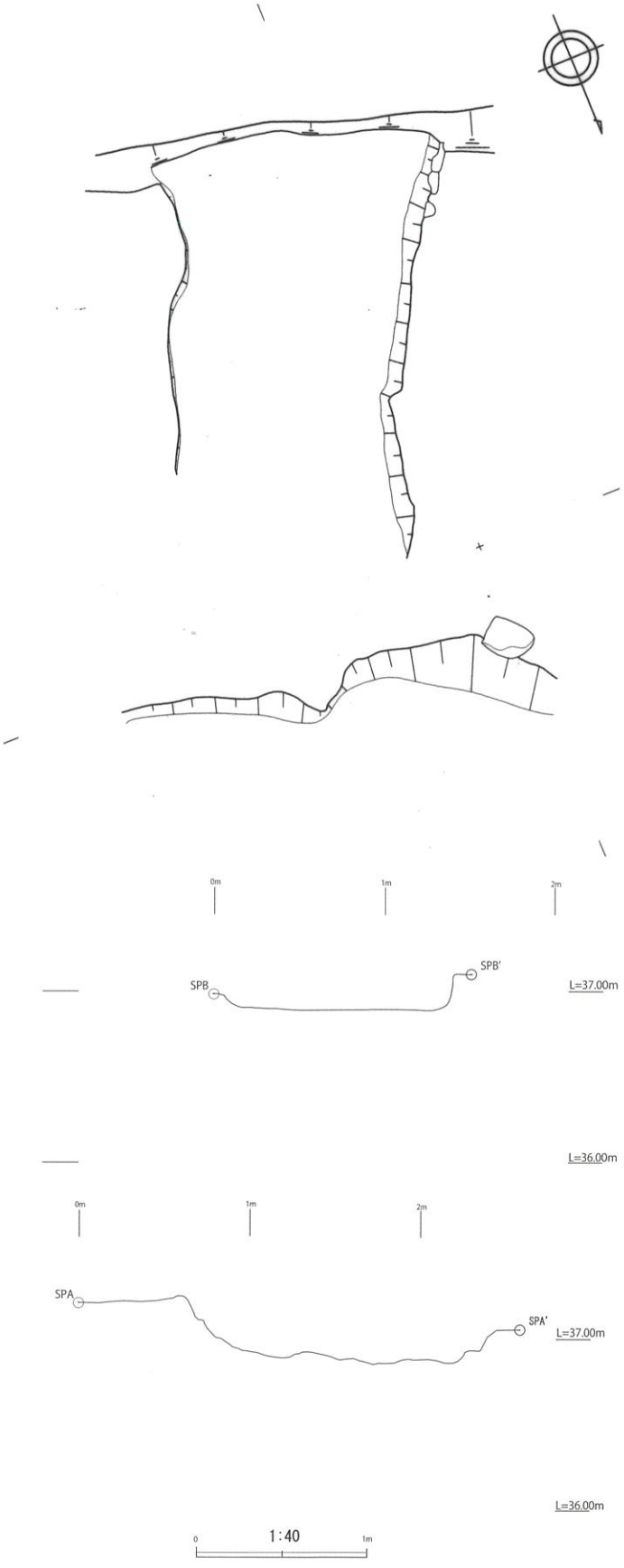
床面を断割る調査を実施したが、遺物は確認されなかった。焚口付近より排水溝と推定される溝を検出した。その溝からは伏せた山茶碗が確認された。

前庭部及び灰原

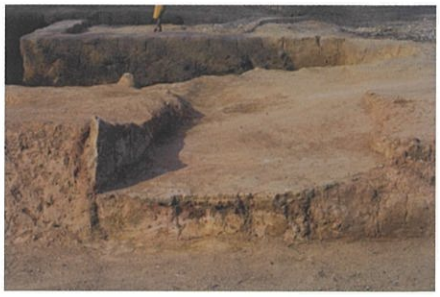
前庭部や灰原は後世の掘削による影響のため不明瞭で詳細は判然としなかった。



第２図　調査区略図



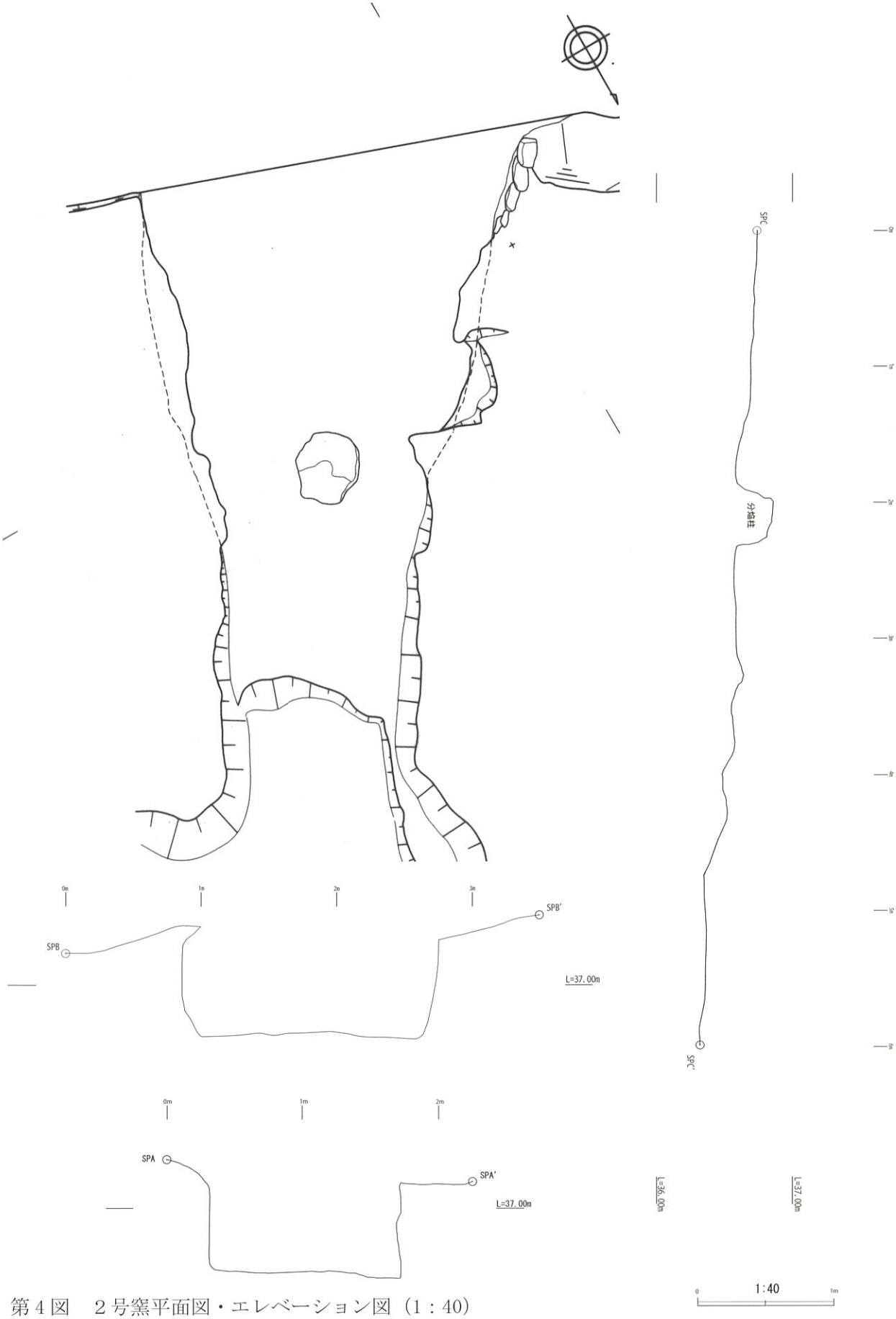
第3図　1号窯平面図・エレベーション図（1：40）



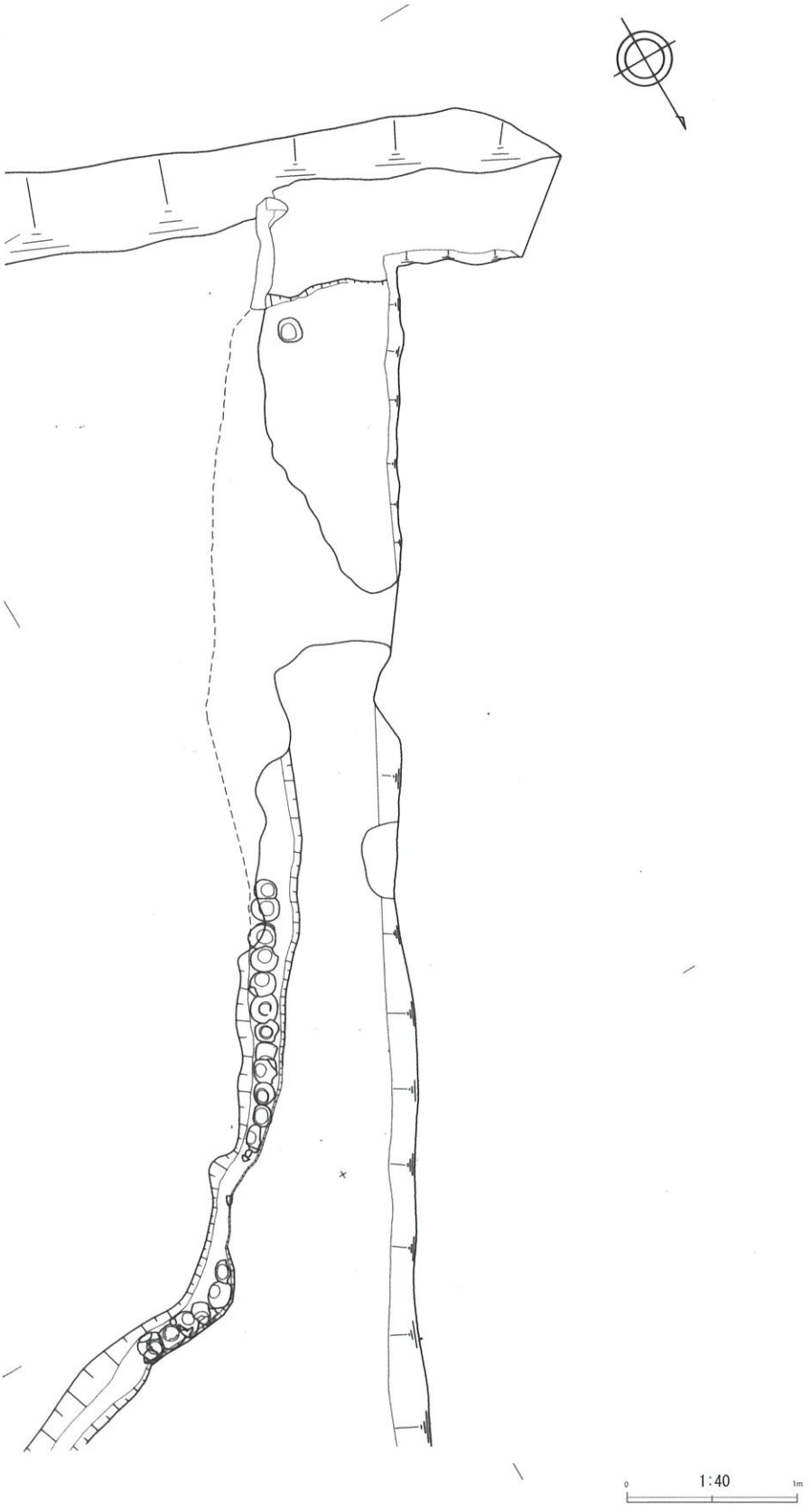
1　1号窯完掘状況（南から）

2　1号窯断ち割り状況（北から）

図版1　1号窯



第４図　２号窯平面図・エレベーション図（1：40）



第5図　3号窯平面図（1：40）

第６図　３号窯エレベーション図（1：40）

図版 2 調査区全景

3　２号窯焼成室埋土（西から）

4　２号窯分焔柱付近（東から）

5　２号窯燃焼室埋土（東から）

6　２号窯焚口付近埋土（東から）

7　２号窯焼成室埋土（南から）

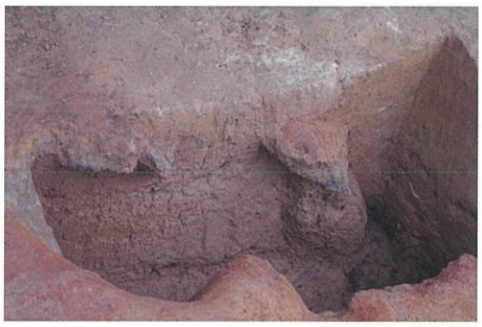
8　２号窯遺物出土状況（西から）

9　２号窯遺物出土状況（南東から）

10　２号窯断ち割り状況（北から）

図版３　２号窯

11　３号窯焼成室埋土（東から）



12　３号窯分焔柱付近（東から）

13　３号窯天井部分（南から）

14　３号窯燃焼室埋土（南から）

15　３号窯燃焼室埋土（北から）

16　３号窯燃焼室排水溝（南から）

17　３号窯排水溝（西から）

図版４　３号窯

第２章　遺　物

第１節　器形分類

今回の発掘調査で見つかった遺物は、36リットルコンテナに約47箱で点数にして2535点である。その主な出土遺物は、山茶碗・小皿・片口山茶碗・片口碗である。その内、底径が1/2以上あるものを１個体として数えたところ1422点であった。

碗

体部の形は直線的で、器壁の厚さは体部から口縁部まで大きな変化は見られない。高台の作りは雑で、端部にもみ痕が付着し潰れている。口縁部の形状は大きく２つに分かれている。一つはやや外反し薄く締まっているもの、もう一つは口縁部分が締まり無く肥厚しているもので、前者をＡ類、後者をＢ類とした。

その法量は、Ａ類で平均が口径14.6㎝、高台径6.2㎝、器高5.6㎝、Ｂ類の平均が口径15.0㎝、高台径6.7㎝、器高5.6㎝である。平均でみるとややＢ類の方が大きい。

第７図　碗類器形分類

皿

全て高台がなく、全体に扁平な形をしている。体部の器壁の厚さに大きな変化は見られない。口縁部がやや尖り内面の底部から体部の移行がなめらかなものと、口縁部が丸く肥厚し内面の底部から体部への移行がやや屈曲しているものに分けた。前者をａ類、後者をｂ類とした。

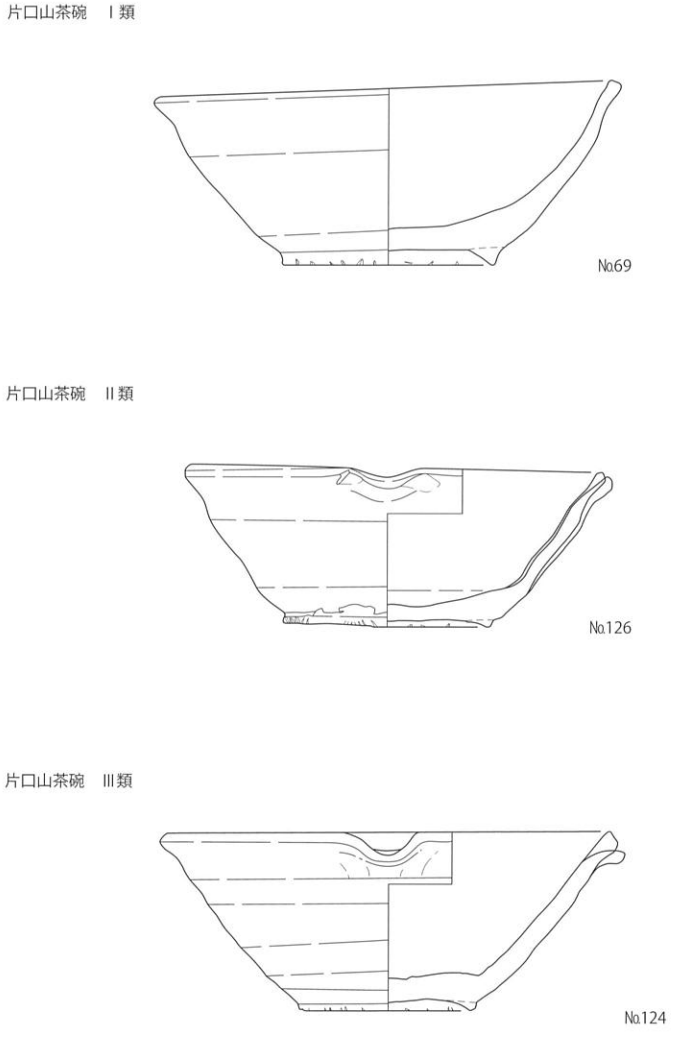
その法量は、ａ類の平均が口径8.1㎝、底径4.1㎝、器高2.5㎝である。ｂ類の平均は口径7.9㎝、底径4.3㎝、器高2.1㎝である。

第８図　皿類器形分類

片口山茶碗

出土数は少ないものの内面の底部から体部への移行部分と、口径と高台径の比率において特徴があり３種類に分類した。

内面の底部から体部への移行がなめらかで、口径と高台径の比率が高台径１に対し口径が約２倍のもの（Ⅰ類)。内面の底部から体部への移行がやや明瞭で口径と高台径の比率が高台径 1 に対し口径約２倍のもの（Ⅱ類)。内面の底部から体部への移行が屈曲し境界が明瞭で口径と高台径の比率が高台１に対し口径約 2.6 倍のもの（Ⅲ類)。



第 9 図　片口山茶碗器形分類

第２節　出土遺物について

１号窯の遺物　(遺物番号 72～87、104、120)

１号窯からの出土遺物は、皿が 17 点、重ね皿が１点である。遺物量が少なく、碗は窯内から出土しなかった。

１号窯の法量平均は、皿が口径 7.9 ㎝、底径 4.5 ㎝、器高 2.1 ㎝である。胎土がやや粗いものが多く、器形分類的には１点(No.75)を除いてはｂ類である。

２号窯の遺物　(遺物番号 1～42、88～92、121、124～128、129～131)

２号窯からの出土遺物は、碗 42 点、皿５点、重ね皿１点、片口山茶碗５点、片口碗３点である。２号窯からは比較的多くの種類が出土している。

２号窯の碗の法量平均は、口径 14.9 ㎝、高台径 6.6 ㎝、器高 5.7 ㎝である。No.16 の遺物は高台を付けた形跡が見受けられなかった。碗は焼成が不良なものが多く、内面底部の調整痕は回転ナデ・指ナデがほぼ半分に分かれた。指ナデも強くしてあるものもあるが比較的凹凸が少なく丁寧に仕上げている。器形分類的にはＡ類が７点、Ｂ類が 35 点でＢ類が多い。碗体部に補修した痕が残る遺物が数点見受けられた。

皿の法量平均は、口径 8.2 ㎝、底径 4.4 ㎝、器高 2.3 ㎝である。器形分類はａ類が１点、ｂ類が４点である。遺物No.89・90 は外面全体に自然釉が付着しており、蓋として二次利用したと思われる。

片口山茶碗は、器形分類で分けたⅡ類とⅢ類が出土している。Ⅱ類は３点(No.125・126・128)で法量の平均は、口径 16.3 ㎝、高台径 7.9 ㎝、器高 6.4 ㎝である。Ⅲ類より小さく、口縁端部は内側にやや尖っている。Ⅲ類は２点(No.124・127)で法量の平均は、口径 17.8 ㎝、高台径 6.7 ㎝、器高 7.4 ㎝である。高台径と口径の比率が 1:2.6 とⅡ類より差が大きく、体部の立ち上がりがより直線的に見える。焼成はどちらも良好であるが、胎土はⅢ類よりⅡ類の方が細かい。高台は５点とも付いているが、高さは低く細くて粗雑であり、もみ痕が付着している。片口部分は内側を人差し指で押さえ、外面には補助で押さえた痕が残る。

片口碗は大きさがほぼ同じで、１点は注ぎ口が一部欠損している。平均の法量は、口径 9.6 ㎝、底径 6.7 ㎝、器高 6.3 ㎝である。高台は付いておらず、外面底部には３点共に糸切り痕が残る。底部から口縁にかけて緩やかに内弯し全体に球形に近い形をしている。口縁端部にある注ぎ口は３点ともに１ヶ所棒状の道具で内側から軽く押さえられている。

No.129 は肩部から口縁にかけて内側へ弯曲し、口縁端部の先端に直立部はなく、底部の厚みが他の物より薄い。

No.130 と 131 は形に類似点が多く、肩部から口縁にかけて内側に弯曲している部分は同じであるが、No.129 よりやや丸みが強くなる。口縁部の先端は上方に直立している。

３号窯の遺物(遺物番号 43～45・46・47～52、93～101)

３号窯から出土した遺物は、碗 10 点、皿 9 点である。碗 10 点の内№46 は窯体に伴う排水溝床下より出土した遺物である。

碗の平均法量は、口径 15.4 ㎝、高台径 6.9 ㎝、器高 5.9 ㎝である。口縁端部が肥厚し、体部は直線的である。高台は雑で端部は潰れてもみが付着している。2 号窯から出土した遺物と大きな差は無い。2 号窯の遺物に比べ全体的に焼成は良好であった。器形分類はＡ類が１点、Ｂ類は８点で内容は 2 号窯と変わらない。

排水溝より出土した遺物は№46 以外にもあるが数が少なく、破損していて焼成不良な遺物が多かった。

皿の法量平均は口径 8.0 ㎝、底径 3.9 ㎝、器高 2.4 ㎝である。口縁部は回転ナデによって締められ薄く角形になっているものが多い。№101 は外面全体に自然釉が付着しており二次利用した可能性がある。

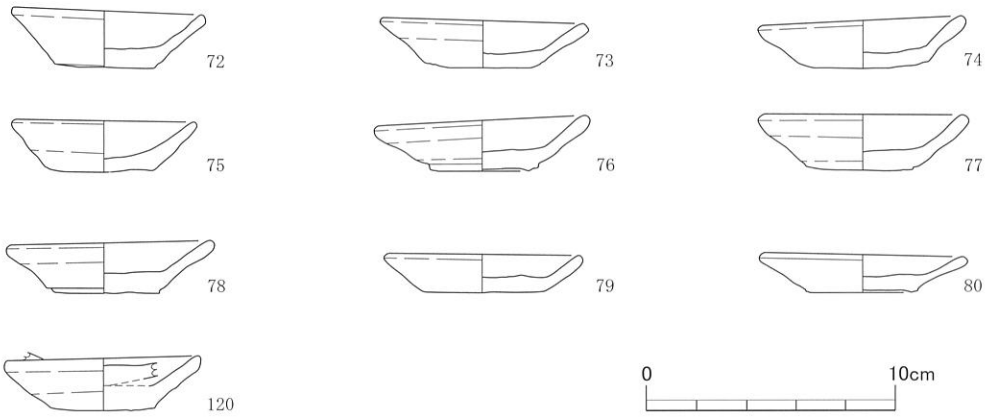
その他の遺物

窯内以外からは、碗・皿・片口山茶碗が出土した。内面底部にヘラ状の道具で「×」と印のある碗（№65）も出土している。しかし、その範囲や窯体との関係などは把握できなかった。

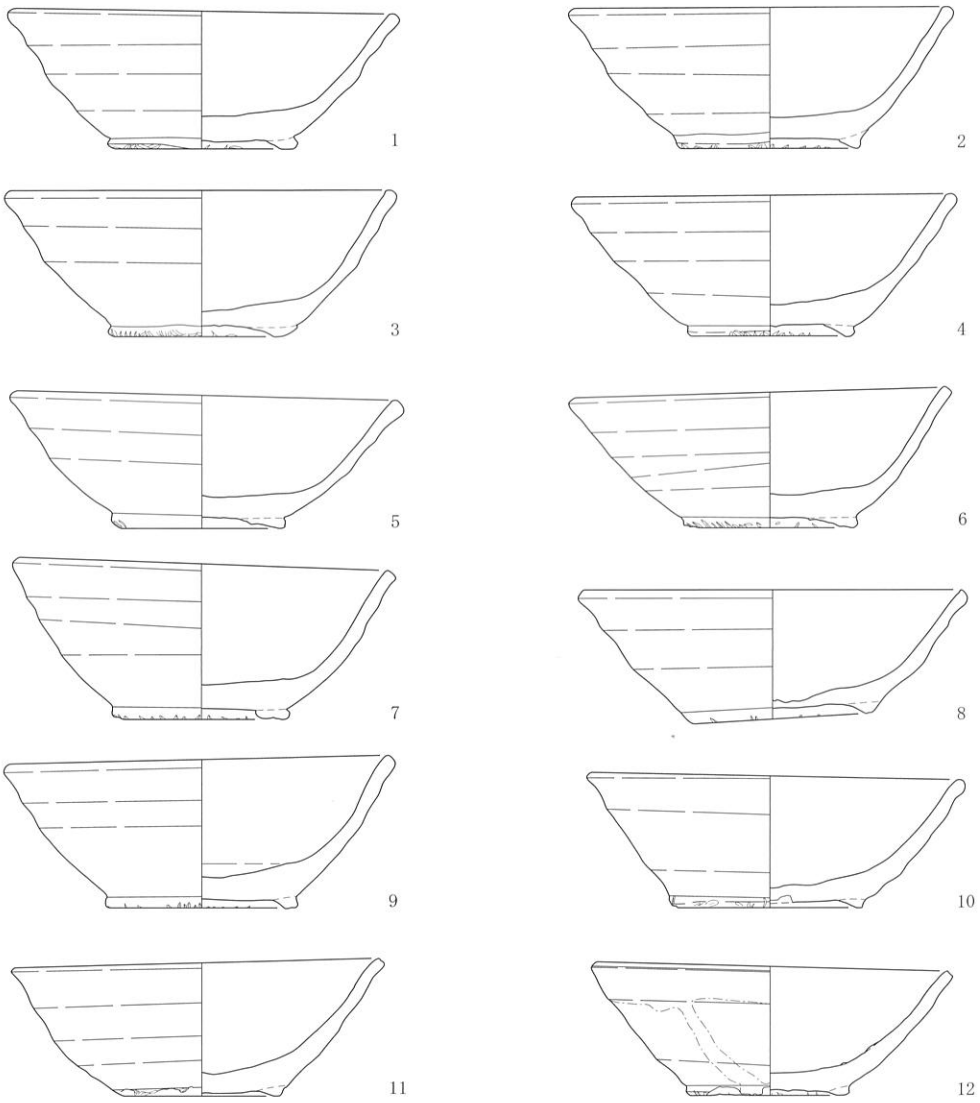
平均法量は、Ａ類が口径 14.7 ㎝、高台径 6.0 ㎝　器高 5.5 ㎝である。Ｂ類は 14.9 ㎝、高台径 6.8 ㎝、器高 5.4 ㎝である。

皿の平均法量は、器形分類Ｂ類は口径 7.8 ㎝、底径 4.1 ㎝、器高 2.1 ㎝である。Ａ類は平均を出すだけの資料がなかった。

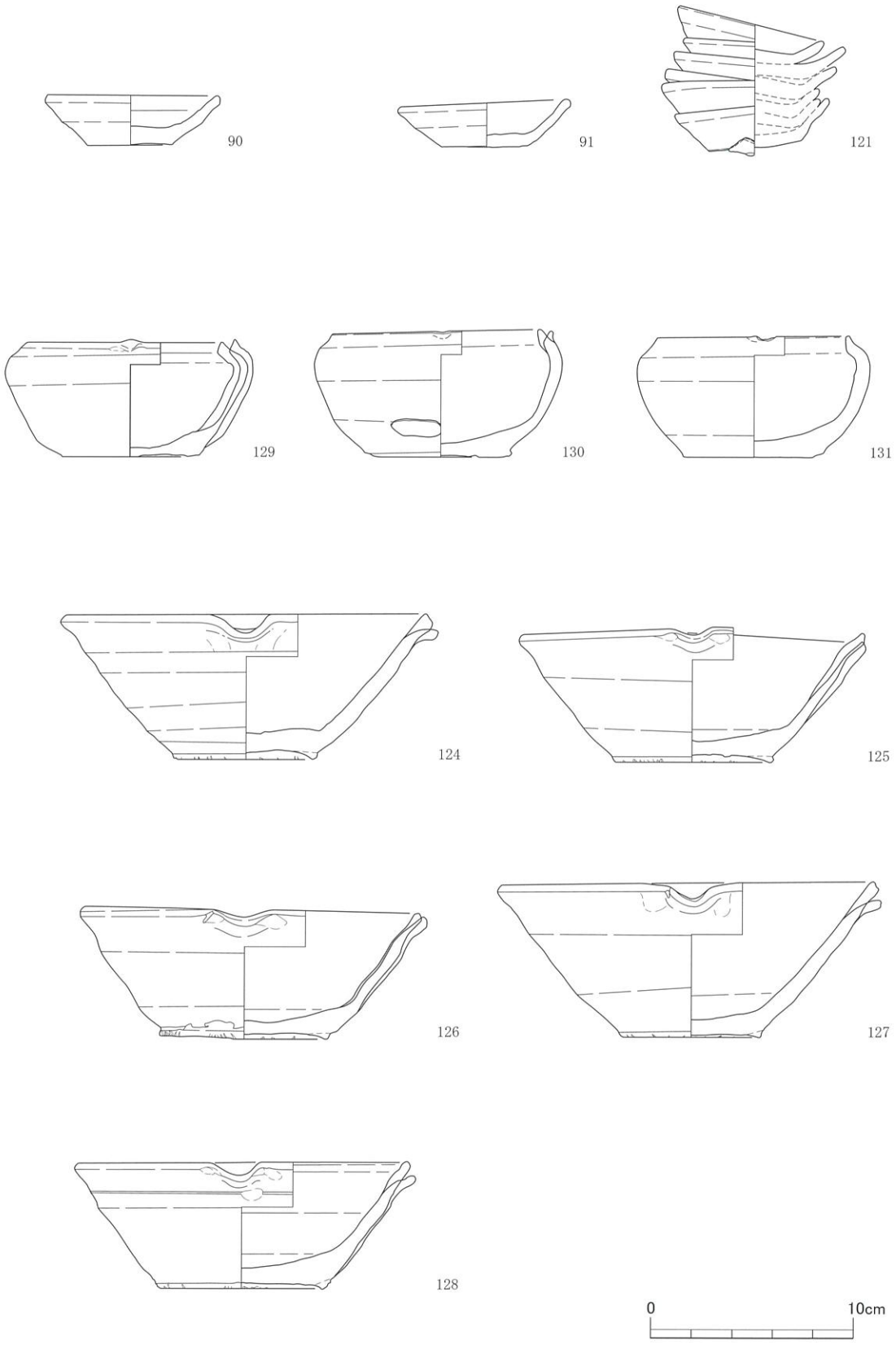
片口山茶碗は窯内のものとは異なり、Ⅰ類と分類した遺物が 2 点出土している。片口部分は残念ながら欠損していた。高台径の大きさと口縁端部の作りはⅡ類と似ているが、胎土が異なりやや薄い肌色で、体部に厚みがあり高台の作りが丁寧で逆三角形をしている。



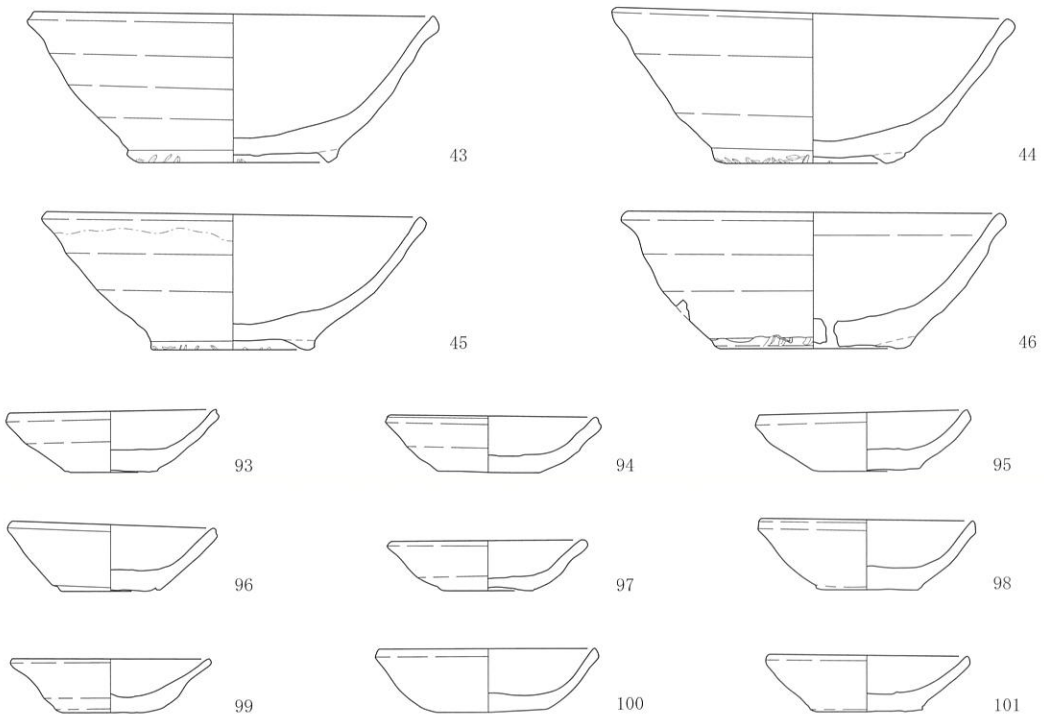
第 10 図　1 号窯皿



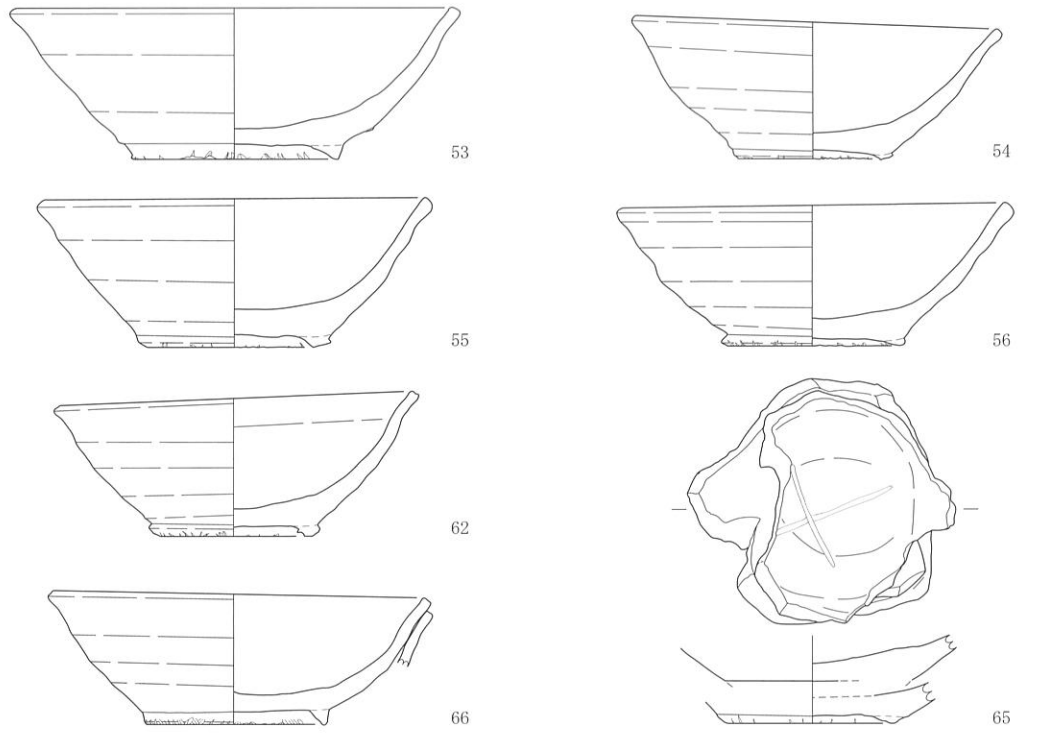
第 11 図　2 号窯碗



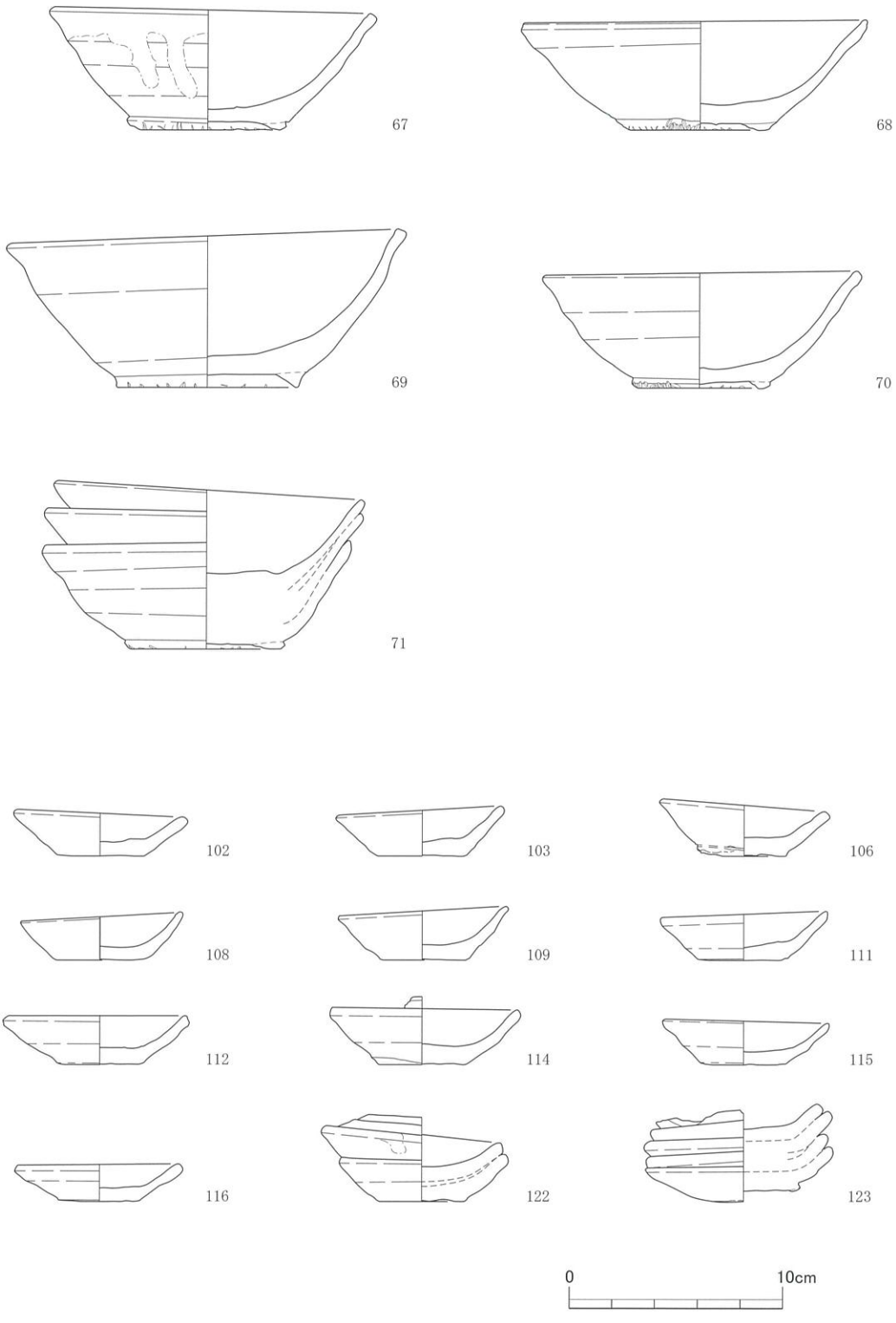
第12図　2号窯皿・片口碗・片口山茶碗



第 13 図　3 号窯碗・皿



第 14 図　灰原碗



第 15 図　灰原など碗・皿・片口山茶碗

1

2

3

4

5

6

7

8

8

9

10

11

12

43

44

45

46

53

図版５　遺物写真１

54

55

56

62

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

図版 6　遺物写真 2

79

80

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

106

108

109

111

112

図版７　遺物写真３

114

115

116

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

図版８　遺物写真４

遺物番号	図面の有無	写真の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm) 口径	底径/高台径	器高	高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底部付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	備考
1	○	○	碗	2-5T	2号窯A区	15.0	7.0	5.5	○	○	△	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
2	○	○	碗	2-5T	2号窯A区	14.7	7.1	5.6	○	-	○	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
3	○	○	碗	2-5T	2号窯A区	15.1	6.6	5.8	○	○	△	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
4	○	○	碗	2-5T	2号窯A区	15.0	(6.4)	5.7	○	○	△	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
5	○	○	碗	2-5S	2号窯D区	15.1	6.4	5.5	○	-	△	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
6	○	○	碗	2-5S	2号窯D区	14.6	6.1	5.6	○	○	△	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
7	○	○	碗	2-5S	2号窯D区	14.6	6.4	6.5	○	-	△	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
8	○	○	碗	2-5S	2号窯D区	15.0	(7.2)	(5.3)	○	○	△	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	補修痕あり
9	○	○	碗	2-5S	2号窯D区	15.0	7.3	6.1	○	-	△	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
10	○	○	碗	2-5T	2号窯E区	14.5	7.4	5.4	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良・吹きだし	○	B	
11	○	○	碗	2-5T	2号窯F区	15.0	6.2	5.5	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	A	ひび割れ
12	○	○	碗	2-5T	2号窯南北ベルト	13.9	6.2	5.2	○	不明	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	天場もの
13			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	15.2	5.6	5.6	○	○	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
14			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	15.3	6.8	5.4	○	-	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	やや粗い	×	B	
15			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	15.0	(7.6)	(5.5)	○	○	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	やや粗い	×	B	
16			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.5	底7.0	(5.5)	×	-	○	—	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	高台全てハクリ
17			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.9	7.0	5.6	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
18			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.7	6.8	5.3	○	-	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
19			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.7	6.7	6.3	○	○	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	A	
20			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.8	6.1	5.6	○	○	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
21			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	15.0	7.1	5.3	○	-	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	B	補修痕あり
22			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	15.2	(5.6)	(5.8)	○	-	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	B	
23			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	15.0	6.5	5.4	○	-	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
24			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.9	6.6	5.6	○	-	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
25			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	15.5	6.6	5.6	○	-	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	B	
26			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.7	6.7	5.6	○	-	○	もみ	2.5Y6/1	黄灰	やや不良	良	×	A	
27			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	15.0	(6.2)	(5.8)	○	-	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
28			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.5	6.2	5.6	○	○	○	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	B	
29			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	15.3	6.4	6.5	○	-	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	補修痕あり
30			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.3	6.1	5.8	○	-	×	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	A	
31			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.7	5.8	6.0	○	○	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	A	
32			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.9	6.4	5.6	○	-	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	A	
33			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	15.2	6.5	5.5	○	-	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	補修痕あり
34			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.9	(6.0)	(5.6)	○	-	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
35			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.9	6.4	5.7	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
36			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	15.5	(7.4)	(5.7)	○	-	○	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	B	
37			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.8	6.1	5.6	○	-	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
38			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	(15.3)	6.5	(5.5)	○	○	○	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	B	
39			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.7	6.6	5.7	○	○	○	もみ+センイ痕	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	高台付着痕　不明
40			碗	2-5T	2号窯D区ベルト	14.6	6.6	5.6	○	-	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
41			碗	2-5T	2号窯E区	14.9	6.3	5.5	○	○	○	もみ	2.5Y8/2	灰白	良	良・吹きだし	○	B	
42			碗	2-5T	2号窯南北ベルト	15.1	7.7	5.3	○	○	△	もみ	2.5Y8/2	灰白	良	良・吹きだし	○	B	
43	○	○	碗	2-5S	3号窯C区	15.8	7.4	6.0	○	○	×	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
44	○	○	碗	2-5S	3号窯C区	15.5	6.4	6.2	○	○	△	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
45	○	○	碗	2-4S	3号窯E区	14.8	6.3	5.5	○	-	△	もみ	2.5Y6/2	灰黄	良	やや粗い・吹き出し	○	B	
46	○	○	碗	2-4S	3号窯排水溝床下	14.8	(7.3)	5.5	○	-	△	もみ・センイ痕	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	ひび割れ　補修痕あり
47			碗	2-5S	3号窯C区	(15.2)	7.4	(5.8)	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	A	
48			碗	2-5S	3号窯C区	(15.0)	7.2	(5.7)	○	-	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	B	
49			碗	2-4S	3号窯E区	(14.6)	6.9	(5.6)	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	
50			碗	2-4S	3号窯E区	(14.4)	6.7	(5.3)	○	○	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良・吹きだし	○	B	
51			碗	2-4S	3号窯E区	(15.6)	7.1	(5.3)	○	-	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	
52			碗	2-4S	3号窯G区	(15.6)	(7.0)	(5.6)	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	B	体部に穴
53	○	○	片口山茶碗	2-15A	灰原A区	(17.4)	8.1	6.0	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	I	
54	○	○	碗	2-15A	灰原A区	14.4	5.7	5.7	○	-	○	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	A	
55	○	○	碗	2-15A	灰原A区	15.0	6.6	5.9	○	○	○	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
56	○	○	碗	2-15A	灰原A区	15.2	6.9	5.7	○	-	△	もみ	5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
57			碗	2-15A	灰原A区	14.5	6.2	5.3	○	○	○	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	A	
58			碗	2-15A	灰原A区	(13.6)	5.7	(5.6)	○	○	○	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	A	
59			碗	2-15A	灰原A区	(13.8)	5.8	(5.3)	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	A	

第1表　遺物観察表1

遺物番号	図面の有無	写真の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底部付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	備考
						口径	底径/高台径	器高											
60			碗	2-15A	灰原A区	14.8	底7.8	5.1	×	○	△	不明	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	高台全てハクリ
61			碗	2-15A	灰原A区	15.2	(6.7)	(6.0)	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	
62	○	○	碗	2-15A	灰原C区	13.9	6.1	5.8	○	○	○	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	A	
63			碗	2-15T	灰原C区	(14.1)	6.0	(5.5)	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	二次利用 蓋か？
64			碗	2-4T	灰原C区	(13.8)	5.0	(5.4)	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	A	
65	○	○	碗重ね	2-4T	灰原E区	-	(6.6)	-	○	○	不明	不明	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	-	内面底部に十文字の刻書あり
66	○	○	碗	2-4T	灰原F区	14.7	7.0	5.3	○	○	△	もみ(うっすら)	5Y8/1	灰白	良	良	○	A	天場もの
67	○	○	碗	2-15A	灰原F区	14.7	6.5	5.7	○	○	○	もみ	2.5Y6/2	灰黄	良	やや粗い・吹き出し	○	A	
68	○	○	碗	2-16T	灰原F区	15.9	6.2	5.1	○	-	×	もみ	2.5Y6/2	灰黄	良	良	×	A	
69	○	○	片口山茶碗	2-15A	灰原	18.0	8.3	7.3	○	-	○	もみ	2.5Y6/2	灰黄	良	やや粗い	○	I	
70	○	○	碗	2-16T	カクラン	14.5	5.8	5.4	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	やや粗い	○	A	
71	○	○	碗重ね	2-15A	灰原A区	14.1	7.0	4.9	○	—	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	
72	○	○	皿	なし	1号窯A区	7.5	4.0	2.9	×	○	○	-	2.5Y6/2	灰黄	良	良	×	B	
73	○	○	皿	なし	1号窯A区	7.9	4.7	2.0	×	○	△	-	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	B	
74	○	○	皿	なし	1号窯A区	8.0	5.2	2.1	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	やや粗い・吹き出し	○	B	
75	○	○	皿	なし	1号窯A区	7.1	4.5	2.1	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	やや粗い・吹き出し	○	A	
76	○	○	皿	なし	1号窯A区	8.1	4.3	2.2	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	やや粗い・吹き出し	×	B	
77	○	○	皿	なし	1号窯B区	7.8	4.3	2.2	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B	
78	○	○	皿	なし	1号窯B区	8.0	4.3	2.1	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	やや粗い	○	B	
79	○	○	皿	なし	1号窯A区	7.5	4.8	1.6	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	やや粗い・吹き出し	○	B	
80	○	○	皿	なし	1号窯B区	7.9	4.5	1.6	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	良	×	B	
81			皿	なし	1号窯A区	8.3	4.5	2.3	×	○	△	-	2.5Y8/1	灰白	良	やや粗い	○	B	
82			皿	なし	1号窯A区	8.5	4.8	2.2	×	○	△	-	2.5Y8/1	灰白	良	やや粗い	○	B	
83			皿	なし	1号窯A区	7.6	5.0	1.6	×	○	△	-	2.5Y8/1	灰白	良	やや粗い	○	B	
84			皿	なし	1号窯A区	8.3	4.5	2.0	×	○	△	-	2.5Y7/1	灰白	良	やや粗い・吹き出し	○	B	天場もの
85			皿	なし	1号窯B区	8.0	4.5	2.2	×	○	△	-	2.5Y8/1	灰白	良	やや粗い	○	B	
86			皿	なし	1号窯B区	7.5	3.9	1.8	×	○	△	-	2.5Y8/1	灰白	良	良	×	B	
87			皿	なし	1号窯B区	8.5	5.0	2.0	×	○	△	-	2.5Y8/1	灰白	良	良	×	B	
88			皿	2-5T	2号窯C区	(8.1)	4.6	(2.0)	×	○	△	-	2.5Y6/2	灰黄	良	やや粗い	○	B	
89			皿	2-5T	2号窯E区	8.0	4.5	2.2	×	○	△	-	2.5Y7/2	灰黄	良	やや粗い	○	B	蓋として二次利用か？
90	○	×	皿	2-5T	2号窯南北ベルト	8.4	4.3	2.5	×	-	△	-	5Y7/1	灰白	良	やや粗い・吹き出し	×	A	蓋として二次利用か？
91	○	×	皿	2-5T	2号窯南北ベルト	8.2	4.5	2.4	×	○	×	-	5Y7/1	灰白	良	良	○	B	
92			皿	2-5T	2号窯南北ベルト	8.2	4.3	2.1	×	○	△	-	5Y7/1	灰白	良	良	×	B	
93	○	○	皿	2-5S	3号窯C区床上層	8.2	3.1	2.5	×	○	△	-	2.5Y6/2	灰黄	良	良	×	A	
94	○	○	皿	2-5S	3号窯C区床上層	8.1	4.0	2.3	×	○	△	-	2.5Y6/2	灰黄	良	良	×	A	
95	○	○	皿	2-5S	3号窯C区床上層	8.3	4.2	2.4	×	○	△	-	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	A	
96	○	○	皿	2-5S	3号窯C区床上層	8.0	4.3	2.8	×	○	△	-	5Y7/1	灰白	良	良	×	A	
97	○	○	皿	2-5S	3号窯D区	7.6	3.6	2.0	×	○	△	-	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	
98	○	○	皿	2-14T	3号窯G区壁上	8.4	3.8	2.8	×	-	△	-	2.5Y7/3	浅黄	良	良	×	A	
99	○	○	皿	2-4S	3号窯E区	(7.8)	3.9	(2.1)	×	○	△・板目？	-	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	B	
100	○	○	皿	2-4S	3号窯C区	(8.5)	4.5	(2.6)	×	○	△	-	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	B	
101	○	○	皿	2-5S	3号窯東西ベルト	7.8	4.4	2.3	×	○	△	-	5Y7/1	灰白	良	やや粗い	×	A	蓋として二次利用か？
102	○	○	皿	2-15A	灰原A区	7.8	4.0	2.2	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	良	×	B	
103	○	○	皿	2-15A	灰原A区	7.6	4.2	2.3	×	○	△・センイ痕	-	5Y7/1	灰白	良	良	○	B	
104			皿	2-15A	1号窯A区ベルト	7.6	4.5	2.0	×	○	△	-	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	
105			皿	2-15A	灰原A区	(7.2)	3.6	(1.9)	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B	
106	○	○	皿	2-15A	灰原C区	7.5	4.0	2.7	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B	
107			皿	2-15A	灰原C区	(7.8)	4.5	2.0	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B	
108	○	○	皿	2-15T	灰原E区	7.5	4.2	2.2	×	○	△・センイ痕	-	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B	
109	○	○	皿	2-4T	灰原E区	7.8	4.0	2.5	×	○	△	-	2.5Y7/1	灰白	やや良	良	×	B	
110			皿	2-4T	灰原E区	7.6	3.5	2.2	×	○	×	-	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	
111	○	○	皿	2-5T	灰原F区	7.6	4.1	2.3	×	○	△	-	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	
112	○	○	皿	2-4T	灰原F区	8.2	4.0	2.2	×	○	△	-	2.5Y8/1	灰白	良	やや粗い	○	A	
113			皿	2-5T	灰原F区	8.7	4.2	2.0	×	○	△・センイ痕	-	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B	
114	○	○	皿	2-4T	灰原F区	8.7	4.0	3.1	×	○	△	-	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	A	
115	○	○	皿	2-5T	灰原F区	7.4	4.0	2.1	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B	
116	○	○	皿	なし	表採 調査区内	7.5	3.8	1.8	×	○	△	-	2.5Y8/2	灰白	良	良	×	B	
117			皿	なし	表採 調査区内	8.2	4.2	1.7	×	○	×	-	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	B	
118			皿	なし	表採 調査区内	(8.0)	4.2	(1.4)	×	○	△	-	2.5Y8/1	灰白	良	やや粗い	×	B	

第２表　遺物観察表２

遺物番号	図面の有無	写真の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm) 口径	底径/高台径	器高	高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底部付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	備考
119			皿	2-15T	カクラン	8.0	4.2	2.2	×	○	○	−	2.5Y8/1	灰白	良	良・吹きだし	○	B	
120	○	○	皿重ね	2-16A	1号窯B区ベルト除去	7.8	4.2	2.2	×	不明	△	−	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	
121	○	○	皿重ね	2-5T	2号窯D区ベルト	7.3	4.5	(2.0)	×	不明	×	−	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B	
122	○	○	皿重ね	2-5T	灰原C区南ベルト	7.6	4.0	2.1	×	不明	△	−	上2.5Y7/1 下2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	
123	○	○	皿重ね	2-15T	灰原E区	8.4	5.1	1.8	×	不明	△	−	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B	
124	○	○	片口山茶碗	2-5S	2号窯D区	17.6	6.7	7.1	○	○	○	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	やや粗い	×	Ⅲ	
125	○	○	片口山茶碗	2-5S	2号窯D区	16.5	7.6	6.5	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	やや粗い	×	Ⅱ	
126	○	○	片口山茶碗	2-5S	2号窯D区	16.4	8.2	6.5	○	−	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	Ⅱ	
127	○	○	片口山茶碗	2-5S	2号窯D区	18.1	6.6	7.6	○	○	○・センイ痕	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	やや粗い	×	Ⅲ	
128	○	○	片口山茶碗	2-5S	2号窯D区	16.0	8.0	6.2	○	−	△・センイ痕	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	Ⅱ	
129	○	○	片口碗	2-5T	2号窯D区	9.5	6.7	5.7	×	○	△	−	7.5Y7/1	灰白	良	良	○		
130	○	○	片口碗	2-5T	2号窯D区	10.1	6.7	6.3	×	不明(釉付着)	△	−	7.5Y7/1	灰白	良	良・吹きだし	○		
131	○	○	片口碗	2-5T	2号窯D区	9.3	6.8	5.9	×	○	△	−	2.5Y7/1	灰白	良	良・吹きだし	○		

法量の( )は反転、〈 〉は平均値を示す

高台の有無:○高台あり ×高台なし △高台が有ったがハクリした

内面底部調整痕:○指ナデあり −回転ナデ

外面底部調整痕:○糸切り痕明瞭に残るもの △糸切り痕あるが不明瞭に残るもの ×完全にナデ消しされ糸切り痕が確定できないもの

第3表　遺物観察表3

第３章　自然科学分析

第１節　瀬戸Ｃ古窯群の考古地磁気学的研究

広岡公夫、植田有加、岩崎仁美
（大阪大谷大学文学部文化財学科）

1. はじめに

地球は一つの大きな磁石と考えられ、磁場を持っている。この磁場は、地球の中心に、非常に小さいが強力な棒磁石（これを地磁気双極子という）をおいたときに生ずる磁場として近似することができる。この磁場を‘地磁気’または‘地球磁場’という。実際には、地球の中心部は数千度という非常な高温であるため、いかなる磁石も存在し得ない状態である。地下 2900km 以深の地球の中心部は中心核と呼ばれ、電気伝導度の高い金属から成っていて、特に、地表からの深さ 2900～5100 km の外核と呼ばれている部分では、その金属が融けて液体になっており、それが地球中心部に存在する強磁場中を流動することによって発電し、核内に電流が流れる。その電流によって磁場が発生するというメカニズムで、地磁気が維持されているのである。これを地磁気ダイナモ説という。地球の自転による自転軸のまわりの回転運動と外核内の温度差に起因する熱対流が金属流体の流動運動を引き起こしていると考えられている。したがって、地球の自転の運動エネルギーと高温の中心部の熱エネルギーを消費しながら、ダイナモ（発電機）が働いて地球磁場が維持されていることになる。

土に１～３％程度含まれる磁性鉱物（磁石になることができる鉱物）は、基本的には鉄酸化物の磁鉄鉱（Fe_3O_4）や赤鉄鉱（Fe_2O_3）であるが、通常、少量のチタンが鉄と置き代わった、チタン磁鉄鉱（$(Fe,Ti)_3O_4$）やチタン赤鉄鉱（$(Fe,Ti)_2O_3$）である場合が多い。土が焼かれて数百度以上の高温になると、それぞれの磁性鉱物の種類に固有の温度に達すると持っていた磁気は失われてしまう。この磁性を失う温度をキュリー点（Curie Point）といい、磁鉄鉱では 578℃、赤鉄鉱では 670℃である。チタンの含有量が増すとキュリー点は下がる。

土が高温に熱せられた状態から冷却されキュリー点（磁気を失った温度）にまで冷えると、再び磁石になる性質（これを磁性という）が蘇り、そのときに作用している地球磁場の方向の磁石となる。このときに獲得される磁化を熱残留磁化（thermoremanent magnetization、略して、ＴＲＭ）という。焼土がもつこのような熱残留磁化は昔の地磁気を記憶する目には見えない‘地磁気の化石’であるといってよい。

考古遺跡に残されている焼土や堆積層が有する‘地磁気の化石（残留磁化）を測定して、考古学が扱う過去の時代にまで遡って、地磁気の変動の様子を明らかにし、地磁気を復元する研究を考古地磁気学（archeomagnetism）という。

古窯の窯体焼土が有する熱残留磁化は、古窯が使われていた当時の地磁気を記憶している事になる。より正確にいうと、何度も焼成が行われた古窯の場合には、最終焼成の高温にまで熱せられた時の冷

却時の地磁気を窯体全体で記録することになる。

窯跡の考古地磁気学的測定では、焼土の残留磁化方向から過去の地球磁場方位を復元することであるから、まず最初に試料となる焼土が、遺構内でどのような方位をとっていたかを精度よく測ることが重要となる。また、窯壁や天井（残存している場合）は、よく焼けていて強い熱残留磁化を有しているが、窯廃棄後に崩落したり、傾動したりして、最終焼成以降に向きが変わっている場合が多いので、試料は床面から採取すべきである。

東海地方の考古地磁気研究については、瀬戸・東濃地域を中心とした考古地磁気測定結果をまとめて、東海版考古地磁気永年変化曲線が作られ（広岡・藤澤、2003）、年代推定に応用されている。

発掘調査された大府市内の山茶碗古窯についての考古地磁気測定は、相当数にのぼる。すなわち、海陸庵１・２号窯および神明１・２・３号窯（広岡ほか、1996）、深廻間Ａ１・２号窯（広岡・佐竹、2005）、深廻間Ｂ１・２・３号窯（広岡ほか、2006）、深廻間Ｃ１・２号窯（広岡ほか、2006）、ガンジ山Ａ１・２・３号窯（広岡・佐竹、2000）、瀬戸Ｂ１・２・３・４号窯（広岡・井上、2006）、石亀戸１・２・３号窯（広岡・小暮、2006）、砂原古窯（広岡ほか、2007）、久分２・３・４・５号窯などがある。

2. 考古地磁気永年変化

地磁気は数十年～百年程度の長期間かかってやっとはっきり検出できるような、長周期のゆっくりとした変化をする。このような地磁気の変動を地磁気永年変化（geomagnetic secular variation）という。地磁気の直接観測によって得られた偏角・伏角の最古の観測記録は、１６世紀中頃以降、英国ロンドンのグリニッヂで得られている。それ以来の 400 年余りの継続観測記録を見ると、地磁気方位は明らかに変わっており、永年変化が認められる。しかし、その変動周期は、もっと長いものらしく、この観測期間内では周期性は得られていない。

観測記録のない、より古い時代にまで遡って地磁気の変動の様子を調べるためには、残留磁化を測定する考古地磁気学的手法に依らねばならない。考古地磁気測定によって得られた永年変化を観測記録から得られた永年変化と区別するために、考古地磁気永年変化（archeomagnetic secular variation、または、archaeo-secular variation）という。

東海・北陸地方から北部九州に至る西南日本各地の遺跡焼土の考古地磁気学的測定によって、過去 2,000 年間の考古地磁気変動が相当詳しく調べられており、西南日本における考古地磁気永年変化曲線（Hirooka、1971, 1983, 1991；広岡、1977）として、考古地磁気年代推定に利用されてきた。窯跡や炉跡の焼土の残留磁化を測定し、得られた磁化方向を上記の考古地磁気永年変化曲線と照合することによって、考古地磁気学的に年代を推定することができるのである。

その後、北陸地方（福井・石川・富山３県に新潟県西部を加えた地域）および、東海地方（瀬戸・東濃地域を中心に、三重県・岐阜県・愛知県・静岡県西部を含む地域）の考古地磁気データのみを用いて、それぞれ、北陸版（広岡、1989）および東海版（広岡・藤澤、2003）考古地磁気永年変化曲線が作成され、年代推定に供されている。

3. 考古地磁気試料の採取と測定

瀬戸C古窯群1・2・3号窯からそれぞれ 12 個ずつの考古地磁気試料を採取した。1号窯の試料番号は CT3411～3422、2号窯の番号は CT3431～3442、3号窯の番号は CT3451～3462 である（第4表）。これらは全て、方位が精密に測られた定方位試料である。

試料の有する熱残留磁化方向から古窯操業当時の過去の地磁気方位を復元するのであるから、試料の方位測定の精度が大きく結果に影響する。しかし、限られた時間で試料を採取しなければならない古窯現場でのサンプリングでは、短時間に、しかも高精度で定方位試料を採取しなければならない。我々のグループが確立した採取法は、石膏で固めて石膏表面に平面を作り、その面の最大傾斜線方位とその傾斜角を測定してから採る方法である。この方法では面はいくら傾斜していてもかまわないので、最もよく焼けたと思われる部分を厳選してサンプリングすることができ、比較的短時間に精度のよい定方位試料が得られる。

定方位サンプルの採取方法の手順は次の通りである。

1) まず、古窯址床面のよく焼けている部分を選んで、試料として採取する焼土（こぶし大）の周りに深さ数ｃｍの溝を掘り、こぶし大部分の土片や土埃をきれいに取り除く。古窯中の試料採取部位が自由に選べる場合は、焼成室中央部の中軸線沿いの部分で採取する。側壁際や窯尻、焚口近くは、焼成中の窯内磁場が歪んでいる可能性があり、正確な地磁気の方位を示さないおそれがあるからである。

2) 次いで、多めの水で溶いた石膏をその部分にかけ、全体がくずれないようにした後、濃いめに溶いた石膏を焼土の表面にのせ、数ｃｍ角のアルミ板を押し付けて石膏の上面に平面をつくる。先に薄い石膏をかけるのは焼土表面の細かい凹凸の中にも石膏がしみ込んで補強するのと、後でかける濃い石膏とよく馴染んで試料が壊れ難くなるからである。

3) 石膏が固まった後に、アルミ板をはがして、石膏平面の最大傾斜線（これを pitch という）の方位とその傾斜角（dip）を考古地磁気試料採取用に特に改造された特製クリノメーター（Hirooka、1971）で測り、野帳に記録する。石膏平面には、その面の走向（strike）と傾斜方向を示す3点と試料の番号を油性マーカーで記す。

4) 1本刃の手鍬を用いて石膏で固めた試料を遺構から掘り起こす。

5) 試料の裏面にも石膏をかけて補強した後、1個ずつ壊れないように紙で包む。

遺構の大きさにかかわらず、1遺構当りこのような試料を通常、10～15 個採取して、研究室に持ち帰る。

持ち帰った試料は、試料表面に記されている方位を示す3点をもとに、一辺 34 mm の立方体に切断・製形する。製形にはダイヤモンド・カッターを使用し、切断面にはその都度、石膏をかけてくずれないように保護しておく。

pitch の方位はクリノメーター（特製クリノコンパス）の磁針を用いて決めているので、磁北を基準にした方位になっている。したがって、磁北が真北からずれている分だけ振れたものになっている。その振れの値、すなわち、遺跡現場における現在の偏角を求めねばならない。それには、国土地理院の西暦 2000 年の日本列島の偏角分布を求めるための実験式（国土地理院、2006）を用いた。計算の

結果は西偏 7.2°であった。測定結果の各試料の偏角値は全てこの値で補正してある。遺跡現場の緯度・経度とともに、実験式から求めた現在の偏角値も第４表に掲げられている。

残留磁化の測定には大阪大谷大学に設置されている夏原技研製のリングコア型スピナー磁力計（SMM-85 型）を使用し、試料１個につき６回置き直しをして測定した。縦型のこの磁力計では、回転軸は鉛直方向であるので、１回置きで回転軸に垂直な平面（水平面）内の直交２成分の磁化を測定することができる。したがって、６回置き直すと１２成分が得られ、３次元ベクトルである磁化ベクトルの直交３成分（Ｘ・Ｙ・Ｚ）のそれぞれを４回ずつ測ることになる。これら４個の値の平均値をＸ・Ｙ・Ｚのそれぞれの磁化成分とする。

採取した試料が元々保持している自然界で獲得した残留磁化を、自然残留磁化（natural remanent magnetization、略して、NRM）といい、最終焼成後に付加された不安定な二次磁化成分も含まれている場合が多い。これらの二次磁化成分を除去するには、交流消磁実験が効果的である。NRM の測定をすませた後、段階消磁実験を行う。消磁段階は、まず、2.5 mT、5.0mT、7.5 mT、10.0 mT の４段階を設定して、これらの段階で順次消磁し、各古窯について磁化方向のばらつきが最小になる段階（最適消磁段階）を求める。段階ごとに、磁化強度の減少度を参考にしながら磁化方向のまとまり具合をみて、最もまとまりがよくなる段階を選定して、それを最適消磁段階とし、その時の平均磁化方向を考古地磁気データとして採用する。通常の多くの場合は、2.5mT～7.5mT の段階でまとまりが最もよくなり、それより上の段階ではばらつきが大きくなる場合が多い。しかし、10.0mT まで消磁しても、まだ、まとまり具合が改善しつつある場合は、12.5mT、15.0mT、20.0mT の消磁段階を追加し、磁化方位がばらつきはじめるまで消磁をし、最適消磁段階を求める。今回の瀬戸Ｃ古窯群群では、最適消磁段階は全て 10mT 以下で、段階を追加しなくて済んだ。

これらの試料の中には、大きく磁化方向が外れるものが見られることがあるが、それらは、残留磁化獲得後にその部分が動いたか、壁や天井の焼土が紛れ込んだかなど何らかの原因で当時の地磁気の方向とは異なった方向の磁化を持つことになったものと考えられるので、このような試料のデータは平均磁化方向を求める統計計算の際には除外する。

最適消磁段階の平均磁化方向および統計的なばらつきの程度を表わすパラメータ（フィッシャーの信頼角：α_{95} と、フィッシャーの精度係数：K）を計算によって求める。統計計算にはフィッシャーの統計法（Fisher、1953）を用いた。

α_{95} は、測定によって得られた平均磁化方位から推測される真の方位が 95%の確率で存在する範囲を示している。云い替えれば、５%の危険率でこの範囲から外れることを意味しており、誤差の大きさを表すパラメータとして用いられる。通常、窯跡や炉跡など焼土遺構のＴＲＭでよくまとまるものでは、2°台以下の値となる。試料個数（N）が増えるとα_{95}の値（誤差）は小さくなる。また、Kは、試料個数の多少にかかわらず、個々の試料のばらつきの程度を表すパラメータで、まとまりのよいほど大きな値になる。よくまとまったＴＲＭでは、500 以上の値をとる。

3. 考古地磁気測定の結果

考古地磁気測定によって得られた個々の試料について、各窯の各消磁段階の磁化方向（偏角と伏角）と磁化強度が第 5～19 表に示されている。また、第 20 表には各窯ごとに求められた平均磁化方向、平均磁化強度および磁化のばらつきを表すパラメータ（α_{95} とK）などがまとめられている。 同一窯から採取された試料の中には他の試料から大きく外れた磁化方向を示す試料が少数個見られる場合が多く、そのような試料は何らかの原因で磁化方向がずれたことを示唆するので、平均磁化方向を計算する際には除外することにしている。第 5～19 表では除外された試料には＊印が付されている。また、第 20 表中の n/N の欄は、統計計算に用いた試料数（n）と採取した試料総数（N）の比であるので、これによって除外された試料数もわかる。

これらの表をみると、瀬戸C古窯群では、１号窯はまとまりのよい磁化方向を有しているが、２・３号窯では磁化のばらつきが大きいことがわかる。とくに、第 20 表で明らかなように、１号窯では最適消磁段階（7.5mT）でα_{95}が 2.0°、Kが 507.8 となり、よい磁化のまとまりを示したが、２号窯および３号窯は、α_{95}がそれぞれ 5.0°と 4.1°となり、古窯の磁化方向としては、かなりばらつきが大きい。中でも、２号窯では、試料 12 個中地磁気方向と考えられる磁化を有しているものが４個しかないことは、残存している窯跡の床面焼土の磁化が大きく乱されていることを示している。３号窯では 12 個全ての試料の中に大きくはずれた磁化を持つものはなかったが、最適消磁段階でもKの値が 100 を少し超える程度で、個々の試料の磁化方向が相当大きくばらついていること結果となった。２号窯ではKが 200 台ではあるが、これは試料個数（N）が４個とまとまりがいいものだけを選んでいるので当然であり、むしろ、それでも 200 台でしかないということは、ばらつきが大きいことを示していると言っていい。２・３号窯のばらつきが大きい理由はよくわからないが、窯の焼成室の最前部のみしか残ってないのが何らかの影響を与えているのかも知れない。

4. 考古地磁気年代の推定

今回の測定の最適消磁段階の結果を東海地方の考古地磁気永年変化曲線にプロットしたのが第 16 図である。この図から考古地磁気年代を推定すると、

瀬戸C１号窯　：　A.D.1230　±　100 年

瀬戸C２号窯　：　A.D.1090

瀬戸C３号窯　：　A.D.1090

となろう。

１号窯の年代誤差がまとまり具合に比して大きいのは、１２～１４世紀の東海地方の永年変化速度が遅いためである。２・３号窯については、フィッシャーの信頼円（α_{95}）が大きく、C１号窯の平

均磁化方向にまでかかっているので、考古地磁気学的には１号窯との年代差はほとんどないと考えられる。

引用文献

Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere, Proceedings of Royal Society of London, Series A, vol.217, 295-305.

Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan, Memoirs of Faculty of Science, Kyoto University, series of Geology & Mineralogy, 38, 167-207.

広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol.15, 200-203.

Hirooka, K. (1983) Archaeomagnetism of baked clays : Results from Japan. in 'Geomagnetism of Baked Clays and Recent Sediments'. ed. by K.M. Creer, P.Tocholka and C.E. Barton, Elsevier, Amsterdam, 150-157.

Hirooka, K. (1991) Quaternary paleomagnetic studies in Japan. The Quaternaqry Research(第四紀研究), vol.30, 151-160.

広岡公夫、藤澤良祐 (2003) 東海地方の地磁気永年変化曲線、考古学と自然科学、vol.45,-日本文化財科学会誌-、29-54.

広岡公夫、佐竹俊昭 (2000) ガンジ山Ａ古窯跡群の考古地磁気研究、「ガンジ山Ａ古窯跡群、～大府桃山土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書～」、大府市文化財調査報告書、第４集、大府市教育委員会、102-123.

広岡公夫、佐竹俊昭 (2005) 深廻間Ａ古窯跡群の考古地磁気学的研究、「深廻間Ａ古窯跡群、～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告～」、大府市文化財調査報告書、第５集、愛知県大府市教育委員会、160-172.

広岡公夫、南　依里、成　亨美 (2006) 深廻間Ｂ古窯跡群の考古地磁気、「深廻間Ｂ古窯跡群、～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ～」、大府市文化財調査報告書、第７集、愛知県大府市教育委員会、74-90.

広岡公夫、井上裕香 (2006) 瀬戸Ｂ古窯跡１・２・３・４号窯の考古地磁気年代推定、文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究・公募研究Ｄ01、平成 16 年度～平成 17 年度研究成果報告書、広岡公夫編、25-40.

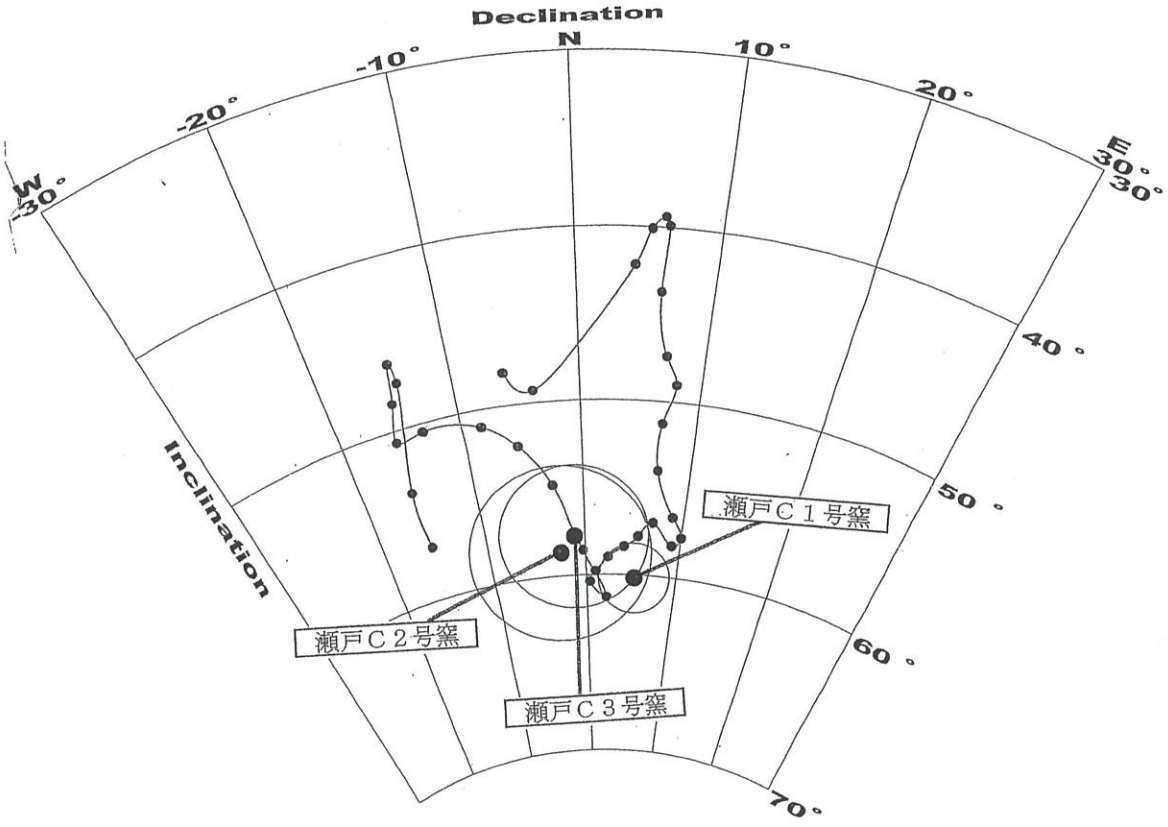
広岡公夫、小暮亮宣 (2006) 石亀戸古窯の考古地磁気年代推定の研究、文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究・公募研究Ｄ01、平成 16 年度～平成 17 年度研究成果報告書、広岡公夫編、41-61.

広岡公夫、小暮亮宣、金井友理 (2007) 砂原古窯の考古地磁気学的研究、「砂原古窯跡、～大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ～」、大府市文化財調査報告書、第８集、愛知県大府市教育委員会、66-78.

広岡公夫、水上裕美、川浪英子 (1996) 海陸庵・神明古窯址群の考古地磁気年代、「海陸庵古窯址群・神明古窯址群、～大府半月地区区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書～」、大府市文化財調査報告書、第 2 集、愛知県大府市教育委員会、138-151.

広岡公夫、小暮亮宣、金井友理、吉原 新 (2006) 深廻間Ｃ古窯群の考古地磁気学的研究、文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究・公募研究Ｄ01、平成 16 年度～平成 17 年度研究成果報告書、広岡公夫編、10-24.

国土地理院 (2006) 偏角分布図(2000)、「理科年表 2006」、東京天文台編、丸善、756.



第 16 図　東海版考古地磁気永年変化（広岡・藤澤、2003 による）と瀬戸Ｃ古窯群の考古地磁気測定結果.

Declination：偏角、　Inclination：伏角.

古窯名	試料個数	試料番号
瀬戸Ｃ１号窯	12	CT3411～3422
瀬戸Ｃ２号窯	12	CT3431～3442
瀬戸Ｃ３号窯	12	CT3451～3462

Lat.：35° 02′ 17.3″ N、 Long.：136° 56′ 51.0″ E
$D_{2000} = -7.2°$

第４表　瀬戸Ｃ古窯群から採取した考古地磁気試料個数と試料番号

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（$\times 10^{-4}$ Am^2/kg）
CT 3411	2.9	60.5	4.00
3412	9.6	58.0	4.65
3413	5.0	60.3	3.26
3414	9.2	60.6	4.91
3415	15.4	58.8	4.30
3416	6.8	57.0	9.23
3417	0.2	59.7	4.62
3418	-5.8	59.1	5.70
* 3419	18.9	49.9	10.7
3420	31.1	66.2	0.297
3421	-9.8	63.0	0.990
3422	9.7	62.0	4.27

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第５表　瀬戸Ｃ１号窯のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（$\times 10^{-4}$ Am^2/kg）
CT 3411	3.2	60.1	3.73
3412	10.6	57.8	4.37
3413	3.9	60.4	3.06
3414	7.8	61.0	4.58
3415	14.8	58.8	4.03
3416	9.5	57.1	8.61
3417	0.9	59.1	4.42
3418	-4.7	59.6	5.40
* 3419	18.0	51.1	10.3
3420	32.8	61.3	0.257
3421	-3.9	61.1	0.908
3422	8.3	61.9	4.01

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第６表　瀬戸Ｃ１号窯の２．５ｍＴ消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
CT 3411	2.9	60.7	3.62
3412	10.7	58.2	4.30
3413	4.6	61.0	3.01
3414	9.4	60.3	4.50
3415	15.2	58.9	3.87
3416	5.7	57.7	8.30
3417	2.0	59.8	4.36
3418	-6.3	57.8	5.22
* 3419	19.5	49.6	9.91
3420	26.9	59.4	0.209
3421	-3.6	61.7	0.850
3422	12.4	63.1	3.70

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの

第７表　瀬戸Ｃ１号窯の５．０ｍＴ消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
CT 3411	4.7	60.2	3.47
3412	9.8	58.2	4.12
3413	7.3	60.6	2.86
3414	7.8	60.6	4.36
3415	15.4	59.4	3.72
3416	7.9	57.6	7.96
3417	3.2	59.2	4.07
3418	-4.8	58.2	4.93
* 3419	20.8	50.4	10.1
3420	-0.7	61.9	0.169
3421	-3.7	62.0	0.793
3422	11.5	62.9	3.40

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第８表　瀬戸Ｃ１号窯の７．５ｍＴ消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
CT 3411	4.6	61.3	3.27
3412	9.5	59.4	9.94
3413	3.4	61.1	2.65
3414	8.9	60.2	4.17
3415	15.1	59.4	3.60
3416	4.9	58.0	7.76
3417	1.7	59.4	3.82
3418	-2.9	58.4	4.57
* 3419	17.6	49.7	10.1
3420	-15.4	64.1	0.140
3421	-2.2	61.7	0.746
3422	11.4	63.2	2.83

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第9表　瀬戸Ｃ１号窯の１０．０ｍＴ消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
*CT 3431	-154.5	23.8	3.38
3432	6.4	60.4	1.28
3433	-0.6	60.7	1.67
3434	0.7	59.2	1.94
3435	-14.8	66.6	0.478
* 3436	17.5	-24.1	2.18
* 3437	114.9	-3.9	0.546
* 3438	108.0	41.8	0.906
* 3439	-129.4	46.3	1.27
* 3440	-114.3	-35.0	0.499
* 3441	-126.3	47.4	0.561
* 3442	-110.3	27.9	2.10

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第10表　瀬戸Ｃ２号窯のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
*CT 3431	-153.6	23.3	3.31
3432	5.8	59.8	1.24
3433	0.5	61.5	1.67
3434	1.6	57.8	1.89
3435	-18.1	61.5	0.458
* 3436	18.5	-27.0	2.26
* 3437	111.3	-9.7	0.540
* 3438	106.6	38.1	0.871
* 3439	-114.4	52.6	0.962
* 3440	-116.3	-41.5	0.566
* 3441	-57.3	44.4	0.524
* 3442	-111.6	25.8	2.04

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第11表　瀬戸Ｃ２号窯の２．５ｍＴ 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
*CT 3431	-154.5	23.5	3.14
3432	3.4	59.2	1.14
3433	0.0	61.0	1.56
3434	0.2	57.7	1.82
3435	-13.1	56.3	0.382
* 3436	18.7	-30.4	2.36
* 3437	108.6	-18.0	0.547
* 3438	106.4	34.1	0.820
* 3439	-117.1	51.7	0.943
* 3440	-116.3	-47.1	0.557
* 3441	-57.3	28.2	0.515
* 3442	-111.6	25.0	1.91

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第12表　瀬戸Ｃ２号窯の５．０ｍＴ 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
*CT 3431	-153.9	22.5	2.90
3432	2.8	59.8	1.02
3433	-1.3	61.3	1.52
3434	1.5	58.2	1.71
3435	-10.0	52.5	0.348
* 3436	18.5	-31.7	2.46
* 3437	107.6	-22.4	0.576
* 3438	106.4	31.4	0.795
* 3439	-118.2	43.1	0.713
* 3440	-118.3	-49.7	0.563
* 3441	-135.8	35.9	0.388
* 3442	-110.3	24.3	1.86

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第13表　瀬戸Ｃ２号窯の７．５ｍＴ消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
*CT 3431	-154.7	21.2	2.30
3432	5.9	57.8	0.836
3433	-7.3	61.8	1.44
3434	0.5	58.9	1.60
3435	-13.7	56.6	0.381
* 3436	19.9	-30.8	2.41
* 3437	108.9	-24.9	0.593
* 3438	106.3	28.6	0.770
* 3439	-110.8	41.6	0.638
* 3440	-117.6	-49.0	0.580
* 3441	-122.5	27.3	0.367
* 3442	-109.1	24.3	1.72

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第14表　瀬戸Ｃ２号窯の１０．０ｍＴ消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
CT 3451	5.9	54.5	4.44
3452	-19.4	54.8	8.51
3453	0.0	52.5	4.71
3454	-20.9	60.8	4.10
3455	-14.3	70.0	1.98
3456	-20.4	66.7	7.82
3457	6.6	59.5	12.8
3458	-2.5	60.1	3.76
3459	5.7	60.8	3.08
3460	-10.3	53.1	3.12
3461	5.2	69.4	1.96
3462	4.1	53.9	1.79

第15表　瀬戸Ｃ３号窯のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)
CT 3451	9.1	54.1	4.13
3452	-19.9	53.6	8.53
3453	4.7	51.4	4.64
3454	-12.5	59.8	2.86
3455	-12.7	67.4	1.78
3456	-18.0	68.3	6.68
3457	7.9	57.7	12.3
3458	0.9	59.2	3.43
3459	15.8	57.5	2.30
3460	-8.9	53.3	2.86
3461	6.4	66.5	1.70
3462	4.1	54.8	1.69

第16表　瀬戸Ｃ３号窯の２．５ｍＴ消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
CT 3451	8.0	52.9	4.35
3452	-13.9	53.7	8.03
3453	1.5	50.4	4.71
3454	-8.2	58.1	2.87
3455	-11.1	66.6	1.82
3456	-13.9	67.2	6.54
3457	7.2	56.2	12.0
3458	-3.7	56.8	3.48
3459	13.4	55.1	2.31
3460	-6.1	51.9	2.91
3461	3.3	65.3	1.59
3462	3.9	55.5	1.78

第17表　瀬戸Ｃ３号窯の５．０ｍＴ消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
CT 3451	6.8	52.1	3.85
3452	-9.8	51.0	6.44
3453	3.6	48.4	4.34
3454	-7.7	56.6	2.43
3455	-7.8	66.3	1.55
3456	-12.6	66.4	5.58
3457	4.3	56.2	10.4
3458	1.8	57.6	2.87
3459	15.7	55.5	1.95
3460	-10.4	51.1	2.05
3461	6.8	64.4	1.33
3462	4.2	56.1	1.69

第18表　瀬戸Ｃ３号窯の７．５ｍＴ消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
CT 3451	10.2	51.6	3.05
3452	-10.0	51.6	4.68
3453	2.1	47.8	3.58
3454	-7.0	56.4	1.84
3455	-9.0	66.6	1.28
3456	-13.0	67.5	4.15
3457	6.5	54.7	7.90
3458	-0.9	56.8	2.07
3459	14.4	55.4	1.48
3460	-8.5	48.7	1.64
3461	1.2	63.8	1.09
3462	6.1	55.5	1.55

第19表　瀬戸Ｃ３号窯の１０．０ｍＴ消磁後の磁化測定結果

遺構名	消磁段階	n/ N	D（° E）	I（°）	α_{95}（°）	K	平均磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）	
１号窯	NRM	11/12	6.4	60.8	3.2	205.4	4.20	
	2.5mT	11/12	7.5	60.2	3.0	234.9	3.94	
	5.0mT	11/12	7.2	60.2	2.8	270.1	3.81	
	【 7.5mT	11/12	5.3	60.2	2.0	507.8	3.62	】
	10.0mT	11/12	3.7	60.8	2.5	335.9	3.41	
２号窯	NRM	4/12	-1.4	61.9	5.9	240.7	1.34	
	2.5mT	4/12	-2.3	60.5	6.2	218.6	1.32	
	【 5.0mT	4/12	-2.6	58.7	5.0	342.9	1.23	】
	7.5mT	4/12	-2.1	58.1	5.7	263.8	1.15	
	10.0mT	4/12	-3.7	59.0	5.7	257.8	1.06	
３号窯	NRM	12/12	-4.6	60.1	4.5	93.7	4.48	
	2.5mT	12/12	-1.4	59.1	4.5	92.4	4.41	
	【 5.0mT	12/12	-1.1	57.8	4.1	115.8	4.37	】
	7.5mT	12/12	-0.2	57.1	4.2	110.2	3.71	
	10.0mT	12/12	-0.2	56.6	4.4	100.1	2.86	

n/N：採択試料個数／採取試料個数、　D：平均偏角、　I：平均伏角、
α_{95}：フィッシャーの信頼角、　K：フィッシャーの精度係数.
【　】：考古地磁気データとして採用したもの.

第20表　瀬戸Ｃ古窯群の考古地磁気測定結果

第２節　瀬戸Ｃ古窯群出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ
藤根　久・中村賢太郎

1. はじめに

瀬戸Ｃ古窯群は、大府市に所在する山茶碗・小皿・片口鉢・壺などを焼成した鎌倉時代の古窯である。

ここでは、この古窯から出土した炭化材について樹種同定を行い、燃料材の特徴について調べた。

2. 試料と方法

試料は、２号窯および３号窯から出土した炭化材各３試料である（第 21 表）。

各炭化材は、３断面(横断面・接線断面・放射断面)を 5mm 角以下の大きさに整え、直径１cm の真鍮製試料台に両面テープで固定し銀ペーストを塗布した後、金蒸着を行った。観察および同定は、走査型電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV 型）を使用した。

3. 結果および考察

炭化材の樹種同定を行った結果、常緑針葉樹のマツ属複維管束亜属、落葉広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下クヌギ節）であった（第 21 表）。

２号窯では、クヌギ節のみであったが、３号窯ではマツ属複維管束亜属とクヌギ節が検出された。

市内における中世の山茶碗窯の燃料材を見ると、マツ属複維管束亜属やクヌギ節のほか、落葉広葉樹のコナラ属コナラ節やクリも利用されている（植田，2005；植田，2006）。ここでは、いずれの窯も各３試料のみであったため、コナラ節やクリは見られなかったものの、同様の木材利用があったものと考えられる。なお、炭化材は、丸木に注目すると、直径が約 5cm 以下の材からなる。

試料No.	遺構	地区	層位	取上げNo.	樹種	形状	サイズ（mm）
1	2号窯	B区	覆土	6-2	クヌギ節	丸木	d=34
2		A区		6-3	クヌギ節	半裁	r=24
3		C区		6-4	クヌギ節	丸木	d=26
4	3号窯	D区	2層	6-1	マツ属複維管束亜属	破片	-
5		E区	覆土	6-5	マツ属複維管束亜属	破片	-
6				8-1	クヌギ節	丸木	d=24

第 21 表　瀬戸Ｃ古窯群から出土した炭化材と樹種同定結果

以下に、同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の３方向の組織写真を提示した。

(1)マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　図版９　1a-1c(No.4)

仮道管、水平と垂直の樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞、放射柔細胞および放射仮道管からなる

針葉樹である。早材から晩材への移行は急で、晩材の量は多く、垂直樹脂道は早材から晩材にかけて見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管があり、その内壁には鋸状の肥厚がある。放射組織は1～10細胞高である。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがあり、アカマツは二次林の代表樹種である。自然分布ではアカマツは内陸部に、クロマツは海岸部に多い。木材は、建築材のほか杭材や車両材などに利用される。

(2)コナラ属コナラ亜属クヌギ節　*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　図版9 2a-2c(№1)

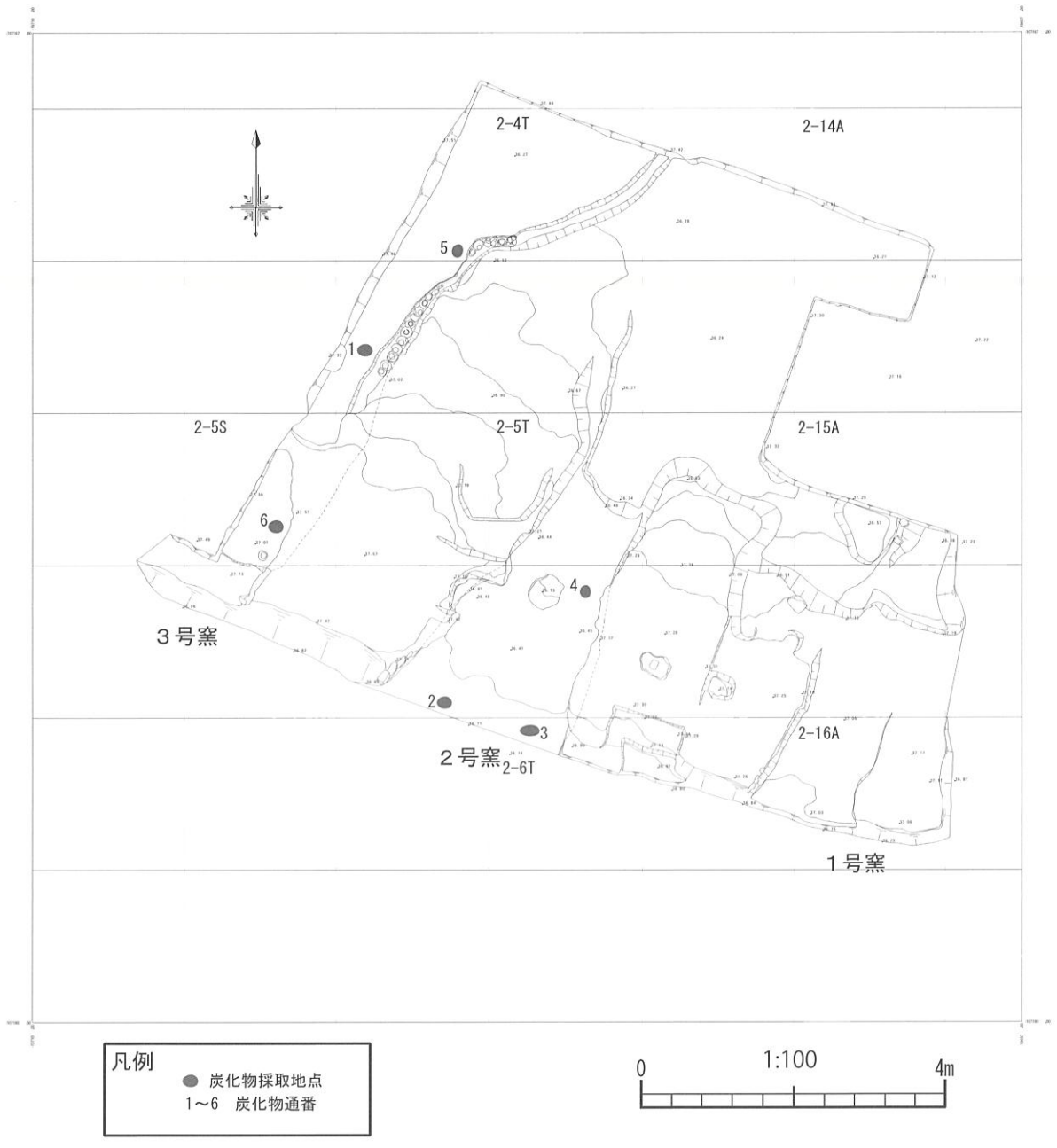
年輪のはじめに大形の管孔が1～3層配列し、その後小型・厚壁の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材である。放射組織は、同性単列のものと集合状のものがある。

クヌギ節は、落葉性高木であり、関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。木材は、重厚で割裂性が良い。現在においても薪炭材として重要な樹木である。

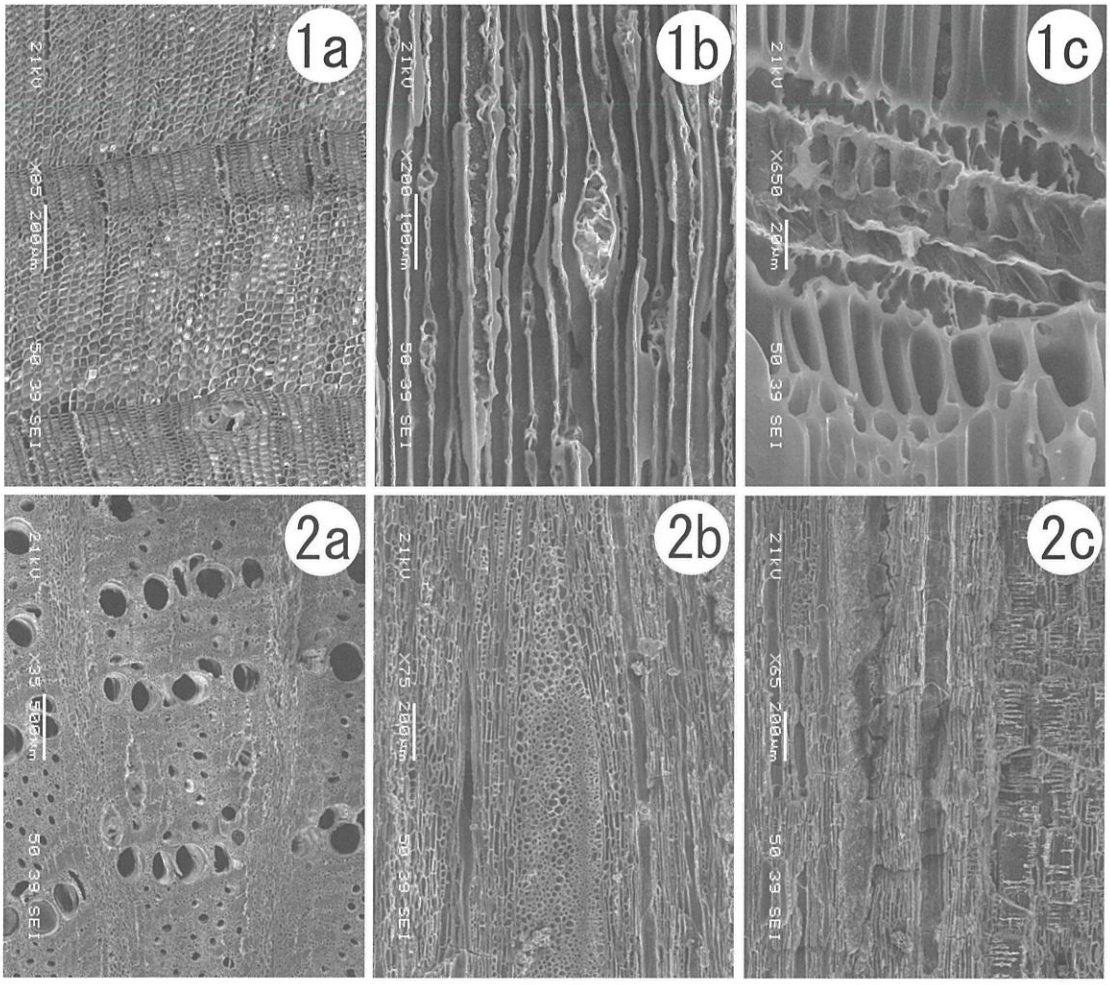
引用文献

植田弥生（2005）深廻間Ａ古窯跡群出土炭化材の樹種同定.「深廻間Ａ古窯跡群、～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告～」、大府市文化財調査報告書、第５集、愛知県大府市教育委員会，173-182.

植田弥生（2006）深廻間Ｂ古窯跡群出土炭化材の樹種同定.「深廻間Ｂ古窯跡群、～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ～」、大府市文化財調査報告書、第７集、愛知県大府市教育委員会，91-96.



第17図　出土炭化材の試料位置と検出樹種



図版９　木材組織の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c.マツ属複維管束亜属（№4）　2a-2c.コナラ属クヌギ節（№1）

第３節　総括

今回調査した３基は南東から北西側にほぼ平行に並ぶ窖窯である。いずれの窯も後世の削平により多くの部分が破壊されていた。

１号窯の残存状況は非常に悪く、２号窯は焼成室と一部天井部・燃焼室・焚口付近と分焔柱基部が残存し、３号窯は東側部分のみの調査ではあるが焼成室と一部天井部・燃焼室・焚口付近・分焔柱が天井まで残存していた。３号窯は焚口から窯体に向かって左側の側壁と床面の間に溝施設を構築し、その溝は比較的長く約４ｍを超え調査区内には収まらなかった。

１号窯と２号窯の間は４ｍほど離れているが、２号窯と３号窯は約２ｍと近く窯体も平行に並んでおり１号窯と２・３号窯では若干の時差が生じる可能性がある。灰原などの重複関係は不明である。この調査を整理するに当たり発掘当時の資料が非常に少なく記録が不十分であったため、窯体や灰原の関係性を十分に理解し解明することは不可能に近かった。

どの窯体からも余り多くの遺物が出土したわけではないが、主に２号窯や３号窯からは碗・小皿・片口山茶碗が出土している。大府市内で行った発掘調査では出土していなかった片口碗が２号窯焼成室下層付近から３点固まって出土している。

これらの出土遺物から常滑編年をもとに年代を考えると、この３基は４形式から５形式（1190 年ごろ～1250 年ごろ）のもので、その中でも１号窯は遺物量が極端に少ないが２号窯・３号窯よりやや新しいと考えられる。窯の操業年代を示す考古地磁気測定結果の研究とも比較的変わりなく２・３号窯がほぼ同時期に稼働し、やや遅れて１号窯が操業していたようであるが、この３基の時代差は大きいものではない。

瀬戸Ｃ古窯群は瀬戸Ｂ古窯群を発掘中に発見された窯であるが、遺跡としては瀬戸Ｂ古窯群より多少南西に位置し直線上で約７０ｍ南に位置している。どちらの遺跡についても窯体は焚口が北に位置しているが、瀬戸Ｂ古窯群の操業年代は 12 世紀後半から 13 世紀前半で形式編年は２から３形式にあたる。今回の調査により、瀬戸Ｂ古窯群と瀬戸Ｃ古窯群の関係は瀬戸Ｂ古窯群が早く、瀬戸Ｃ古窯群がその後に操業していた事になる。

参考文献

愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系

愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史』別編　窯業３　中世・近世　常滑系

中野晴久 1994「生産地における編年について」『「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

日本福祉大学知多半島総合研究所 2013『知多半島の歴史と現在』№17

大府市教育委員会　『瀬戸Ｂ古窯群・奥谷古窯』大府市文化財調査報告書第 10 集

公益財団法人瀬戸市文化振興財団 2012『古瀬戸の誕生「陶祖藤四郎」伝説とその時代』

青木修 2012「中世常滑窯における焼成器種とその形態的分類について」『愛知県史研究』第 16 号

第３部　久分古窯群

第１章　遺　構

第１節　窯体について

久分古窯群では窯体を５基確認していたが、東端の１基は工事区域外のため１号窯と名づけたのみで、窯体を調査することが出来なかった。調査対象となった４基は、いずれも山茶碗窯と呼ばれる地下式の窖(あな)窯で後世の削平により窯体上部は残存していなかった。また、調査区の中央部を西北西から東南東に向かって愛知用水の支線が３から４ｍの幅で埋設されていたため、２号窯と３号窯については焼成室下方部分より燃焼室側が破壊されている。４号窯と５号窯については焚口付近から灰原方向が破壊されていた。

１号窯

１号窯は試掘調査で存在が確認され、本調査では調査区東側の壁面に窯体の一部を確認した。窯体主体部は調査区範囲外で詳細は不明である。愛知用水の支線を埋設する工事に伴いかなりの部分が破壊されていると思われる。

２号窯

２号窯は１号窯の西側に近接し、窯体の上部は数回の農地改良を受けているため消失している。焚口から燃焼室、分焔柱部分と焼成室の下位部分は愛知用水の支線埋設工事の際に破壊され消失していた。窯体の全長は約 2.80mで窯体は焚口を北東に向けて築窯されている。窯体の主軸方位はＳ－37°－W、標高 36.2m～38.45m である。焼成室上部の遺存状態はやや良好である。側壁は左右両方とも残存した状態で最大高は 0.85m が残存していた。焼成室の規模は残存値で長さが 2.80m、最大幅は 2.75m である。床面は青灰色で、側壁は赤褐色でどちらもよく焼き締まっている。床面の傾斜は残存する焼成室下位から 0.7m までは約 30°で上昇し、その地点から上部までは約 44°で上昇する。

窯体内には焼台や遺物が残っていなかったため、窯出し作業直後のまま操業を中止した状態ではないかと考えられる。

床面の断割り調査を行ったが、床面下施設に伴う遺構や遺物は検出されなかった。床面の層位は上から青灰色土層、浅黄色土層、赤色土層となり、地山はにぶい黄褐色土層へと続いている。それぞれの層の厚さは約６㎝、約５㎝、約７㎝である。

３号窯

３号窯は２号窯の約 1.5m 北西側に位置し、窯体の上層部である煙出しや焼成室上部付近は農地改良を受けて消失している。又、焚口から燃焼室部分と分焔柱付近は愛知用水の支線埋設工事により破壊されている。窯体の残存長は約 5.90m で焚口を北東に向けて築窯されている。窯体の主軸方位はＳ－38°—W で、標高は 35.70m～38.44mである。分焔柱は確認出来なかったが、焼成室の遺存状態は良好である。焼成室はセンターライン上で残存長が 5.90m、最大幅 3.08mである。側壁は左右両方とも残存していてその最大高は 0.98mである。側壁・床面は灰白色でやや焼き締まっている。床面の傾

斜は、残存する焼成室最下位置点より 0.30mまでは約 5°の傾斜で上昇し、そこから 0.8mまで約 18°で上昇する。さらに 0.4mまで約 20°で上昇し、その地点から 1.0mは 31°でさらに強い傾斜を呈する。最後の傾斜は約 40°をもって残存する焼成室を上昇していく。焼成室の上部の床面上には焼台が 58 点残存し、いずれも良好な状態であった。

床面の断割り調査を行った結果、碗（山茶碗）が伏せて敷き詰められた状態の床面下施設を検出した。床面下施設は残存する焼成室の下位部分に作られていた。碗の検出状況は伏せられた状態で、口縁部を地面に密着させ、高台及び底部が上方を向く形で 156 点を確認した。碗の下層は地山を掘り下げた状態のままであり、碗を伏せて並べ粘土を貼り付けた構造であった。敷き詰められた碗は内部が空洞ではなく、ほとんどのものが粘土や碗の破片が詰められた状態であった。床面下施設の層位は上から灰白色土層、にぶい橙色（黄色が強い）土層、にぶい橙色（赤色が強い）土層となり、地山のにぶい黄褐色へと続いている。それぞれの層の厚さは約 5 ㎝、約 6 ㎝、約 7 ㎝となっている。

4 号窯

４号窯は３号窯の北北西側に隣接し、窯体の上層部である煙出しや焼成室上部付近は農地改良を受けて消失している。窯体の残存長は約 7.88mで焚口を東北東に向けて築窯されている。窯体の主軸方位はＳ－61°－Wで、標高は 36.34m～38.36mである。焚口付近から燃焼室と分焔柱、焼成室の上部以外が残存し側壁は左右両方とも残存していた。焚口の幅は推定 1.30mで、燃焼室の幅は分焔柱基部で 2.00m、燃焼室の長さは分焔柱基部まで 2.40mである。燃焼室の床面傾斜は焚口から 1.6mの地点までは 8°で下降し、そこから分焔柱基部である 0.8mの地点まではほぼ水平である。

床面は灰白色でやや焼き締まった状態で、側壁はにぶい赤褐色でよく焼き締まっている。分焔柱は、地山掘り残しによって作られたもので、天井部位まで残存している。基底部で 50 ㎝×55 ㎝の楕円形を呈しているが、中位から上部にかけてやや細くなっている。色は灰白色でよく焼き締まっている。分焔柱中央部での窯体の幅は、床面で 1.60m、通焔孔の床面幅は右が 0.4m、左が 0.7mである。残存している側壁の最大高は 0.9mである。

焼成室の床面の傾斜は、分焔柱基部から 1.1mの地点までは約 40°で上昇する。焼成室はセンターライン上で残存長 5.25m、最大幅は 2.70mである。さらにそこから 0.8mを 1.5°の傾斜で上昇する。そこから 0.6mを 18.5°で上昇し、そこから 0.7mは約 29°で上昇し、残りは約 37°で急に上昇していく。焼成室には焼台が数点残存していたものの、多くの焼台や遺物は残存していなかった事から 2 号窯同様に窯出し作業直後のまま操業を中止した状態ではないかと考えられる。

床面の断割り調査を行ったところ、碗（山茶碗）が伏せて敷き詰められた状態の床面下施設を検出した。床面下施設からは、碗 153 点、窯道具の焼台 21 点の遺物が確認出来た。床面下施設は分焔柱から水平な焼成室部分に作られていた。碗の下層は地山を掘り下げた状態のままであり、碗を伏せて並べ粘土を貼り付けた構造であった。敷き詰められた碗は内部が空洞ではなく、ほとんどのものが粘土や碗の破片が詰められた状態であった。施設内で発見された碗は単体のもの以外に、熔着したものや焼台と熔着したものなどが使用されていた。灰層が一部検出された。床面下施設の層位は上から灰白色土層、にぶい橙色土層、にぶい赤褐色土層となり地山のにぶい黄褐色土層へと続いている。それぞれの土層の厚さは約 5 ㎝、約 6 ㎝、約 7 ㎝である。

５号窯

５号窯は４号窯の約 1.5m北側に位置し、窯体の上層部である煙出しや焼成室上部付近は農地改良を受けて消失している。窯体の残存長は約 6.56mで焚口を東北東に向けて築窯されている。窯体の主軸方位はＳ－66°—Wで、標高が 36.44m～38.26mである。焚口から燃焼室までの遺存状態は良好で、側壁は左右両方ともほぼ残存している。焚口の幅は 1.10mで燃焼室の幅は分焔柱基部で 1.70m、燃焼室の長さは分焔柱基部まで 1.65mである。燃焼室の床面傾斜は、焚口から 0.40mの地点までほぼ水平である。そこから分焔柱基部までの 1.05mは 10°の傾斜で下降する。床面は灰白色でよく焼き締まり、側壁も灰白色でよく焼き締まっている。分焔柱は地山掘り残しによって作られ、基底部で 42 ㎝×54 ㎝の楕円形を呈している。色は灰白色でよく焼き締まっている。分焔柱中央部での窯体の幅は、床面で 1.75m、通焔孔の床面幅は右が 62 ㎝、左が 65 ㎝となっている。焼成室はセンターライン上で残存長 4.65m、最大幅は 2.22mである。残存している側壁の最大高は 1.00mである。

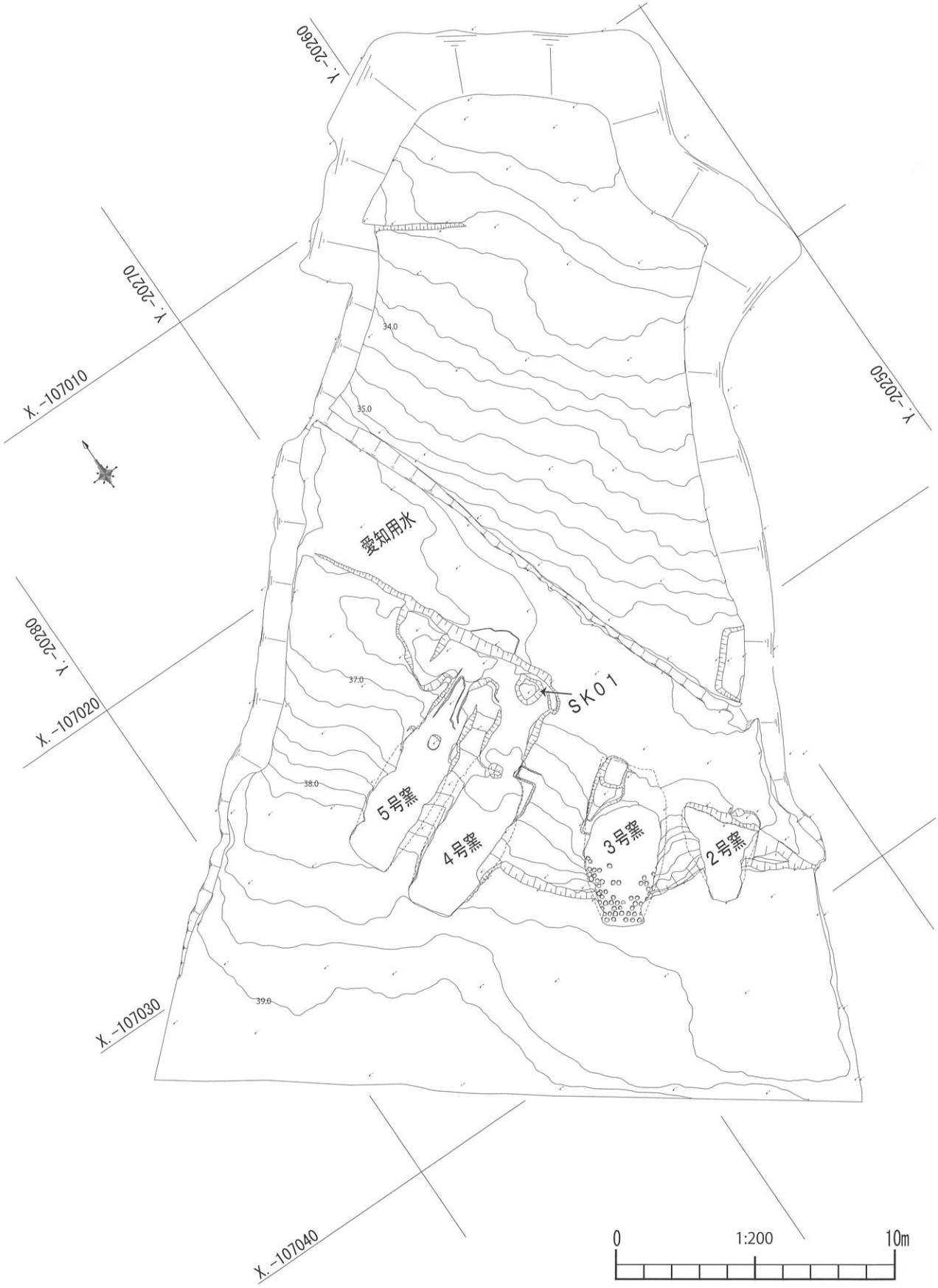
焼成室の床面の傾斜は、分焔柱基部から 0.9mの地点までは約 5°で上昇し、そこから 1.60mは約 20°で上昇する。そこから 29°でさらに上昇していく。焼成室には遺物や焼台が少数しか残存していなかったため、窯出し作業直後のまま操業を中止した状態ではないかと考えられる。

床面断割り調査を行った結果、床面下に碗(山茶碗)を数点は上向きの状態であったが、ほとんどは伏せた状態または横にして敷き詰めた状態の床面下施設を検出した。遺物は碗が 330 点、焼台が 73 点出土した。床面下施設は分焔柱のまわりから 4.00m南側の焼成室にかけてであった。伏せられた碗の下は、地山を掘り下げた状態のままであり、碗を伏せて並べて粘土を貼り付けた構造である。出土した碗は側壁際まで伏せられた状態であり、碗は単体のものと熔着したもの、それ以外に焼台と熔着したものが使用されていた。碗の内部は空洞ではなく、ほとんどのものが粘土や碗の破片が詰められていた。一部灰層が検出された。床面下施設の層位は上から灰白色土層、にぶい橙色（黄色が強い）土層、にぶい橙色（赤色が強い）土層となり、地山のにぶい黄褐色へと続いている。それぞれの厚さは約７㎝、約７㎝、約９㎝となっている。

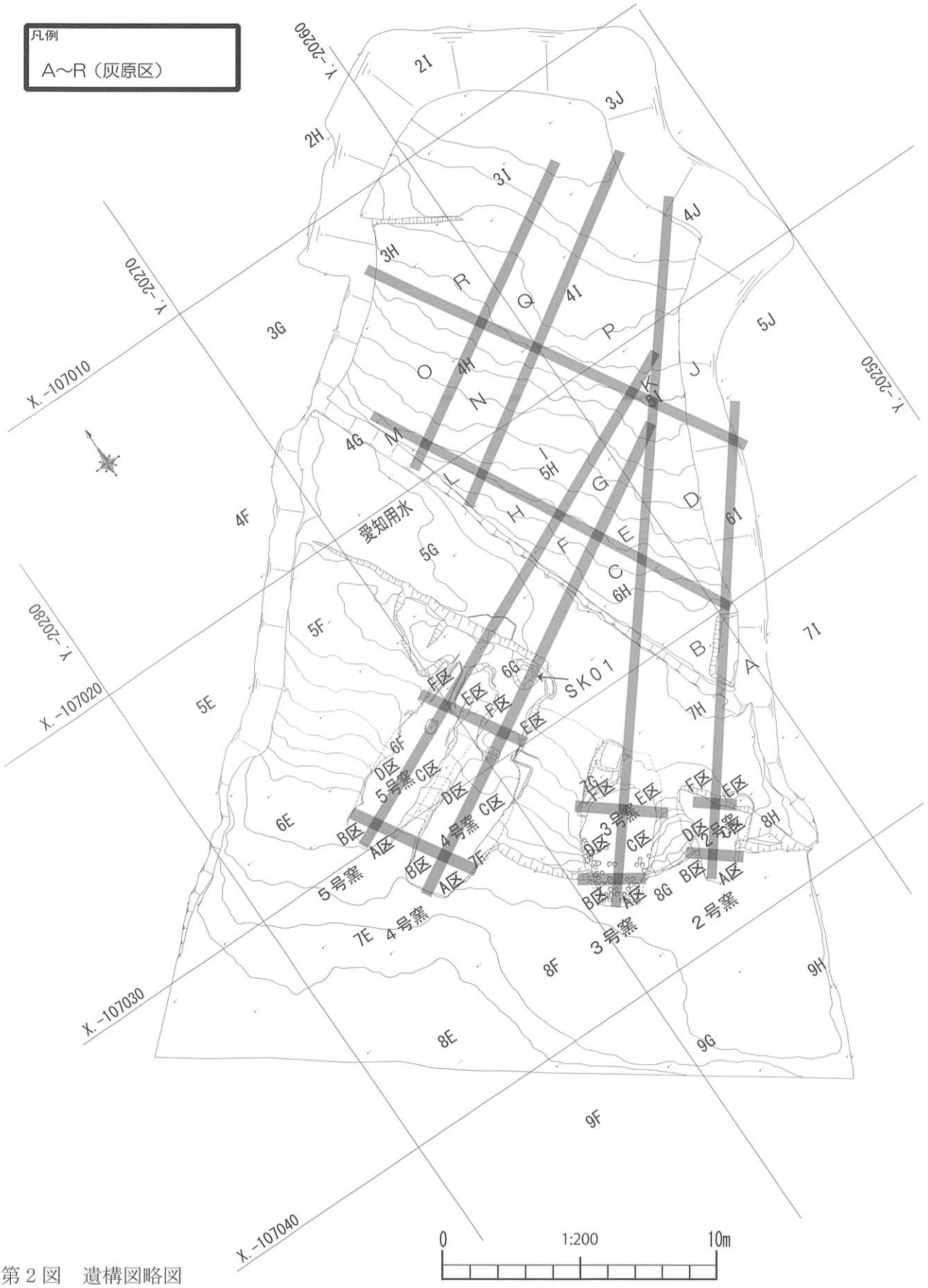
前庭部及び灰原

久分古窯群では愛知用水の支線埋設工事により窯の前庭部及び灰原の一部が破壊されていた。２号窯と３号窯で下層部分が形成され、４号窯と５号窯で灰原上層が形成されていた。

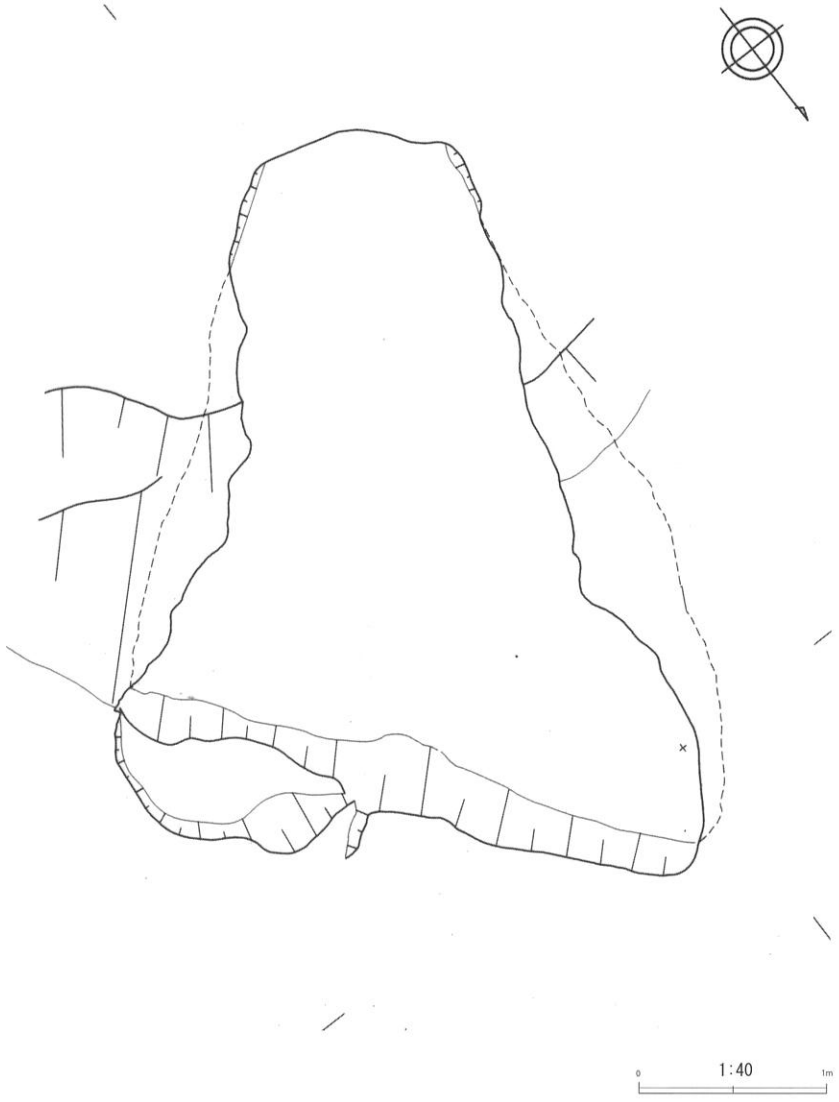
４号窯の焚口北西側に直径１.00mほどの円形土坑 SK01 を検出したが、残存状態が良くなかったため窯体との関係は不明である。



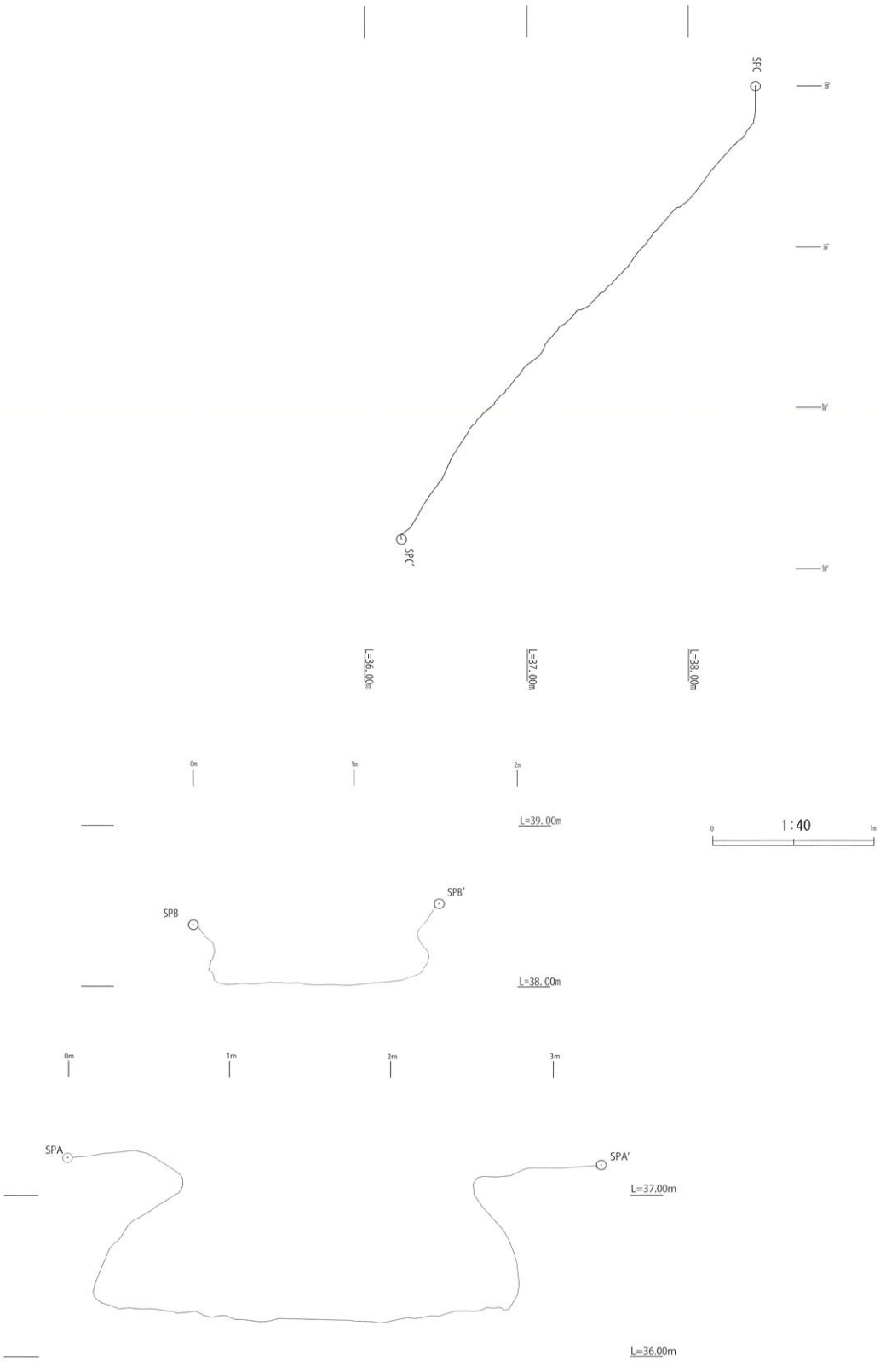
第 1 図　遺構配置図（1：200）


凡例
A～R（灰原区）
Y.-20260
Y.-20270
Y.-20250
Y.-20280
X.-107010
X.-107020
X.-107030
X.-107040
愛知用水
5号窯
4号窯
3号窯
2号窯
SK01
0
1:200
10m

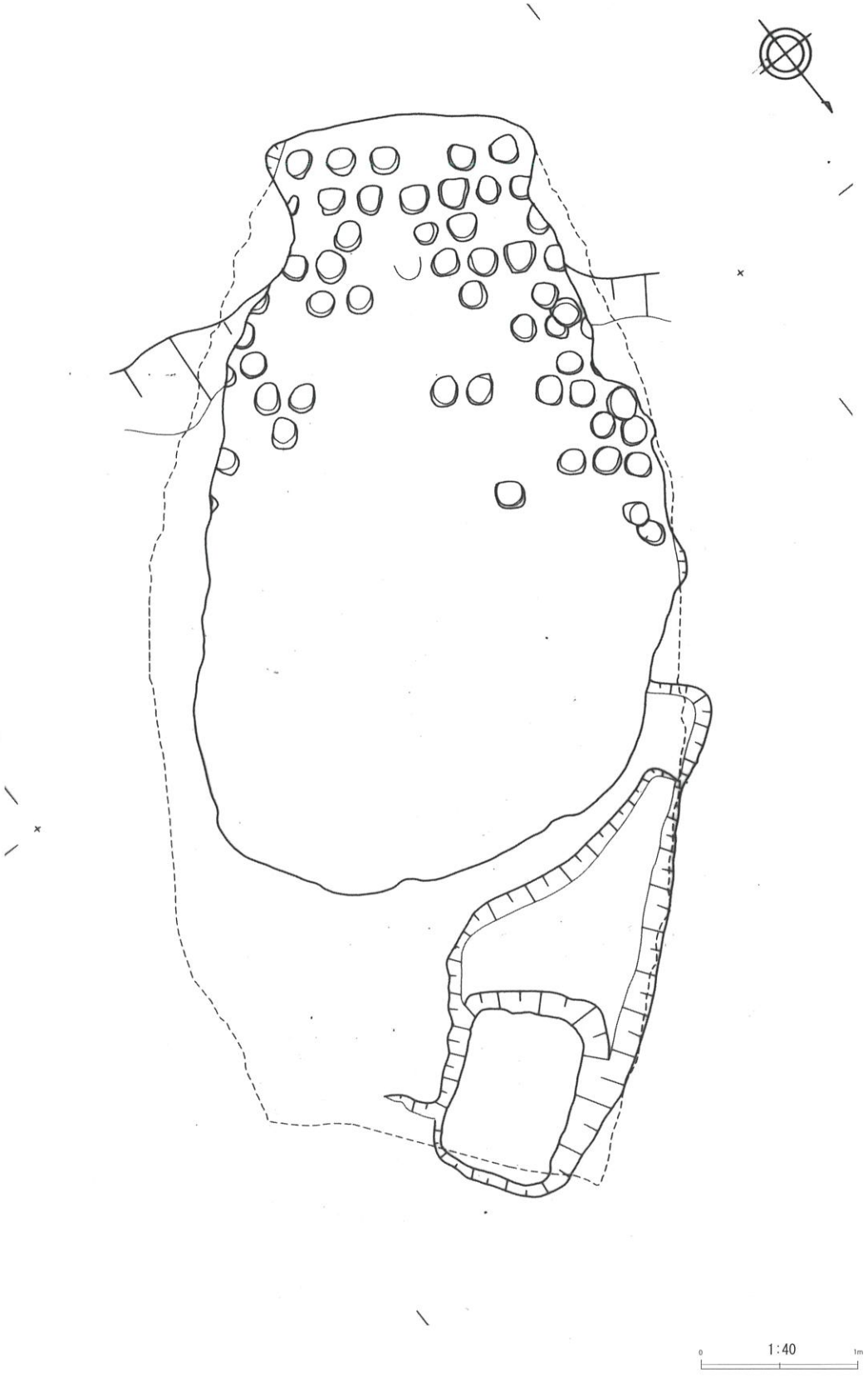
第２図　遺構図略図



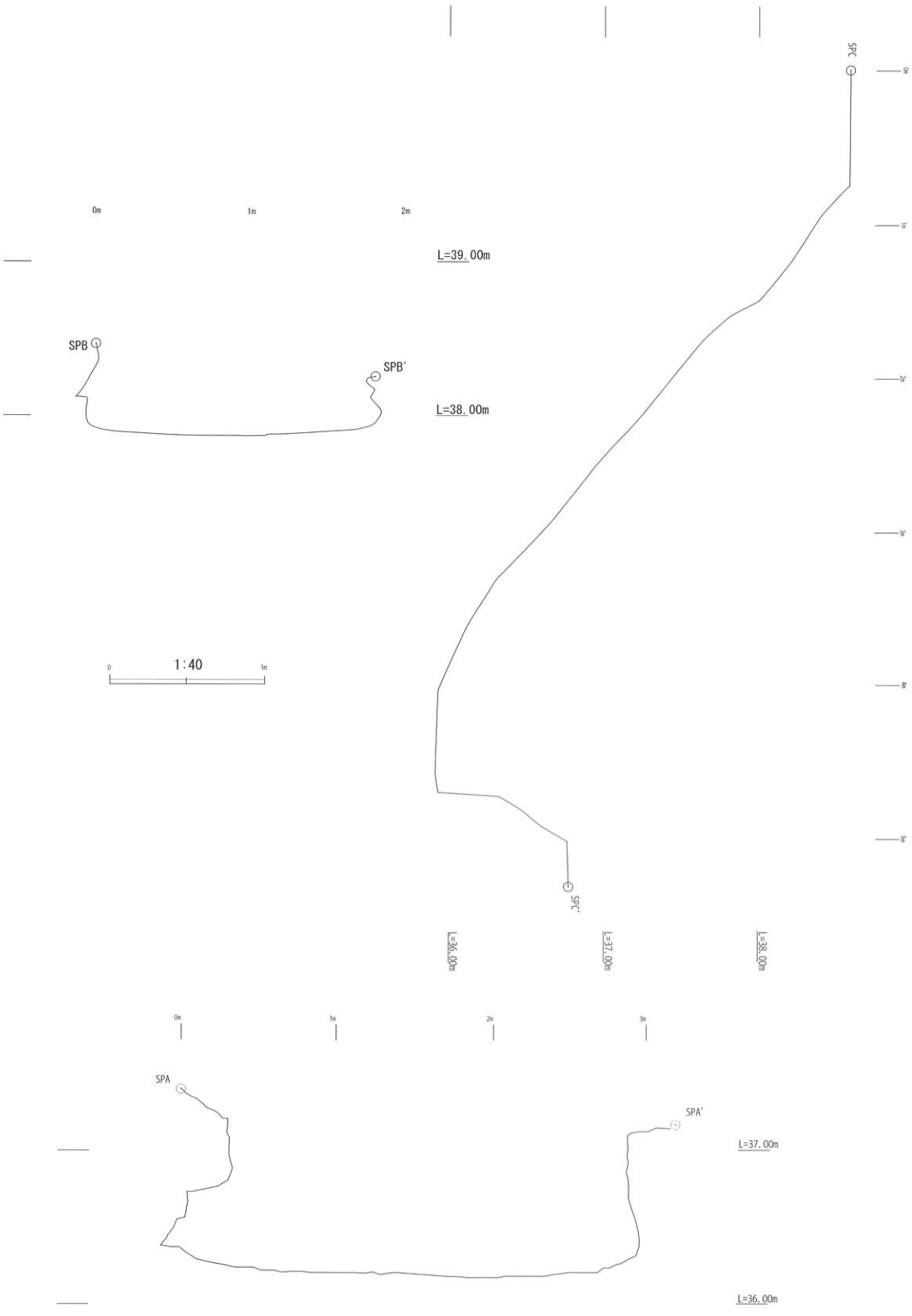
第3図　2号窯平面図（1：40）



第4図　2号窯エレベーション図（1：40）

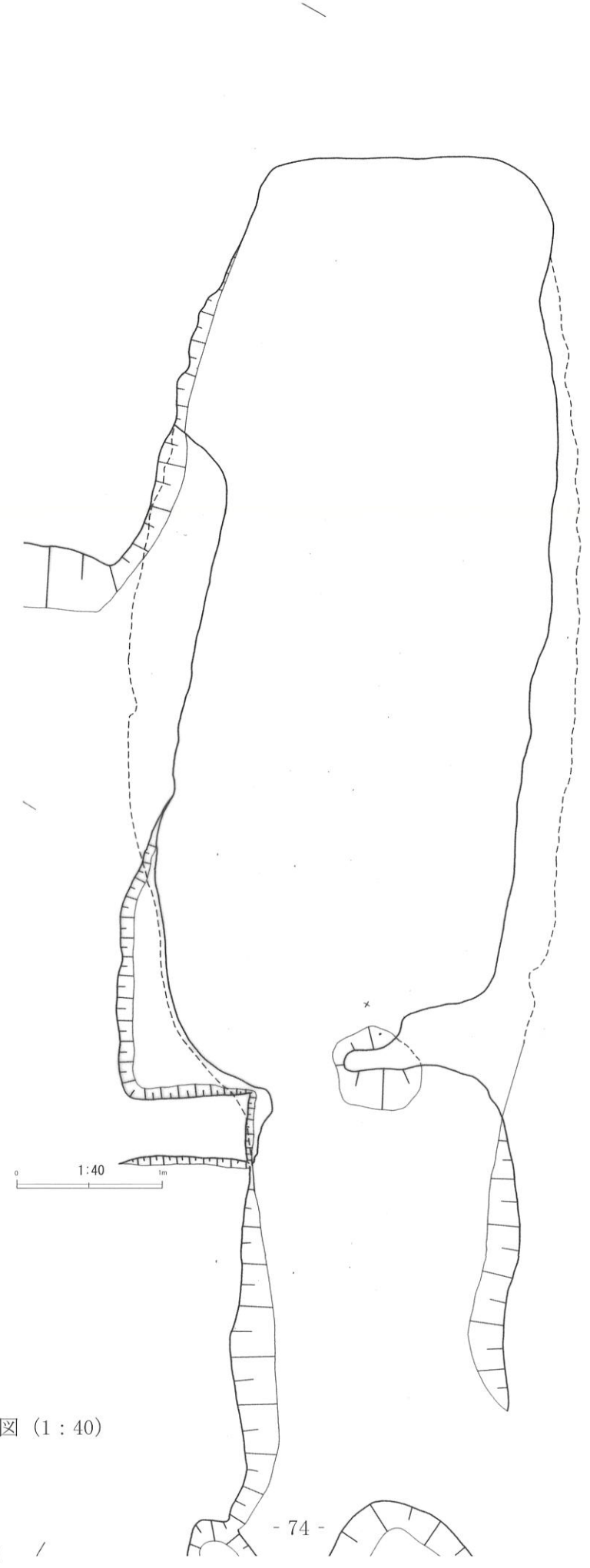


第5図　3号窯平面図（1：40）

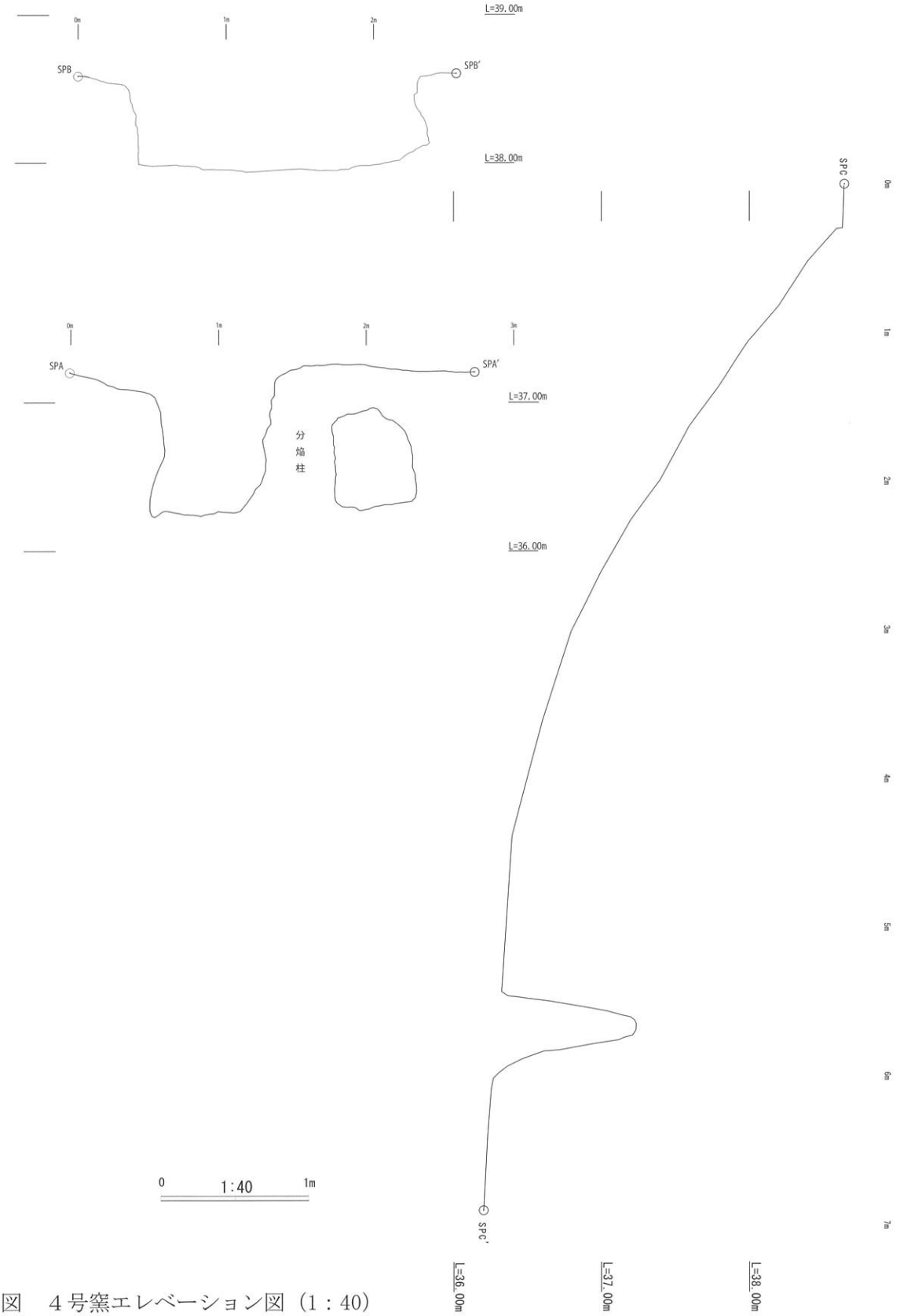


第6図　3号窯エレベーション図（1：40）

第７図　３号窯床面下施設遺物配置図（１：20）

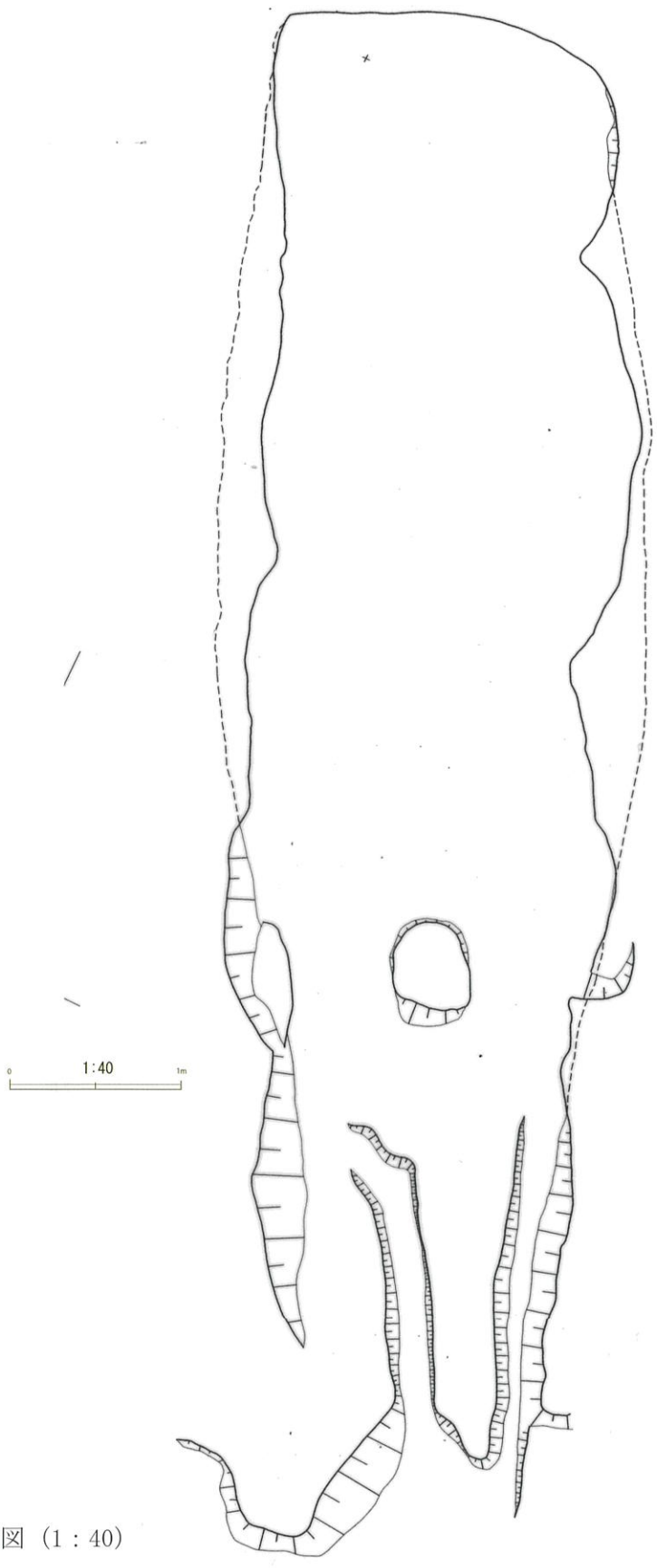


第 8 図　4 号窯平面図（1：40）

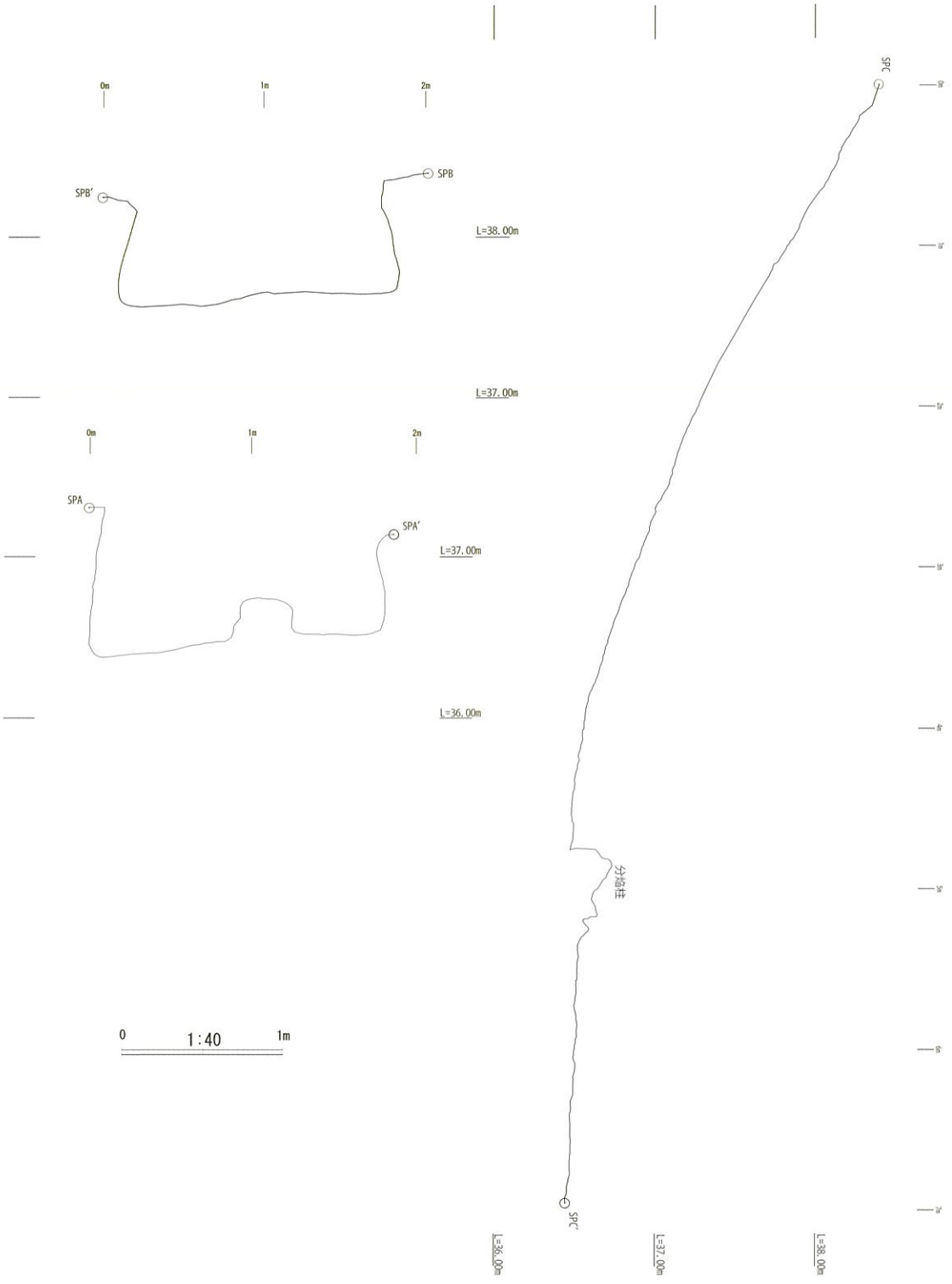


第９図　４号窯エレベーション図（1：40）

第 10 図　4 号窯床面下施設遺物配置図（1：20）



第 11 図　５号窯平面図（1：40）



第12図　5号窯エレベーション図（1：40）

第 13 図　5 号窯床面下施設遺物配置図（1：20）

図版１　調査区全景

図版２　窯体全景

3　２号窯・３号窯（北東から）

4　２号窯断ち割り状況（北東から）

5　２号窯断ち割り状況（北東から）

6　３号窯焼台出土状況（北から）

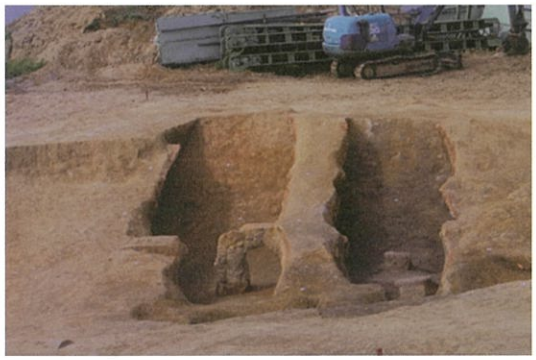
7　３号窯完掘状況（北東から）

8　３号窯断ち割り状況（北東から）

9　３号窯床面下施設状況遠景（南西から）

10　３号窯床面下施設状況近景（北東から）

図版３　２・３号窯



11　４号窯・５号窯（北東から）

13　４号窯分焔柱（南西から）

15　４号窯床面下施設遠景（南西から）

12　４号窯完掘状況（北東から）

14　４号窯断ち割り状況（南西から）

16　４号窯床面下施設近景（北東から）

図版４　４号窯

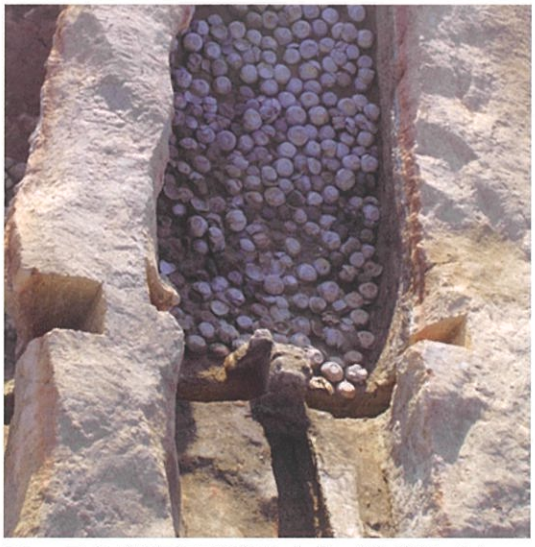
17　５号窯完掘状況（南西から）

18　５号窯床面下施設完掘（南西から）

19　５号窯断ち割り状況（南西から）

20　５号窯断ち割り状況（北東から）

21　５号窯床面下施設状況上部（北東から）



23　５号窯床面下施設全景（北東から）

22　５号窯床面下施設状況下部（北東から）

図版５　５号窯

第２章　遺　物

第１節　器形分類

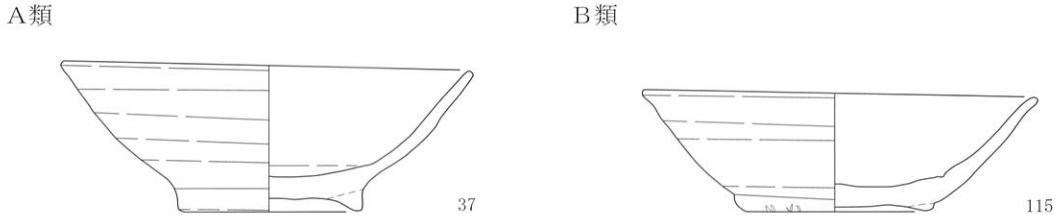
今回の発掘調査では、36 リットルコンテナに 363 箱分の遺物が出土した。主な出土遺物は、碗・小碗・小皿・片口鉢である。それ以外に片口山茶碗・片口碗・陶錘・壺・子持ち器台・焼台・伊勢型塝が出土した。遺物の中には仏具として製作されたと思われるものも数点見つかった。

碗

体部の形は丸みを帯びていて、器体の法量がやや大きく、高台の作りが比較的丁寧で端部に付着している籾痕や砂粒が少ないものをＡ類とした。

Ａ類よりも体部に丸みがなく直線的で、器体の法量はＡ類よりもやや小さく、高台の作りが雑で端部に籾痕や砂粒が多く残るものをＢ類とした。

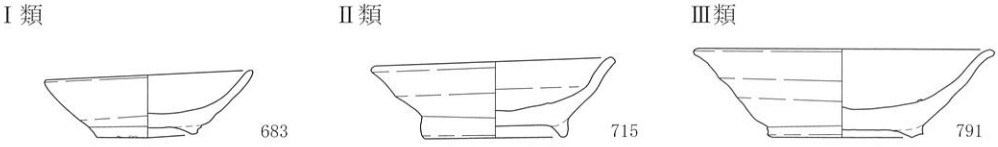
その法量は、Ａ類で平均が口径 16.4 ㎝、高台径 7.9 ㎝、器高 5.3 ㎝、Ｂ類の平均が口径 16.0 ㎝、高台径 7.8 ㎝、器高 5.0 ㎝である。



第 14 図　碗類器形分類図

小碗

碗をそのまま小さくした形のものである。口径が９㎝未満のものをⅠ類とし、９㎝以上から１０㎝未満のものをⅡ類、１０㎝以上のものをⅢ類とした。

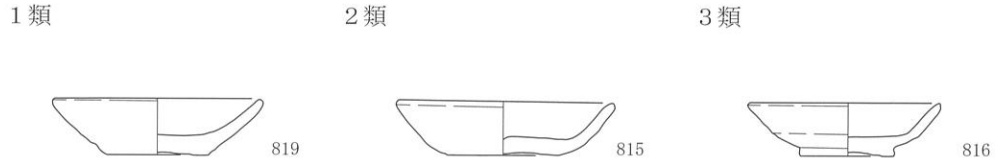


第 15 図　小碗器形分類図

小皿

器体に高台が無い皿で、底部から体部への移行が明瞭なものを１類とした。底部から体部への移行が緩やかで体部がやや丸みを帯びたものを２類とした。底部が円柱状に突出するものを３類とした。

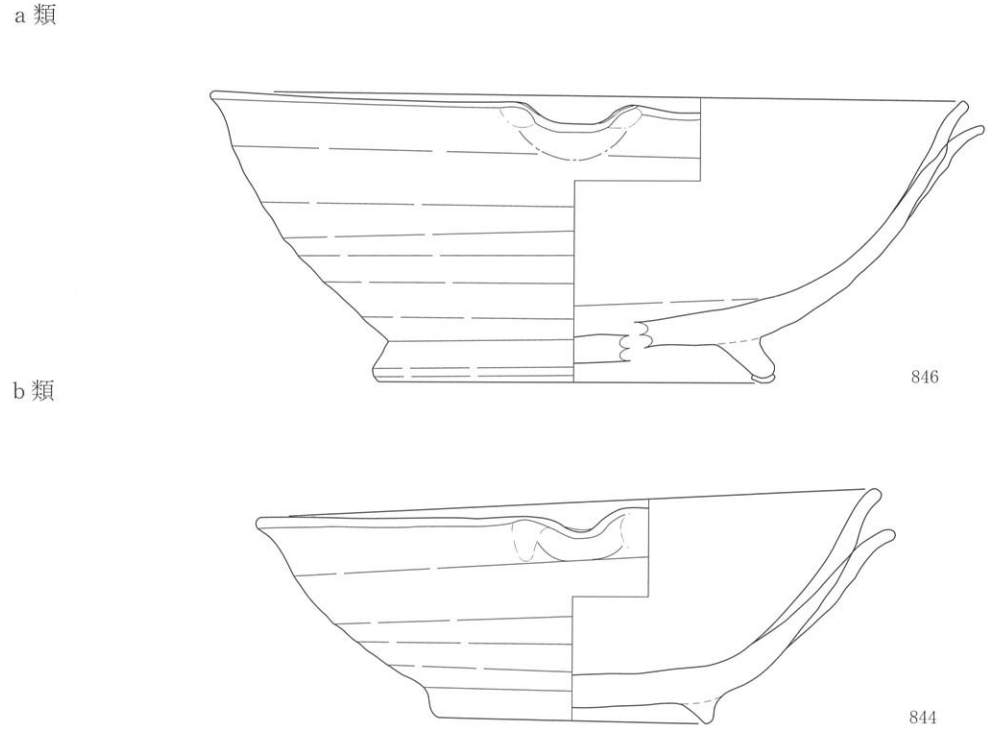
その法量は、１類の平均が口径 8.1 ㎝、底径 4.4 ㎝、器高 2.2 ㎝である。２類の平均は口径 8.2 ㎝、底径 4.4 ㎝、器高 2.2 ㎝である。３類の平均は口径 8.1 ㎝、底径 4.1 ㎝、器高 2.3 ㎝である。



第 16 図　小皿器形分類図

片口鉢

計測可能な遺物はすべて口縁端部がやや尖り体部が緩やかに湾曲する。常滑窯編年片口鉢Ⅰ類に属する。大きなものをａ類、小さいものをｂ類とした。



第 17 図　鉢類器形分類図

第２節　出土遺物について

今回出土した遺物は調査区全体で、碗 7557 点、小碗・小皿 4391 点、鉢 15 点、重ね碗 796 組（2853 点）、重ね小碗・小皿 1057 組（3174 点）、重ね碗皿 28 組、焼台 152 点、片口山茶碗 4 点、伊勢型鍋 4 点、壷 4 点、子持ち器台 1 点、仏具小碗 1 点、陶錘 1 点が出土した。その多くが愛知用水支線埋設工事により破壊された撹乱部分に属しており、窯内から出土した遺物は少量であった。

なお、碗、皿、鉢類については底径が 1/2 以上残存するものを 1 個体とし、他の器種については、破片から明らかに 1 個体と判別できるものをカウントした。

2 号窯に関する遺物

窯内からは碗 19 点、重ね碗 14 組（26 点）、小碗 2 点、小皿 8 点、重ね皿 3 組（10 点）、鉢 1 点が出土した。

碗（遺物番号 1468・1469）

分類計測した 2 点は、いずれも高台のつくりが雑で体部が直線的な B 類である。1469 は焼成不良である。

小碗（遺物番号 1470）

分類計測した 1 点はⅡ類で内底面は回転ナデ、外底面はナデ調整が施されているが、糸切り痕が不明瞭に残っている

小皿（遺物番号 100）

分類計測した 1 点は 1 類で、外面底部と体部の境目が明瞭である。外底面は回転糸切り痕がナデ消されている。内底面は自然釉の付着により不明である。

片口鉢（遺物番号 860）

分類計測した 1 点は b 類で、内底面は回転ナデ、外底面は未調整で自然釉が付着している。体部下半に回転ヘラ削りによる調整が施されている。

3 号窯に関する遺物

窯内からは碗 14 点、重ね碗 1 組（4 点）、小碗 2 点、焼台 58 点が出土した。

碗（遺物番号 113）

分類計測した 1 点は A 類で、高台のつくりが丁寧で体部はやや丸みを帯びている。内底面にはナデによる調整が施され、外底面はナデ調整が施されているが、糸切り痕が不明瞭に残っている。

小碗（遺物番号 810）

分類計測した 1 点はⅡ類で、内底面は指ナデ調整、外底面はナデ調整が施されているが、糸切り痕が不明瞭に残っている。

【床面下施設】

床面下施設からは碗 159 点、重ね碗 3 組（7 点）、小碗 1 点、小皿 1 点　重ね碗皿 4 組（碗 5 点、

小碗4点)、が出土した。

碗（遺物番号122～179）

分類計測した58点は、口径15.8～17.5ｃｍ平均16.6ｃｍ、高台径7.2～9.4ｃｍ平均8.1ｃｍ、器高4.5～5.9ｃｍ平均5.2ｃｍである。

Ａ類とＢ類はどちらも29点出土している。内底面に指ナデ調整痕を持つものは9点と少ない。外底面は糸切り後未調整のものが1点、糸切りをナデ消してあるものが8点ある。焼成はやや不良なものが3点、不良なものが2点あるがおおむね良好である。

小皿（遺物番号824）

分類計測した1点は1類で、外面底部と体部の境目が明瞭である。外面体部の下方を強くナデており、体部の中央付近に稜を持つ。内底面は回転ナデ、外底面は糸切りをナデ消してある。

4号窯に関する遺物

窯内からは碗196点、重ね碗18組（62点）、小碗4点、小皿48点、重ね皿1組（2点）、重ね碗皿1組（碗7点、小碗1点）、が出土した。

碗（遺物番号110～112、114・115、119～121）

分類計測した8点は、口径14.7～16.8ｃｍ平均15.5ｃｍ、高台径7.2～8.5ｃｍ平均7.9ｃｍ、器高4.7～5.4ｃｍ平均5.0ｃｍである。

119・120以外はＢ類である。内底面に指ナデ調整痕を持つものは2点、ほかは回転ナデである。外底面は糸切りをナデ消してあるものが2点ありほかは糸切り痕が不明瞭に残る。焼成はやや不良なものが1点あるがおおむね良好である。

小碗（遺物番号822・843）

分類計測した2点はいずれもⅠ類である。内底面はどちらも回転ナデ、外底面はナデ調整により糸切り痕が消されているもの（843）と糸切り痕が不明瞭に残るもの（822）がある。

小皿（遺物番号103～107、110・112）

分類計測した7点は、口径7.6～8.7ｃｍ平均8.2ｃｍ、底径3.7～5.5ｃｍ平均4.3ｃｍ、器高2.1～2.5ｃｍである。底部が円柱状に突出する3類が最も多く5点、底部と体部の境目が不明瞭な2類が2点ある。窯内で確認された3類は4号窯でのみ確認されている。

【床面下施設】

床面下施設からは碗124点、重ね碗8組（21点）、焼台21点が出土した。

碗（遺物番号180～216）

分類計測した37点はすべてＢ類で、口径14.3～16.4ｃｍ平均15.5ｃｍ、高台径7.1～9.2ｃｍ平均7.8ｃｍ（高台のない186除く）、器高4.2～5.5ｃｍ平均4.9ｃｍ（高台のない186除く）である。内底面に指ナデ調整痕を持つものは22点、他は回転ナデである。外底面は糸切りをナデ消してあるものが4点、糸切り痕が明瞭に残るものが2点、他は糸切り痕が不明瞭に残る。焼成はやや不良なものが5点、不良なものが2点ある。体部の器壁の厚さはほぼ一定のものが多いが、口縁部下を締めなでている個体も見られる。

5号窯に関する遺物

窯内からは碗85点、重ね碗12組（43点）、小碗8点、小皿（35点）、重ね皿15組（46点）、重ね碗皿1組（碗10点・小碗3点）が出土した。

碗（遺物番号116～118）

分類計測した3点は、口径平均16.3ｃｍ、高台径平均7.6ｃｍ、器高平均5.0ｃｍである。116・117はA類、118はB類である。117・118は内底面に指ナデ調整痕を持ち116は回転ナデである。外底面は糸切りをナデ消してあるものが116、他2点は糸切り痕が不明瞭に残る。

小皿（遺物番号819・820）

分類計測した2点はいずれも1類で体部は直線的、外底面は糸切り痕が明瞭に残る。819の内底面には指ナデ調整が認められる。

【床面下施設】

床面下施設からは碗307点、重ね碗132組（528点）、重ね皿1組（8点）、焼台73点が出土した。

碗（遺物番号217～223）

分類計測した8点はすべてB類で、口径15.0～16.8ｃｍ平均15.9ｃｍ、高台径7.1～8.5ｃｍ平均7.7ｃｍ、器高4.0～5.5ｃｍ平均4.8ｃｍである。内底面に指ナデ調整痕を持つものは4点、他は回転ナデである。すべての個体の外底面に糸切り痕が不明瞭に残る。

体部の器壁の厚さはほぼ一定のものが多いが、口縁部下を締めなでている個体も見られる。

灰原の遺物

灰原については発掘時にその範囲や窯体との関連がつかめなかったため、灰原部分から出土した遺物すべてを一括して検討せざるを得ず、残念な結果となってしまった。

灰原からは碗2042点、重ね碗149組（582点）、小碗・小皿1249点、重ね皿・小碗151組（463点）、重ね碗皿8組（碗23点、小碗・皿17点）、鉢5点、片口山茶碗2点、壷2点、陶錘1点、子持ち器台1点、仏具と思われる小碗1点が出土した。

碗（遺物番号54～109、225・226）

分類計測した58点のうちA類14点、B類44点で、口径15.2～17.2ｃｍ平均16.1ｃｍ、高台径6.6～9.6ｃｍ平均7.8ｃｍ、器高4.3～5.9ｃｍ平均5.1ｃｍである。内底面に指ナデ調整痕を持つものは41点、他は回転ナデである。外底面に糸切り痕が明瞭に残るものは1点のみで、糸切りをナデ消しているものが18点、ナデ調整が施されているものの糸切り痕が不明瞭に残るものが39点ある。体部の器壁の厚さはほぼ一定のものが多いが、口縁部下を締めなでている個体も見られる。また、補修痕を持つ個体も出土した。

小碗・小皿（遺物番号659～799、803～813、825～842）

【小碗】

分類計測した110点のうちⅠ類37点、Ⅱ類51点、Ⅲ類22点で、口径15.0～16.8ｃｍ平均9.2ｃｍ、高台径7.1～8.5ｃｍ平均3.9ｃｍ、器高4.0～5.5ｃｍ平均2.9ｃｍである。内底面に指ナデ調整痕を持つものは17点、他は回転ナデである。外底面は糸切りをナデ消しているものが多いが、

糸切り痕が不明瞭に残るものが 32 点ある。

【小皿】

分類計測した 62 点のうち 1 類 51 点、2 類 3 点、3 類 3 点で、口径 15.0～16.8ｃｍ平均 8.3ｃｍ、底径 7.1～8.5ｃｍ平均 4.5ｃｍ、器高 4.0～5.5ｃｍ平均 2.2ｃｍである。内底面に指ナデ調整痕を持つものは 14 点、31 点は回転ナデである。外底面に糸切り痕が明瞭に残るものが 9 点、糸切りをナデ消しているものが 2 点、他は糸切り痕が不明瞭に残る。

体部は直線的なものが最も多いが、口縁部下を強く締めなでているものや、外面体部の下方を強くナデており、体部の中央付近に稜を持つものもある。

片口鉢（遺物番号 850、853～855、859）

分類計測した 5 点はすべてｂ類で、体部下半に回転ヘラ削りによる調整が施されている。口径平均（23.8）ｃｍ、高台径平均 11.5ｃｍ、器高平均（8.8）ｃｍである。内底面に指ナデ調整痕を持つものが 3 点、外底面は 4 点が未調整で自然釉が付着し、2 点はナデによる調整が施されている。

片口山茶碗（遺物番号 851、1445）

1445 は一見片口碗にも見えるが、肩の張りが少ないこと、片口を指で成形していることなどから、片口山茶碗と判断した。外底面は糸切り痕が不明瞭に残る。851 の内底面は回転ナデ、外底面は糸切り痕をナデ消している。

壷（遺物番号 1434、1467）

1434 は台形の低い高台をもつ。体部下方のみ残存している。高台端部には砂粒が多く付着している。胎土は緻密で焼成も良好である。1467 は口縁部の一部で、胎土が緻密で丁寧な作りである。

子持ち器台（遺物番号 894）

Ⅰ類の小碗に融着している。胎土は緻密で焼成も良好である。底径 4.6ｃｍ、残存高 2.6ｃｍである。

小碗（遺物番号 1463）

仏具の一種と思われる。全体に丁寧な作りで高台端部の付着痕も少ない。

陶錘（遺物番号 1453）

長さ 6.4ｃｍ、幅 3.6ｃｍの筒型、焼成不良で灰白色を呈する。

カクランの遺物

愛知用水の支線埋設工事により破壊された部分から出土した遺物である。窯体との関連は不明である。碗 4491 点、小碗・小皿 3018 点、重ね碗 393 組（1296 点）、重ね小碗・小皿 469 組（1319 点）、重ね碗皿 9 組（碗 23 点、小碗・小皿 15 点）、鉢 10 点、壷 2 点、片口山茶碗 1 点、伊勢型塝 4 点が出土した。

碗（遺物番号 1～53）

分類計測した 53 点のうちＡ類 8 点、Ｂ類 45 点で、口径 14.9～17.0ｃｍ平均 16.1ｃｍ、高台径 6.4～9.0ｃｍ平均 7.9ｃｍ、器高 4.2～6.0ｃｍ平均 5.2ｃｍである。内底面に指ナデ調整痕を持つものはＡ類のすべてとＢ類の 17 点、他は回転ナデである。外底面に糸切り痕が明瞭に残るものがＢ類に 2 点、糸切りをナデ消しているものがＡ類に 3 点、Ｂ類に 9 点、他は糸切り痕が不明瞭に残る。

体部の器壁の厚さはほぼ一定のものが多いが、口縁部下を締めなでている個体も見られる。

小碗・小皿（遺物番号 227～658）

【小碗】

分類計測した 151 点のうちⅠ類 103 点、Ⅱ類 47 点、Ⅲ類 1 点で、口径 15.0～16.8ｃｍ平均 8.6ｃｍ、高台径 7.1～8.5ｃｍ平均 3.6ｃｍ、器高 4.0～5.5ｃｍ平均 2.6ｃｍである。内底面に指ナデ調整痕を持つものは 72 点ある。外底面の糸切りをナデ消しているものが　57 点、他は糸切り痕が不明瞭に残る。

【小皿】

分類計測した 280 点のうち 1 類 248 点、2 類 15 点、3 類 17 点で、口径 15.0～16.8ｃｍ平均 8.1ｃｍ、底径 7.1～8.5ｃｍ平均 4.4ｃｍ、器高 4.0～5.5ｃｍ平均 2.2ｃｍである。内底面に指ナデ調整痕を持つものは 139 点、104 点は回転ナデである。外底面に糸切り痕が明瞭に残るものが 27 点、糸切りをナデ消しているものが 18 点、230 点は糸切り痕が不明瞭に残る。体部は直線的なものが最も多いが、口縁部下を強く締めなでているものや、外面体部の下方を強くナデており、体部の中央付近に稜を持つものもある。

片口鉢（遺物番号 844～849、856、858）

分類計測した 7 点のうち、1 点（846）がａ類、他はｂ類である。口径 14.4ｃｍ～29.8ｃｍ平均（22.9）ｃｍ、高台径 10.0ｃｍ～15.5ｃｍ平均（11.7）ｃｍ、器高 8.6ｃｍ～11.5ｃｍ平均 9.5ｃｍである。内底面に指ナデ調整痕を持つものが 3 点、外底面は未調整で自然釉のかかるものが 1 点、糸切り状の痕が確認できるものが 1 点、他は不明を除きナデによる調整が施されている。体部下方に回転ヘラ削りを施しているものが 4 点ある。

849 は内面下方の一部にヘラ状の工具による調整痕が見られる。

片口山茶碗（遺物番号 1465）

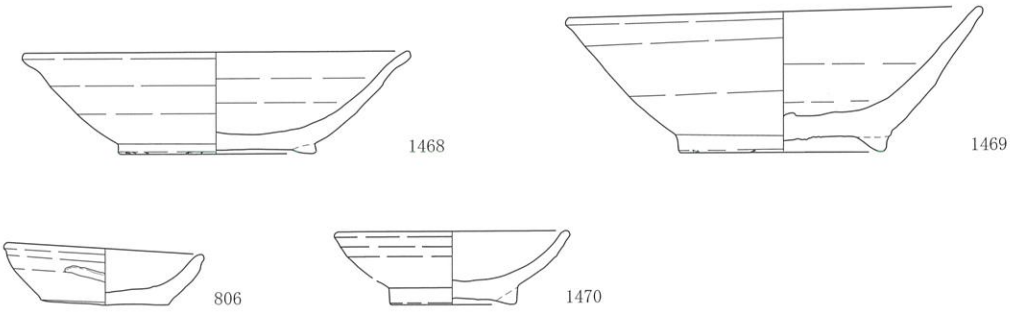
高台、片口が欠損している。内底面は指ナデ、外底面は糸切り痕が不明瞭に残る。

壷（遺物番号 857、1464）

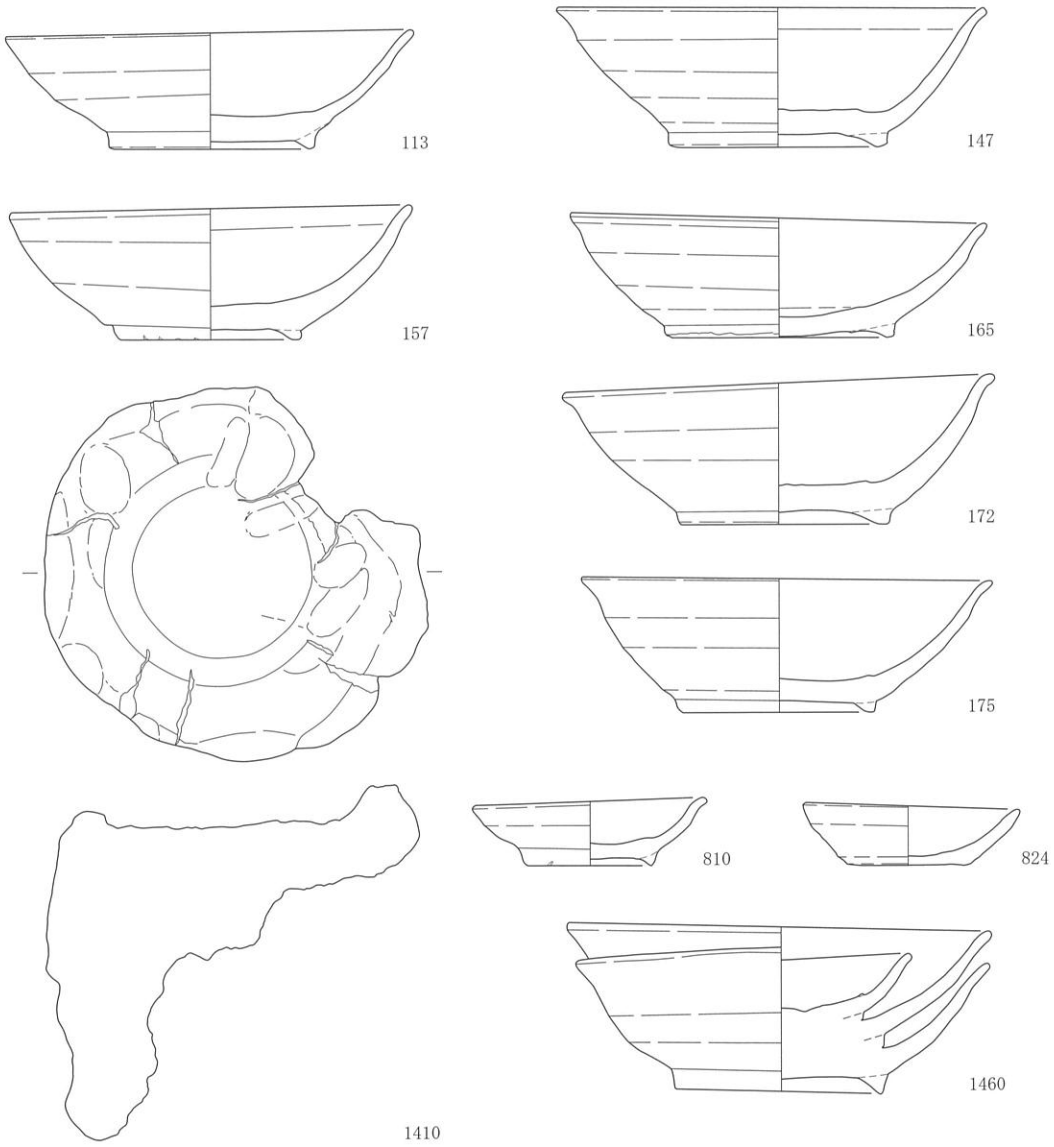
857 は底部と体部下方のみ残存する。台形の高台を丁寧に付けてある。高台端部は自然釉がかかり、砂粒が少々付着しセンイ痕も残るが、変形はほとんどない。全体にやや厚手である。1464 番は口縁部の一部で器壁が薄く、丁寧な作りである。

伊勢型塝（遺物番号 1450）

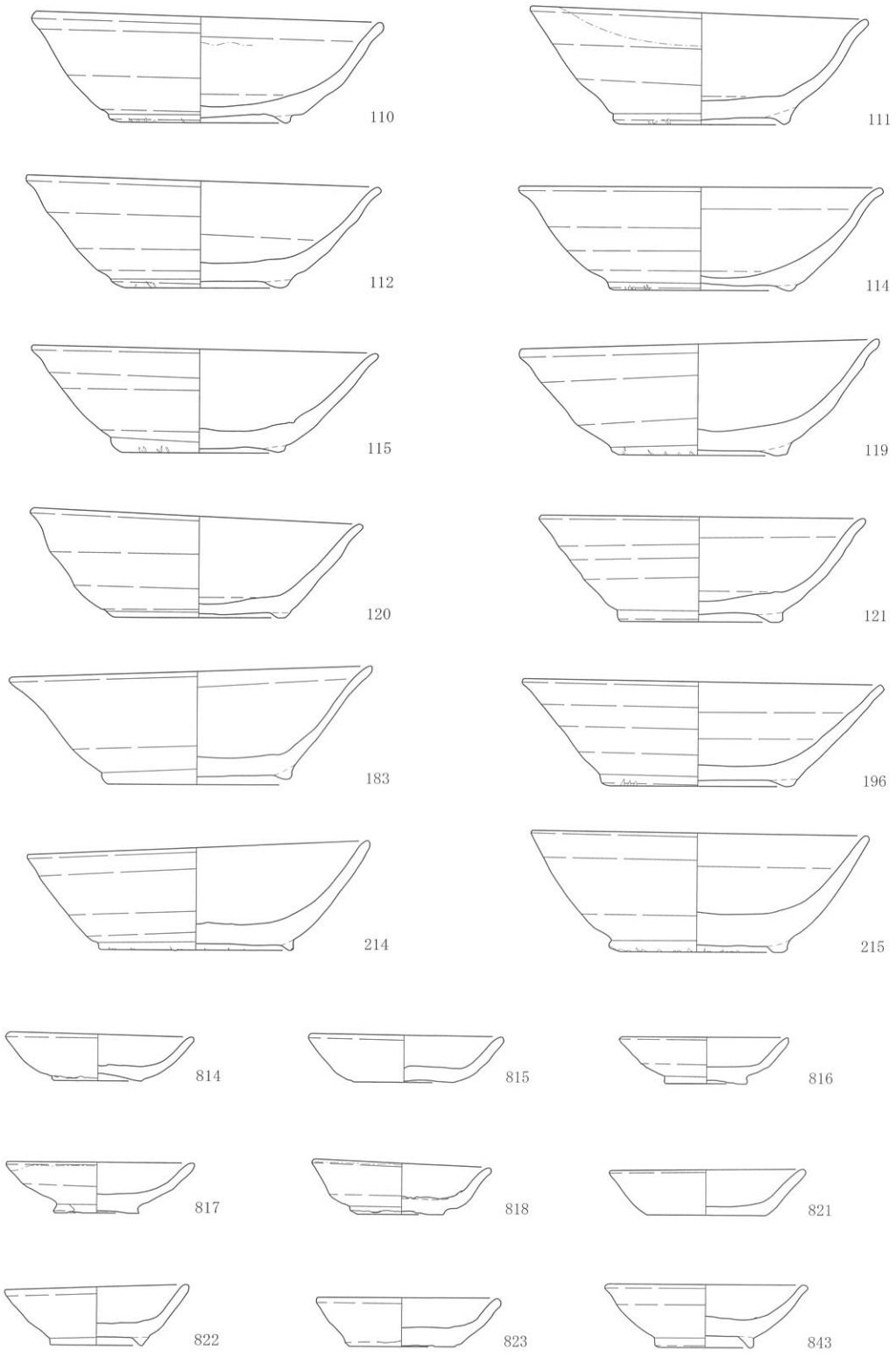
計測した 1 点は口径推定 19.0ｃｍ、焼成は甘く、浅黄色を呈する。



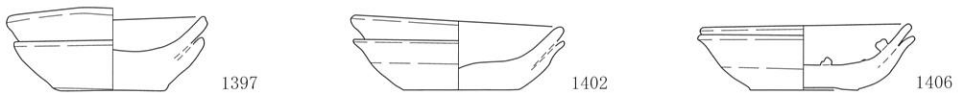
第 18 図　2 号窯碗・皿



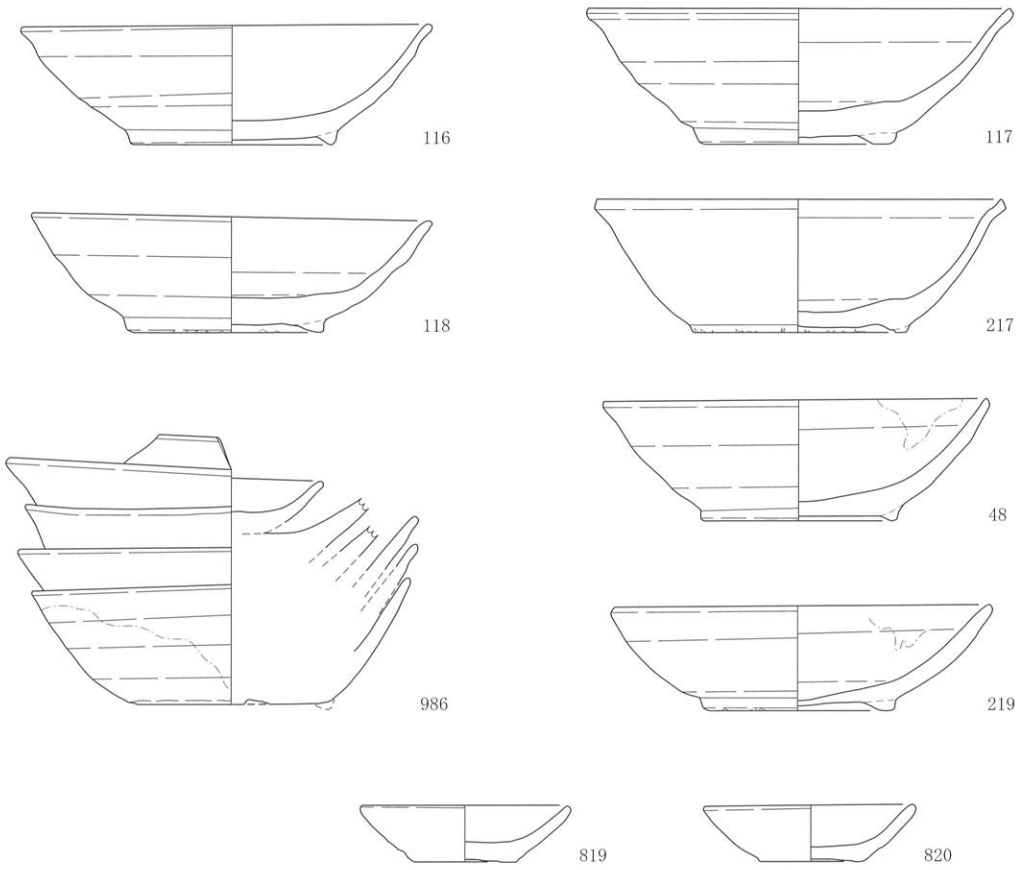
第 19 図　3 号窯碗・皿


110
111
112
114
115
119
120
121
183
196
214
215
814
815
816
817
818
821
822
823
843
0
10cm

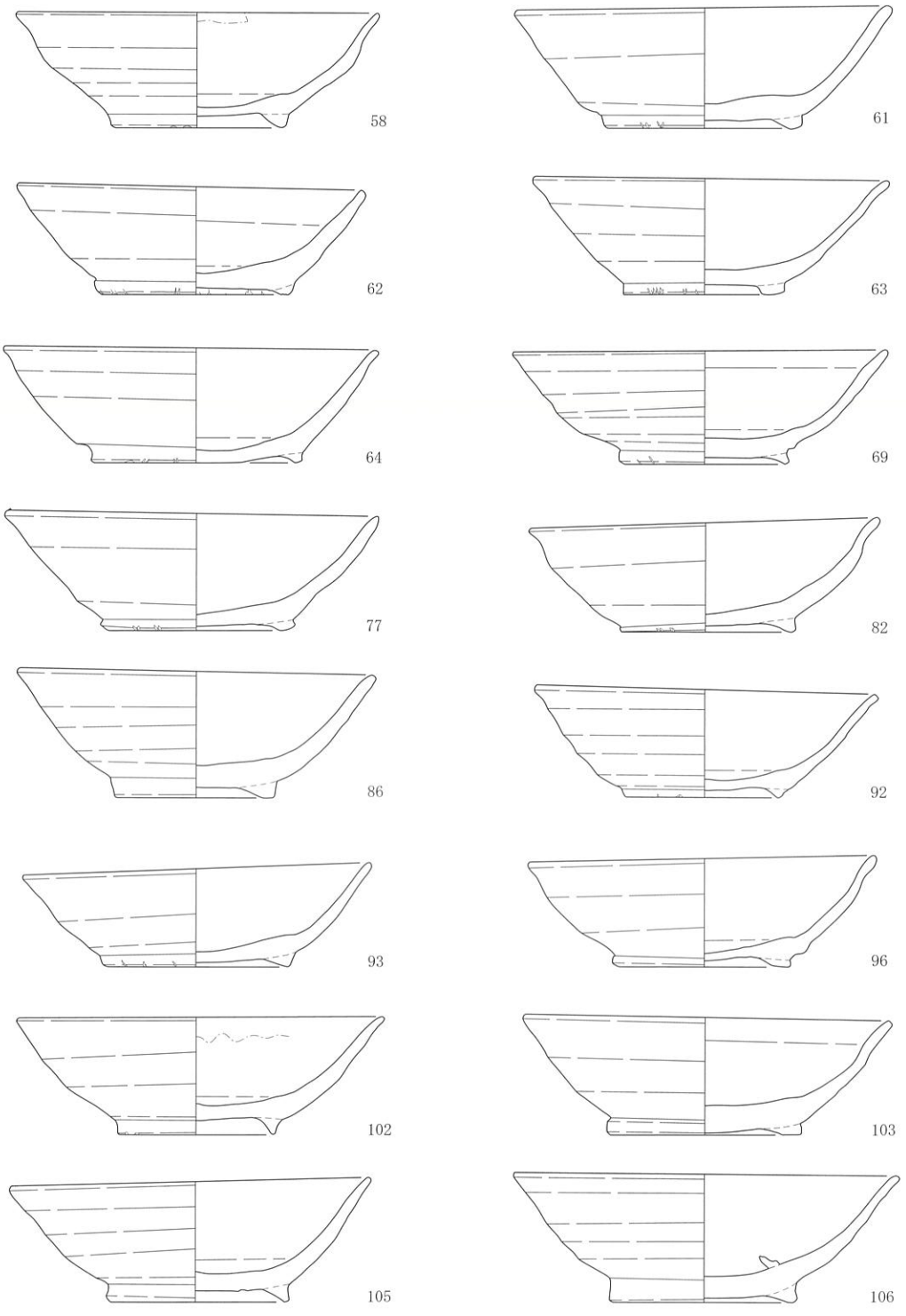
第 20 図　4 号窯碗・皿



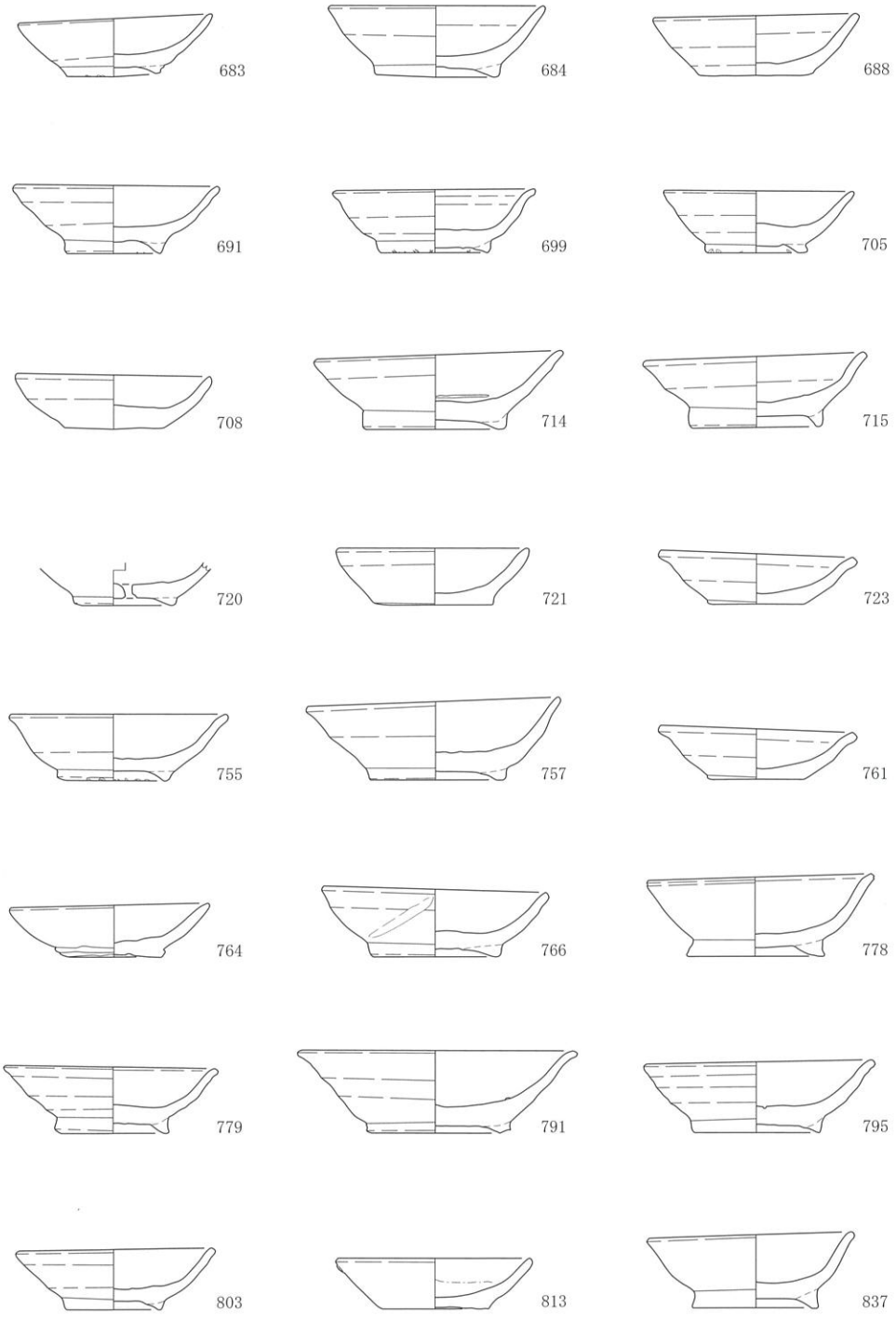
第 21 図　4 号窯皿



第 22 図　5 号窯碗・皿

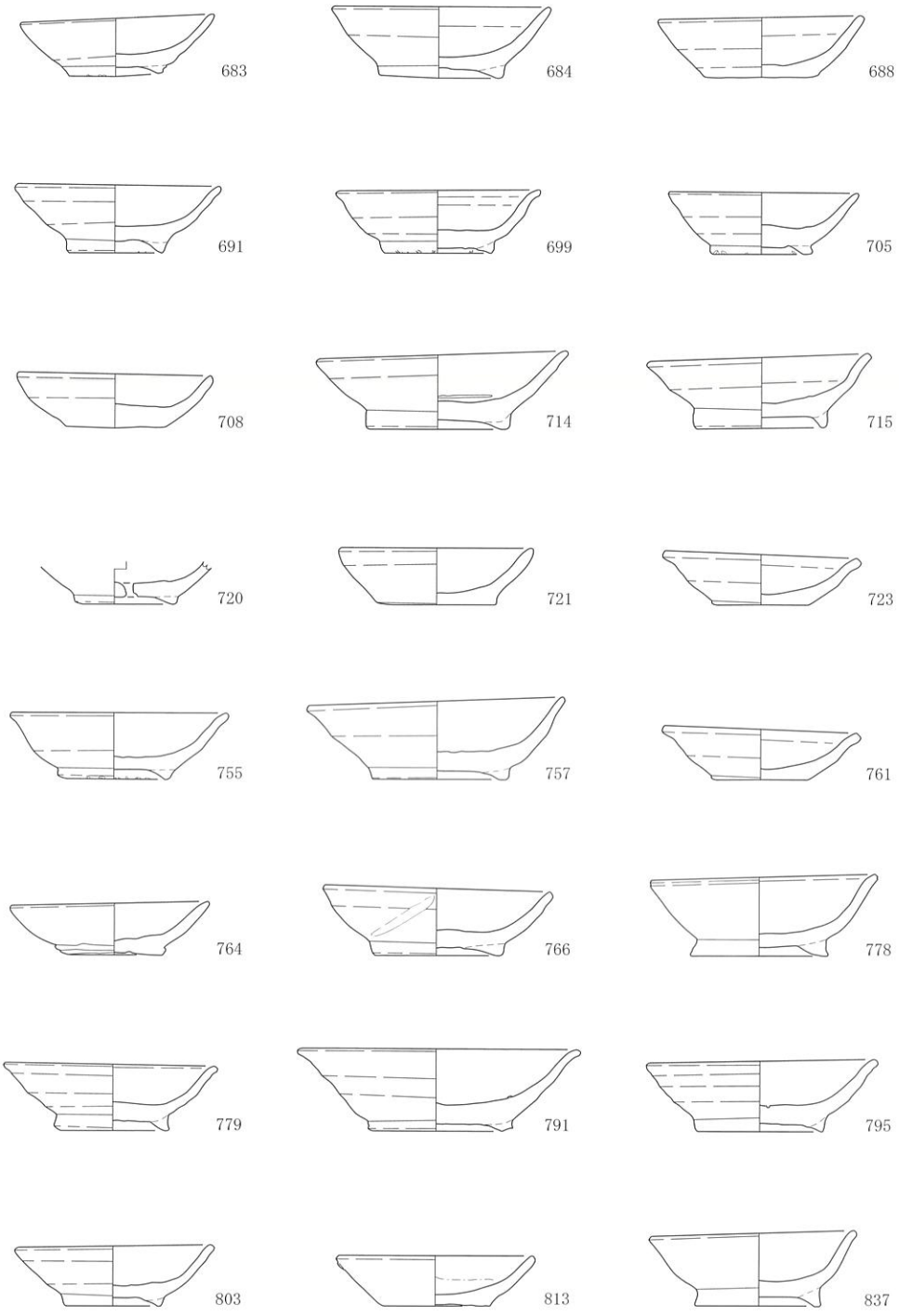


第 23 図　灰原碗

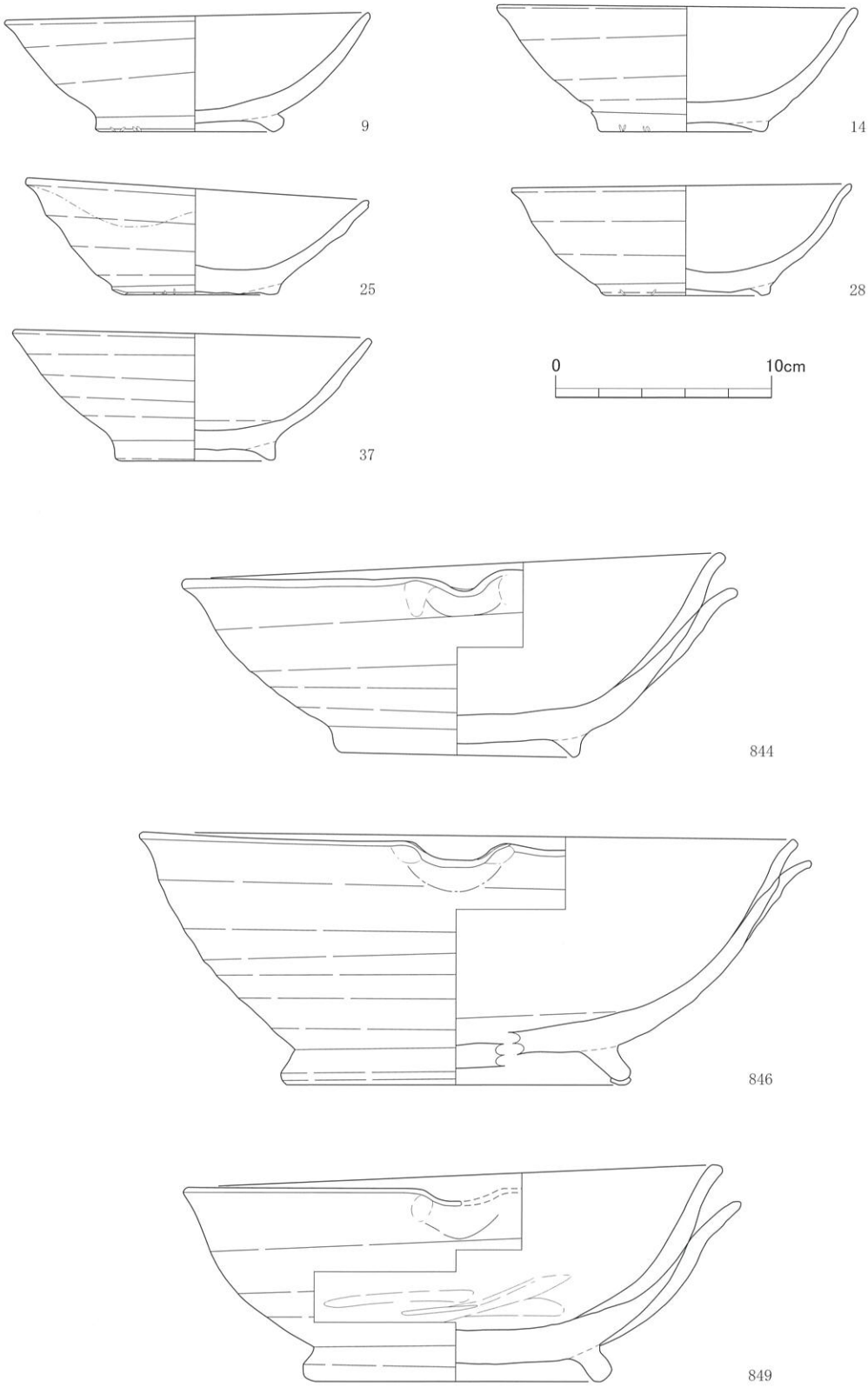

683
684
688
691
699
705
708
714
715
720
721
723
755
757
761
764
766
778
779
791
795
803
813
837

第 24 図　灰原皿

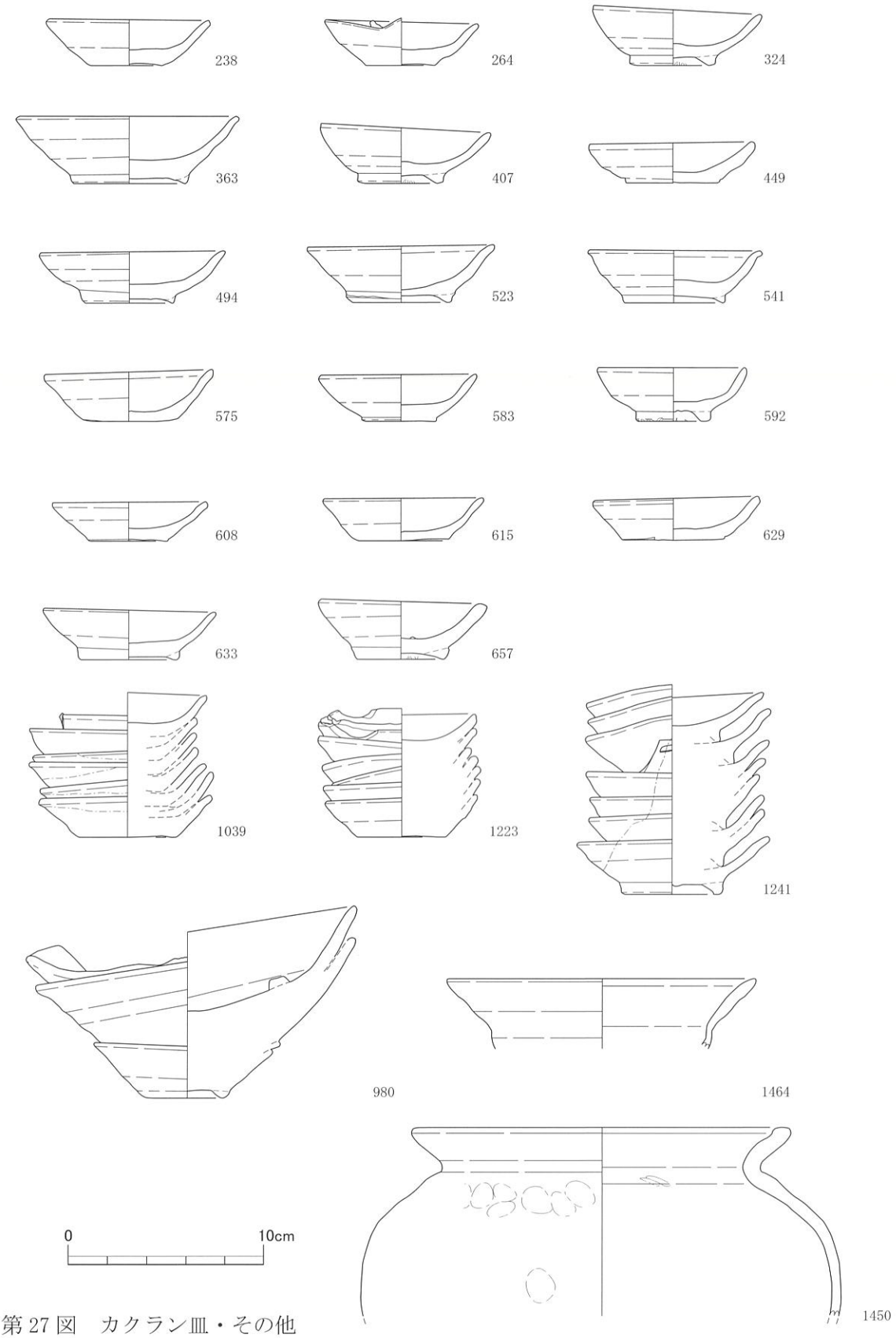
0
10cm


683
684
688
691
699
705
708
714
715
720
721
723
755
757
761
764
766
778
779
791
795
803
813
837
0
10cm

第 25 図　灰原その他



第26図　カクラン碗・鉢



第 27 図　カクラン皿・その他

9

14

25

28

37

58

61

62

63

64

69

77

82

86

92

93

101

103

図版 6　遺物写真 1

105

106

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

147

157

165

172

図版７　遺物写真２

175

183

196

214

215

217

218

219

238

264

324

363

407

449

494

523

541

575

583

592

図版 8　遺物写真 3

608

615

629

633

657

683

684

688

691

699

705

708

714

715

720

721

723

755

757

761

764

766

778

779

図版 9　遺物写真 4

791

795

803

806

810

813

814

815

816

817

818

819

820

821

822

823

824

837

894

844

846

849

図版 10　遺物写真 5

940

980

986

1039

1223

1241

1397

1401

1402

1403

1405

1410

1434

1439

図版 11　遺物写真 6

1445

1450

1453

1460

1462

1463

1464

図版 12　遺物写真 7

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
						口径	底径/高台径	器高												
1			碗	7H	カクラン	15.5	6.5	4.7	○	不明	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		天場もの
2			碗	6H	カクラン	15.8	6.9	5.1	○	—	×	もみ・センイ痕	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
3			碗	7G	カクラン	15.1	6.6	4.5	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		
4			碗	7G	カクラン	15.5	7.5	4.3	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
5			碗	7G	カクラン	16.1	7.4	4.9	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	やや粗い	○	B		
6			碗	7G	カクラン	15.8	8	4.9	○	○	△	不明	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
7			碗	7G	カクラン	15.8	7.2	5.3	○	○	△	なし	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A		
8			碗	7G	カクラン	15.5	7.6	5.4	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
9	○	○	碗	7G	カクラン	16.5	8.6	5.5	○	○	×	少々もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	A		
10			碗	7G	カクラン	15.8	7.3	4.4	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
11			碗	7G	カクラン	15.2	7.5	5.1	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		
12			碗	7G	カクラン	16.4	7.4	5.4	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
13			碗	7H	カクラン	16.3	7	5.7	○	○	△	もみ	2.5Y6/2	灰黄	やや不良	良	×	B		
14	○	○	碗	7H	カクラン	16.3	7.6	5.8	○	—	△	もみ・砂	2.5Y7/3	浅黄	やや不良	やや粗い	×	B		
15			碗	7H	カクラン	15.9	6.4	4.7	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
16			碗	6G	カクラン	16.8	8	4.9	○	○	×板目	もみ	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	B		口縁部にひび割れ
17			碗	6G	カクラン	16.4	8	5.3	○	○	△	もみ・センイ痕	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	B		口縁部にひび割れ
18			碗	6G	カクラン	15.8	7.5	4.7	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
19			碗	6G	カクラン	15.1	8	4.2	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		
20			碗	7G	カクラン	16.0	8	5.0	×	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		体部にひび割れ
21			碗	7G	カクラン	15.4	7.2	4.6	○	—	△	もみ	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B		
22			碗	7H	カクラン	16.8	7.8	5.3	○	○	△	もみ	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	B		
23			碗	6H	カクラン	15.1	7.2	4.5	○	○	△センイ痕	もみ	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B		タール付着(内面体部)
24			碗	6H	カクラン	16.2	7.8	4.3	○	—	○	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		
25	○	○	碗	7G	カクラン	15.6	7.6	5.3	○	—	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		
26			碗	7G	カクラン	16.0	8	5.0	○	○	△センイ痕	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	×	B		
27			碗	7G	カクラン	15.1	7.5	4.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
28	○	○	碗	7H	カクラン	15.5	7.7	5.1	○	—	×	もみ	10YR8/2	灰白	良	良	×	B		
29			碗	6G	カクラン	16.2	9	4.4	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	A		
30			碗	6G	カクラン	15.0	7.2	4.8	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
31			碗	7G	カクラン	(17.0)	7.8	5.5	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		ゆがみ激しい
32			碗	7H	カクラン	14.9	6.8	4.7	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
33			碗	7H	カクラン	15.9	8	4.8	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
34			碗	7H	カクラン	16.3	8.3	4.7	○	○	△	もみ	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B		
35			碗	7H	カクラン	16.2	7.2	4.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
36			碗	6G	カクラン	16.7	8.2	5.6	○	○	×	少々もみ	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	A		底部にひび割れ
37	○	○	碗	6G	カクラン	16.1	7.3	6.0	○	○	×	なし	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A		
38			碗	6G	カクラン	(15.8)	8	4.8	○	○	△	もみ	10YR6/4	にぶい黄橙	良	良	○	B		ゆがみ激しい
39			碗	6G	カクラン	16.5	8	4.5	○	○	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	B		
40			碗	6G	カクラン	16.0	8.1	5.1	○	—	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		
41			碗	6G	カクラン	(16.5)	8.2	5.0	○	—	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	B		底部にひび割れ ゆがみ激しい
42			碗	6G	カクラン	(16.5)	8.4	(5.0)	○	○	△	もみ・砂	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	B		
43			碗	6G	カクラン	16.5	7.4	5.3	○	—	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		
44			碗	6G	カクラン	15.6	7.2	5.2	○	—	×	もみ・センイ痕	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		体部にひび割れ
45			碗	6G	カクラン	16.5	7.9	5.2	○	○	△	少々もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	×	A		
46			碗	6G	カクラン	16.0	7.4	4.5	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
47			碗	6G	カクラン	16.3	7.3	4.4	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		体部にひび割れ
48			碗	6G	カクラン	17.0	8.2	5.4	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A		
49			碗	6G	カクラン	15.8	7.7	5.1	○	—	○	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		
50			碗	7G	カクラン	15.6	7	4.2	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		
51			碗	7H	カクラン	16.3	9	4.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
52			碗	6H	カクラン	16.6	8.5	5.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A		
53			碗	6H	カクラン	15.3	7.3	4.9	○	—	△	もみ	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B		体部にひび割れ
54			碗	5G	灰原	15.5	8.1	4.6	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		
55			碗	6I	灰原サブトレンチ内	15.5	7.6	5.2	○	—	×	もみ・センイ痕	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		
56			碗	6I	灰原サブトレンチ内	16.3	8.6	5.8	○	○	△センイ痕	もみ・センイ痕	10YR8/3	浅黄橙	良	良	○	B		
57			碗	6I	灰原サブトレンチ内	16.0	7.8	5.2	○	—	△	もみ少々・センイ痕	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	A		
58	○	○	碗	6I	灰原サブトレンチ内	16.5	8	5.3	○	○	△	もみ	10YR7/2	にぶい黄橙	良	良	○	B		ゆがみ激しい
59			碗	6I	灰原サブトレンチ内	17.0	8.2	5.4	○	○	×	もみ	10YR7/4	にぶい黄橙	良	良	○	B		ゆがみ激しい
60			碗	6I	灰原	16.6	8.2	5.4	○	○	△	もみ・センイ痕	10YR6/4	にぶい黄橙	良	良	○	B		体部にひび割れ
61	○	○	碗	6I	灰原	16.5	8.9	5.5	○	○	△	もみ・センイ痕	10YR7/3	にぶい黄橙	良	良	○	B		
62	○	○	碗	6I	灰原	15.2	9.6	5.0	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	B		
63	○	○	碗	6I	灰原	15.8	7.2	5.3	○	○	△	もみ・センイ痕	10YR8/3	浅黄橙	良	良	○	B		
64	○	○	碗	6I	灰原	16.7	9.5	5.2	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		
65			碗	6I	灰原B区	16.8	7.6	5.9	○	○	×	砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A		
66			碗	7I	灰原B区	15.9	7.3	4.9	○	○	×	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	A		
67			碗	7I	灰原B区	16.5	7.5	4.8	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
68			碗	7I	灰原B区	16.5	8.8	5.3	○	○	△	もみ	10YR8/1	灰白	良	良	○	B		
69	○	○	碗	6H	灰原D区	16.6	7.6	5.1	○	—	×	もみ	10YR7/3	にぶい黄橙	良	良	○	B		底部にひび割れ
70			碗	6H	灰原D区	16.0	7.8	5.0	○	○	△センイ痕	もみ	10YR7/4	にぶい黄橙	良	良	○	B		体部にひび割れ
71			碗	6H	灰原D区	16.9	8.1	4.9	○	○	△	もみ	10YR6/4	にぶい黄橙	良	良	○	B		
72			碗	6H	灰原D区	15.9	7	5.3	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
73			碗	6I	灰原D区	16.5	(8.4)	(5.6)	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		底部にひび割れ
74			碗	6I	灰原D区	16.0	8.2	5.1	○	○	△	もみ	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	B		
75			碗	6I	灰原D区	16.5	7.8	5.0	○	○	×センイ痕	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
76			碗	6I	灰原D区	16.4	8.3	5.5	○	○	△	砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	A		ゆがみ激しい
77	○	○	碗	6H	灰原E区	16.6	8.7	5.4	○	○	×	もみ・センイ痕	10YR7/3	にぶい黄橙	良	良	○	B		底部にひび割れ
78			碗	6I	灰原D区	16.9	7.3	5.0	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
79			碗	6I	灰原D区	16.5	7	5.2	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	不良	良	×	B		
80			碗	5H	灰原H区	15.9	7.9	5.8	○	○	×	もみ・砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	A		
81			碗	5H	灰原I区	16.0	8.3	5.3	○	○	△	もみ	10YR6/3	にぶい黄橙	良	良	○	B		
82	○	○	碗	5H	灰原H区	15.5	7.7	5.1	○	—	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	B		
83			碗	5H	灰原H区	15.9	7.1	4.3	○	○	△	もみ・センイ痕	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
84			碗	5H	灰原I区	16.8	7.5	5.0	○	○	△	もみ	2.5Y6/3	にぶい黄	良	良	○	B		

第1表　遺物観察表1

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
						口径	底径/高台径	器高												
85			碗	5H	灰原J区	17.2	(8.0)	(5.5)	○	○	×	なし	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
86	○	○	碗	5H	灰原J区	15.8	7.1	5.8	○	—	×	もみ	10YR8/1	灰白	良	良	○	A		
87			碗	4G	灰原	16.5	7.5	4.8	△	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		高台欠損
88			碗	4G	灰原	15.6	7.2	4.4	△	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		体部にひび割れ 高台欠損
89			碗	5H	灰原I区	16.0	8.0	4.4	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
90			碗	5H	灰原I区	15.6	8.2	5.6	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		ゆがみ激しい
91			碗	4H	灰原O区	15.8	7.4	4.5	○	○	△	もみ	2.5Y6/1	灰黄	良	良	○	B		底部にひび割れ
92	○	○	碗	5H	灰原I区	15.2	7.0	5.0	○	—	○	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
93	○	○	碗	3H	灰原O区	15.5	8.4	4.7	○	—	△	もみ	10YR5/2	灰黄褐	良	良	○	B		底部にひび割れ
94			碗	6H	灰原D区	16.9	7.5	4.8	○	○	△	もみ	10YR7/4	にぶい黄橙	良	良	○	B		
95			碗	6H	灰原D区	15.2	7.2	5.0	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		天場もの
96	○	○	碗	6H	灰原D区	15.4	8.0	5.0	○	○	△	もみ・砂	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		天場もの
97			碗	6H	灰原D区	17.2	7.1	4.8	○	○	△	もみ・砂	10YR7/4	にぶい黄橙	良	良	○	B		ゆがみ激しい
98			碗	4I	灰原P区	15.9	7.7	4.8	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		
99			碗	7I	灰原A区	16.4	7.9	5.6	○	○	×	なし	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	A		
100			碗	7I	灰原A区	15.6	7.7	4.7	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
101	○	○	碗	7I	灰原A区	16.2	7.0	5.3	○	—	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	A		
102			碗	7I	灰原A区	16.0	6.6	5.2	○	○	△	砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	A		
103	○	○	碗	4I	灰原P区	16.3	8.7	5.4	○	○	△	もみ	10YR8/2	灰白	良	良	○	A		
104			碗	5H	灰原E区	15.5	7.5	5.2	○	—	不明	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		外面底部焼台片付着
105	○	○	碗	5H	灰原I区	15.9	8.1	5.6	○	—	△	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A		
106	○	○	碗	5H	灰原P区	17.1	8.4	5.8	○	○	△	もみ	10YR8/1	灰白	良	良	○	A		
107			碗	4I	灰原I区	15.9	7.5	5.6	○	○	×	もみ・砂	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	A		外面底部焼台痕あり
108			碗	4H	灰原N区	16.7	8.6	4.8	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A		
109			碗	4H	灰原N区	16.1	8.2	5.3	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		補修痕あり
110	○	○	碗	7F	4号窯D区 覆土	15.5	8.2	5.0	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		
111	○	○	碗	7F	4号窯C区 覆土	15.2	8.0	5.3	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		
112	○	○	碗	7F	4号窯C区 覆土	16.0	8.2	5.1	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	B		
113	○	○	碗	7G	3号窯E区 覆土	16.1	8.2	4.7	○	○	△	もみ少々	10YR8/1	灰白	良	良	○	A		
114	○	○	碗	6G	4号窯F区	16.2	8.5	4.7	○	—	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B		
115	○	○	碗	6G	4号窯F区	15.6	7.8	4.9	○	—	△	もみ	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	B		体部にひび割れ
116	○	○	碗	6G	5号窯F区	16.2	7.9	4.8		—	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A		
117	○	○	碗	6G	5号窯F区	16.8	7.3	5.4	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	×	A		
118	○	○	碗	6G	5号窯F区	15.8	7.5	4.7	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		
119	○	○	碗		4号窯F区	16.2	7.2	5.3	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	×	A		体部にひび割れ
120	○	○	碗	7F	4号窯C区	14.8	7.8	4.9	○	—	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	A		
121	○	○	碗	7F	4号窯C区	14.7	7.2	4.8	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
122			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.2	7.3	5.2	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下4	
123			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.0	7.9	4.8	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下5	
124			碗	7G	3号窯 床面下施設	15.9	8.4	5.0	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下16	
125			碗	7G	3号窯 床面下施設	17.0	8.7	5.5	○	—	△	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下21	
126			碗	7G	3号窯 床面下施設	17.0	7.2	5.0	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下22	
127			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.5	8.4	5.4	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下24	
128			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.4	7.2	5.2	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下25	体部にひび割れ
129			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.5	8.3	5.2	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下31	底部にひび割れ
130			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.5	8.0	5.0	○	—	△	もみ・砂	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下32	底部にひび割れ 体部にヘラ痕
131			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.4	7.5	5.3	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下38	
132			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.1	(8.2)	(5.3)	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下39	
133			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.7	7.7	5.1	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下41	
134			碗	7G	3号窯 床面下施設	17.5	9.0	5.2	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下46	
135			碗	7G	3号窯 床面下施設	15.9	(7.8)	(5.4)	○	○	△	もみ・砂	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下47	
136			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.9	8.1	4.9	○	—	×センイ痕	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下50	
137			碗	7G	3号窯 床面下施設	15.8	7.7	4.7	○	○	△センイ痕	もみ・砂	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下59	ゆがみ激しい
138			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.0	8.0	4.8	○	不明	△	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下61	天場もの
139			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.3	7.5	5.2	○	—	×	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下62	
140			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.3	7.9	4.9	○	不明	△	もみ少々・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下63	体部にひび割れ
141			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.7	8.8	5.6	○	—	△	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	B	床下65	
142			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.7	8.1	4.8	○	—	△	もみ・砂	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下68	底部にひび割れ
143			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.5	7.3	5.3	○	—	△	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下70	
144			碗	7G	3号窯 床面下施設	17.2	8.0	5.2	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下71	
145			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.4	8.5	5.5	○	—	△	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下77	体部に指紋付着
146			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.8	7.5	5.2	○	—	△	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下81	
147	○	○	碗	7G	3号窯 床面下施設	17.0	8.7	5.6	○	—	×	もみ少々	2.5Y8/2	灰白	不良	良	×	A	床下82	
148			碗	7G	3号窯 床面下施設	17.0	7.5	5.2	○	—	△	もみ・砂	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下83	
149			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.5	8.5	5.3	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	A	床下84	
150			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.6	8.7	5.0	○	—	△	もみ・砂	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	A	床下85	
151			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.8	8.4	5.5	○	—	△	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下88	
152			碗	7G	3号窯 床面下施設	17.3	8.8	5.2	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下92	
153			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.4	(7.8)	(5.1)	○	—	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	床下94	体部にひび割れ
154			碗	7G	3号窯 床面下施設	17.1	8.7	5.0	○	—	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	B	床下96	
155			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.9	8.3	5.5	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下97	体部にひび割れ
156			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.6	8.5	5.2	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下98	
157	○	○	碗	7G	3号窯 床面下施設	15.8	7.2	5.3	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	A	床下111	
158			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.1	8.7	4.8	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下112	
159			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.8	7.5	4.9	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下115	
160			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.4	7.7	5.0	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下116	
161			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.7	8.1	5.4	○	—	△	もみ・砂	10YR5/2	灰黄褐	良	良	○	B	床下117	
162			碗	7G	3号窯 床面下施設	(16.8)	7.5	(5.1)	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	不良	良	×	B	床下121	
163			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.3	8.0	5.4	○	—	△	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下122	
164			碗	7G	3号窯 床面下施設	17.1	7.3	5.6	○	○	△	もみ	7.5Y6/4	にぶい橙	良	良	○	B	床下124	
165	○	○	碗	7G	3号窯 床面下施設	16.5	8.5	5.0	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下125	
166			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.6	8.9	5.1	○	—	○	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	床下126	
167			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.9	7.9	5.2	○	—	△	もみ・センイ痕	10YR5/2	灰黄褐	良	良	○	B	床下127	
168			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.6	8.7	5.0	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	床下129	

第2表　遺物観察表2

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
						口径	底径/高台径	器高												
169			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.7	7.8	4.5	○	—	△	もみ	10YR7/2	にぶい黄橙	やや不良	良	×	B	床下131	
170			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.8	8.3	5.0	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下132	天場もの
171			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.0	8.2	5.2	○	—	△	もみ	10YR6/3	にぶい黄橙	良	良	○	B	床下137	
172	○	○	碗	7G	3号窯 床面下施設	16.9	8.1	5.9	○	—	×	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	やや不良	良	×	A	床下138	
173			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.1	8.8	5.4	○	—	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	B	床下139	
174			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.4	8.3	5.1	○	—	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	B	床下142	
175	○	○	碗	7G	3号窯 床面下施設	16.3	7.6	5.4	○	—	×	もみ	10YR8/3	浅黄橙	良	良	○	A	床下144	
176			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.7	7.6	5.3	○	—	△	もみ・砂	10YR5/1	褐灰	良	良	○	B	床下147	
177			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.8	7.7	5.2	○	—	×	もみ	2.5Y6/2	灰黄	良	良	○	A	床下148	
178			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.6	(8.6)	(5.2)	○	—	△	もみ	10YR6/2	灰黄褐	良	良	○	B	床下150	
179			碗	7G	3号窯 床面下施設	16.5	9.4	5.2	○	—	△	もみ	10YR5/2	灰黄褐	良	良	○	B	床下151	底部にひび割れ
180			碗	6F	4号窯 床面下施設	15.0	7.1	4.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	床下3	
181			碗	7G	4号窯 床面下施設	15.2	7.9	4.9	○	—	△	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	B	床下15	底部～体部にひび割れ
182			碗	7G	4号窯 床面下施設	16.2	8.1	4.5	○	○	△	もみ少々・砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下16	
183	○	○	碗	7G	4号窯 床面下施設	16.3	8.6	5.4	○	—	○	もみ	10YR7/3	にぶい黄橙	不良	良	×	B	床下21	
184			碗	7G	4号窯 床面下施設	15.4	8.2	5.2	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下22	
185			碗	7F	4号窯 床面下施設	16.1	7.9	5.1	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下23	
186			碗	7G	4号窯 床面下施設	15.2	7.6	4.8	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	(B)	床下36	無台碗の可能性あり
187			碗	6F	4号窯 床面下施設	15.9	6.2	5.5	○	○	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下38	内面体部に刺突痕
188			碗	6F	4号窯 床面下施設	15.3	8.0	4.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下40	
189			碗	6F	4号窯 床面下施設	15.6	7.8	4.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下46	底部にひび割れ
190			碗	6F	4号窯 床面下施設	14.4	7.7	4.7	○	○	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下68	底部にひび割れ
191			碗	6F	4号窯 床面下施設	15.5	7.3	5.3	○	○	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下70	
192			碗	6F	4号窯 床面下施設	15.2	7.5	4.7	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下75	
193			碗	6F	4号窯 床面下施設	15.0	8.3	4.2	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下80	
194			碗	7G	4号窯 床面下施設	15.2	7.8	4.7	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下84	
195			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.9	7.5	4.9	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下85	
196	○	○	碗	7F	4号窯 床面下施設	16.2	8.8	4.8	○	—	不明	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	床下91	体部にひび割れ
197			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.9	7.3	4.7	△	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	床下92	高台欠損
198			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.8	7.8	4.8	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下93	底部にひび割れ
199			碗	7F	4号窯 床面下施設	16.5	7.6	5.0	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下95	底部～体部にひび割れ
200			碗	6F	4号窯 床面下施設	15.5	8.0	4.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下98	
201			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.6	7.3	4.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下101	
202			碗	7F	4号窯 床面下施設	14.3	7.6	4.9	○	—	不明	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下105	碗重ね
203			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.2	7.3	4.9	○	—	不明	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	床下108	
204			碗	7F	4号窯 床面下施設	14.5	8.0	4.7	△	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下109	高台欠損
205			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.9	7.3	5.1	○	—	不明	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	床下110	体部にひび割れ
206			碗	7F	4号窯 床面下施設	16.1	8.1	4.7	○	○	△	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	B	床下111	底部にひび割れ
207			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.2	7.8	4.8	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下118	
208			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.6	8.3	5.3	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下122	底部にひび割れ
209			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.0	8.3	5.3	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	床下124	体部にひび割れ
210			碗	7F	4号窯 床面下施設	16.4	7.1	4.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B	床下128	
211			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.3	8.2	5.0	△	—	○	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B	床下129	高台欠損
212			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.6	7.9	4.7	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	×	B	床下130	底部～体部にひび割れ
213			碗	7F	4号窯 床面下施設	15.7	9.2	4.4	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	×	B	床下134	体部にひび割れ
214	○	○	碗	7F	4号窯 床面下施設	15.4	8.8	5.0	○	—	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	B	床下135	
215	○	○	碗	7F	4号窯 床面下施設	15.2	8.1	5.5	○	—	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	不良	良	×	B	床下142	
216			碗	7F	4号窯 床面下施設	14.8	(6.4)	(5.1)	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	×	B	床下148	
217	○	○	碗	6F	5号窯 床面下施設	16.1	8.5	5.3	○	○	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	B	床下85	
218	○	○	碗	6F	5号窯 床面下施設	15.2	7.8	4.9	○	—	△	もみ	7.5YR8/1	灰白	良	良	○	B	床下150	
219	○	○	碗	6F	5号窯 床面下施設	15.0	7.7	4.2	○	—	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	B	床下174	
220			碗	6F	5号窯 床面下施設	16.0	8.1	4.9	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下197	
221			碗	6F	5号窯 床面下施設	(15.4)	(7.2)	(5.5)	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		
222			碗	6F	5号窯 床面下施設	16.6	7.5	4.6	○	—	△センイ痕	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下244	楕円
223			碗	6F	5号窯 床面下施設	16.0	7.1	4.0	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下244	ゆがみ激しい
224			碗	6F	5号窯 床面下施設	16.8	7.6	5.1	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B	床下282	ゆがみ激しい 体部にφ4mmの穴あり
225			碗	7H	灰原A区	16.1	7.3	4.8	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	B		
226			碗	6G	灰原	15.5	7.2	4.8	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		

法量の( )は推定値、〈 〉は平均値を示す
内面底部調整痕:○指ナデあり ー回転ナデ
外面底部調整痕:○糸切り痕明瞭に残るもの △糸切り痕あるが不明瞭に残るもの ×完全にナデ消され糸切り痕が確定できないもの
高台の有無:○高台あり ×高台なし △高台が有ったがハクリした
器形分類( )は高台が無いが推定したもの

第3表 遺物観察表3

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
						口径	底径/高台径	器高												
227			皿	7G	カクラン	8.6	4.1	2.0	×	—	○	—	10YR7/4	にぶい黄橙	良	良	○	1		
228			皿	7H	カクラン	8.2	4.7	2.4	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
229			皿	7H	カクラン	8.2	4.8	2.4	×	不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
230			皿	7H	カクラン	8.2	4.7	2.3	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
231			皿	7H	カクラン	8.3	4.5	2.3	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
232			小碗	7H	カクラン	9.0	4.2	2.9	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
233			小碗	7H	カクラン	9.8	5.1	2.9	○	不明	△	もみ・センイ痕	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
234			皿	7H	カクラン	8.2	4.0	2.3	×	○	△	—	10YR7/4	にぶい黄橙	良	良	○	1		
235			皿	7H	カクラン	7.7	5.0	2.5	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
236			小碗	7H	カクラン	8.3	(4.0)	(2.9)	○	○	△	不明	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		高台端部ハクリ
237			皿	7H	カクラン	8.1	4.4	2.3	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
238	○	○	皿	7H	カクラン	8.1	3.9	2.4	×	—	○	—	10YR8/2	灰白	良	良	○	1		
239			皿	7H	カクラン	8.2	4.2	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	1		
240			小碗	7H	カクラン	8.4	3.8	2.7	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
241			小碗	7H	カクラン	8.5	4.5	2.5	○	○	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
242			皿	7H	カクラン	8.3	4.2	2.3	×	不明	○	—	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	1		天場もの
243			皿	7H	カクラン	8.2	4.2	2.5	×	○	△	—	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	1		
244			皿	7H	カクラン	8.3	4.0	2.4	×	○	△	—	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	1		
245			皿	7H	カクラン	8.2	4.2	2.3	×	○	△	—	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	1		
246			小碗	7G	カクラン	8.3	4.2	2.6	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
247			皿	6G	カクラン	7.9	4.3	2.2	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
248			皿	6G	カクラン	8.0	4.7	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
249			小碗	6G	カクラン	8.4	4.2	2.8	○	○	×	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
250			皿	6G	カクラン	8.5	4.5	2.9	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	2		天場もの ゆがみ激しい
251			小碗	6G	カクラン	8.4	4.7	2.4	○	不明	×	付着物なし	N7/0	灰白	良	やや粗い	○	Ⅰ		天場もの
252			小碗	6G	カクラン	9.1	4.2	2.7	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
253			小碗	6G	カクラン	8.9	3.9	2.6	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
254			小碗	6G	カクラン	8.4	4.3	2.5	○	—	×	もみ	5Y5/1	灰	良	良	○	Ⅰ		
255			小碗	6G	カクラン	8.4	4.5	5.6	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
256			小碗	6G	カクラン	8.4	4.4	4.7	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
257			小碗	6G	カクラン	7.9	3.8	2.3	○	○	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
258			皿	6G	カクラン	8.5	4.4	2.5	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
259			皿	6G	カクラン	8.2	4.0	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
260			小碗	6G	カクラン	8.0	(4.8)	(2.6)	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
261			小碗	6G	カクラン	8.0	4.0	2.4	○	○	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
262			小碗	6G	カクラン	8.0	4.0	2.6	○	○	×	もみ	10YR7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
263			小碗	6G	カクラン	8.1	3.8	2.5	○	○	×	もみ	7.5YR7/1	明褐灰	良	良	○	Ⅰ		
264	○	○	皿	6H	カクラン	7.6	3.5	2.3	×	不明	△	—	5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
265			小碗	6H	カクラン	8.2	4.0	2.6	○	○	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
266			小碗	6H	カクラン	9.0	(4.2)	(2.9)	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
267			皿	6H	カクラン	8.7	4.3	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
268			小碗	6H	カクラン	8.6	4.4	2.5	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
269			小碗	6H	カクラン	8.2	(4.4)	(2.7)	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
270			小碗	6H	カクラン	8.8	4.5	2.7	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
271			皿	6H	カクラン	7.9	4.2	2.2	×	○	○	—	10YR7/4	にぶい黄橙	良	良	○	1		
272			小碗	6H	カクラン	9.2	4.9	2.9	○	—	×	もみ	10YR6/3	にぶい黄橙	良	良	○	Ⅱ		
273			小碗	6H	カクラン	8.1	4.0	2.5	○	不明	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
274			小碗	6H	カクラン	8.6	4.6	2.3	△	—	×	不明	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		高台全てハクリ
275			小碗	6H	カクラン	8.3	3.9	2.5	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
276			皿	6H	カクラン	7.9	3.7	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	3		
277			皿	6H	カクラン	8.2	4.5	2.3	×	○	△センイ痕	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
278			皿	6H	カクラン	9.9	4.6	2.9	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
279			小碗	6H	カクラン	(8.3)	4.4	(2.2)	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		底面外部中心に穴あり(貫通せず)
280			皿	6H	カクラン	7.8	3.8	2.6	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
281			小碗	7G	カクラン	8.5	4.1	2.6	○	○	×	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	Ⅰ		
282			皿	7G	カクラン	8.0	4.0	2.4	×	○	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
283			皿	7G	カクラン	8.0	4.1	2.4	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
284			皿	7G	カクラン	7.8	3.8	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	2		
285			皿	7G	カクラン	7.7	4.1	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
286			小碗	7G	カクラン	8.0	4.3	2.4	○	○	×	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		外面体部に沈線状の調整痕あり
287			皿	7G	カクラン	8.2	4.0	2.6	×	○	△	—	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	1		
288			小碗	7G	カクラン	8.1	3.9	2.5	○	不明	×	もみ	10YR6/1	褐灰	良	良	○	Ⅰ		天場もの
289			小碗	7G	カクラン	8.6	4.3	2.6	○	○	×	もみ	10YR6/1	褐灰	良	良	○	Ⅰ		
290			皿	7G	カクラン	9.1	4.7	2.6	×	○	×センイ痕	—	10YR6/1	褐灰	良	良	○	1		
291			小碗	7G	カクラン	8.7	5.0	2.4	○	○	×	もみ少々	10YR6/1	褐灰	良	良	○	Ⅰ		
292			皿	7G	カクラン	8.6	4.7	2.2	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
293			皿	7G	カクラン	8.8	4.9	2.3	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
294			小碗	7G	カクラン	9.2	4.8	2.7	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
295			小碗	7G	カクラン	9.1	4.8	2.9	○	不明	×	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
296			小碗	7G	カクラン	8.7	5.2	2.4	△	○	△	不明	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		高台全てハクリ
297			皿	7G	カクラン	8.6	4.4	2.4	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
298			皿	7G	カクラン	7.9	4.6	2.3	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
299			皿	7G	カクラン	7.6	3.9	2.1	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
300			皿	7G	カクラン	8.2	4.2	2.4	×	○	○	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
301			皿	7G	カクラン	8.4	4.3	2.4	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
302			皿	7G	カクラン	9.1	4.7	2.8	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
303			皿	7G	カクラン	8.5	4.3	2.4	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
304			皿	7G	カクラン	8.1	5.0	2.6	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	3		
305			皿	7G	カクラン	8.3	4.3	2.8	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
306			皿	7G	カクラン	8.1	4.5	2.3	×	○	△センイ痕	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
307			小碗	7G	カクラン	8.1	(4.0)	(2.3)	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
308			小碗	7G	カクラン	8.1	4.0	2.2	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
309			皿	7G	カクラン	8.3	4.2	2.2	×	○	△センイ痕	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	2		
310			小碗	7G	カクラン	8.1	4.3	2.4	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの

第4表　遺物観察表4

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
						口径	底径/高台径	器高												
311			皿	7G	カクラン	7.8	3.8	2.2	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	1		
312			皿	7G	カクラン	8.0	4.7	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
313			皿	7G	カクラン	8.3	4.3	2.4	×	○	○	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
314			小碗	7G	カクラン	8.1	5.0	2.4	○	釉のため不明	×	なし	2.5Y7/1	灰白	良	良・吹き出し	○	Ⅰ		
315			小碗	7G	カクラン	9.2	4.7	2.8	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		
316			皿	7G	カクラン	8.0	3.7	2.4	×	○	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
317			皿	7G	カクラン	8.0	4.2	2.0	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	2		
318			皿	7G	カクラン	7.7	4.2	1.7	×	釉のため不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
319			小碗	7G	カクラン	9.0	5.1	2.9	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
320			小碗	7G	カクラン	8.4	4.9	2.7	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
321			小碗	8G	カクラン	(8.6)	4.3	(2.6)	○	釉のため不明	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
322			小碗	7G	カクラン	8.6	4.4	2.5	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
323			皿	7G	カクラン	8.2	4.8	2.3	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
324	○	○	小碗	7G	カクラン	8.4	4.4	3.0	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
325			小碗	7G	カクラン	8.2	4.0	2.6	○	○	×	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	Ⅰ		
326			小碗	7G	カクラン	8.4	5.0	2.6	×	○	×	不明	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		高台欠損
327			小碗	7G	カクラン	8.2	4.4	2.7	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
328			小碗	7G	カクラン	8.4	4.5	2.6	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
329			小碗	7G	カクラン	9.1	4.2	2.5	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		φ0.8cm位の小石を含む
330			皿	7H	カクラン	8.4	4.2	2.3	×	○	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
331			皿	7H	カクラン	8.6	4.6	2.1	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
332			皿	7H	カクラン	8.2	4.9	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
333			皿	7H	カクラン	8.0	4.0	1.6	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
334			皿	7H	カクラン	8.4	4.2	2.3	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
335			小碗	7H	カクラン	7.9	4.1	2.5	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
336			小碗	7H	カクラン	8.5	4.8	2.5	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
337			小碗	7H	カクラン	8.2	4.4	2.5	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
338			小碗	7H	カクラン	8.3	3.9	2.3	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
339			皿	7H	カクラン	7.5	3.9	2.3	×	○	△	—	10YR7/1	灰白	良	良	○	1		
340			皿	7H	カクラン	8.0	4.6	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		指頭圧痕あり
341			小碗	7H	カクラン	7.6	3.9	2.7	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
342			皿	7H	カクラン	8.6	5.0	2.4	×	○	△	—	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	1		
343			小碗	7H	カクラン	8.4	4.2	2.6	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
344			小碗	7H	カクラン	8.8	4.4	3.0	○	○	×	もみ・砂	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		体部にひび割れ
345			小碗	7H	カクラン	8.6	4.7	3.6	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
346			皿	7H	カクラン	8.3	4.1	2.3	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
347			皿	7H	カクラン	8.8	4.8	1.9	×	釉のため不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
348			皿	7H	カクラン	8.2	4.2	2.3	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	2		
349			皿	7H	カクラン	8.4	5.7	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
350			皿	7H	カクラン	8.2	3.6	2.4	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
351			小碗	7H	カクラン	8.7	4.1	2.7	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		底部・体部にひび割れ
352			皿	7H	カクラン	8.2	4.5	(2.2)	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
353			皿	6G	カクラン	8.0	4.3	1.8	×	釉のため不明	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		天場もの
354			小碗	6G	カクラン	8.4	4.6	2.9	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
355			小碗	6G	カクラン	8.3	4.0	3.0	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
356			皿	6G	カクラン	7.6	4.0	2.6	×	○	△センイ痕	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
357			皿	6G	カクラン	8.0	3.9	2.4	×	釉のため不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
358			皿	6G	カクラン	8.0	4.3	2.4	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	3		
359			皿	6G	カクラン	8.5	5.0	2.5	×	○	○	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
360			皿	6G	カクラン	8.3	4.5	2.1	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
361			皿	6G	カクラン	8.1	4.5	2.3	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	1		
362			皿	6G	カクラン	8.1	3.9	2.1	×	○	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
363	○	○	小碗	6G	カクラン	11.0	5.6	3.4	○	—	×	砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
364			皿	6G	カクラン	7.4	4.1	2.0	×	釉のため不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
365			皿	6G	カクラン	8.0	4.7	2.0	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
366			小碗	6G	カクラン	9.8	(5.1)	(3.0)	○	—	△	不明	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	Ⅱ		高台端部ハクリ
367			皿	6G	カクラン	8.7	4.2	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	3		
368			皿	6G	カクラン	8.0	4.2	2.3	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
369			皿	6G	カクラン	7.2	4.5	2.1	×	釉のため不明	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		天場もの
370			皿	6G	カクラン	8.6	4.8	2.3	×	釉のため不明	△センイ痕	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
371			皿	6G	カクラン	7.8	3.6	2.1	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	3		
372			皿	6G	カクラン	7.8	4.0	2.2	×	釉のため不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	3		天場もの
373			皿	6G	カクラン	8.0	4.1	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
374			皿	6G	カクラン	8.0	4.5	2.3	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
375			皿	6G	カクラン	8.0	4.9	2.3	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
376			皿	6G	カクラン	7.9	4.2	1.7	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
377			皿	6G	カクラン	7.7	4.1	1.7	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
378			皿	6G	カクラン	8.3	4.2	2.4	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
379			皿	6G	カクラン	8.3	4.5	2.2	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
380			皿	6G	カクラン	8.2	4.6	2.2	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	2		
381			小碗	6G	カクラン	8.2	4.5	2.4	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
382			小碗	6G	カクラン	8.3	4.6	2.3	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
383			小碗	6G	カクラン	8.3	4.3	2.6	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
384			皿	6G	カクラン	8.1	4.6	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
385			小碗	6G	カクラン	8.5	4.1	2.6	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
386			皿	6G	カクラン	7.9	5.0	2.0	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
387			皿	7G	カクラン	7.3	4.4	1.9	×	釉のため不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
388			皿	7G	カクラン	7.9	4.9	2.3	×	—	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
389			皿	7G	カクラン	8.9	4.9	2.6	×	○	×	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
390			皿	7G	カクラン	8.6	4.3	2.2	×	○	△センイ痕	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		

第5表　遺物観察表5

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
						口径	底径/高台径	器高												
391			皿	7G	カクラン	7.5	3.6	2.0	×	○	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
392			皿	7G	カクラン	8.2	4.6	2.5	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
393			皿	7G	カクラン	8.3	4.4	2.3	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	3		
394			皿	7G	カクラン	8.4	4.5	2.3	×	—	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
395			皿	7G	カクラン	8.0	4.3	2.5	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
396			皿	7G	カクラン	8.3	3.9	2.0	×	—	○	—	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	2		
397			皿	7H	カクラン	8.1	4.5	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
398			皿	7H	カクラン	7.5	3.9	1.9	×	釉のため不明	×	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの 体部～底部にひび割れ
399			皿	7H	カクラン	8.5	4.2	1.6	×	—	×	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
400			皿	7H	カクラン	7.5	4.0	1.8	×	—	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
401			皿	6H	カクラン	7.7	4.3	2.0	×	—	×	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
402			皿	6H	カクラン	8.4	4.9	1.9	×	○	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
403			皿	6H	カクラン	8.1	4.8	2.4	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
404			小碗	6H	カクラン	8.2	4.2	2.9	○	○	×	センイ痕	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	I		
405			皿	6H	カクラン	8.3	5.0	2.3	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
406			小碗	6H	カクラン	8.0	5.2	2.9	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	I		
407	○	○	皿	6H	カクラン	7.9	4.9	2.5	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
408			皿	6H	カクラン	7.7	4.8	1.9	×	—	×	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
409			小碗	6H	カクラン	8.8	4.4	2.6	○	釉のため不明	×	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	I		天場もの
410			小碗	6H	カクラン	8.3	4.5	2.6	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	I		
411			皿	6H	カクラン	7.6	4.3	2.0	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	優良	○	1		
412			皿	6H	カクラン	8.3	4.6	2.3	×	—	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
413			皿	6H	カクラン	8.5	4.7	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
414			小碗	6H	カクラン	8.2	4.5	2.6	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良・吹き出し	○	I		
415			小碗	6H	カクラン	9.3	5.2	2.4	○	○	△	もみ	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	II		
416			皿	6H	カクラン	8.5	4.6	2.5	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
417			皿	6H	カクラン	8.0	4.1	1.9	×	○	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
418			小碗	6H	カクラン	8.8	4.1	2.7	○	○	△	もみ	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	I		底部にひび割れ
419			皿	6H	カクラン	8.2	4.7	2.1	×	○	×	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
420			皿	6H	カクラン	8.4	4.4	1.9	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		ゆがむ
421			皿	6H	カクラン	8.0	3.9	2.0	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	3		
422			皿	6H	カクラン	8.0	5.0	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
423			皿	6H	カクラン	7.9	5.0	2.1	×	釉のため不明	△センイ痕	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
424			皿	6H	カクラン	8.2	4.0	2.4	×	—	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
425			皿	6H	カクラン	8.3	4.5	4.0	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
426			皿	6H	カクラン	7.5	3.9	2.1	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
427			皿	6H	カクラン	7.7	3.8	2.0	×	—	○	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
428			皿	6H	カクラン	7.3	4.0	1.9	×	釉のため不明	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		天場もの
429			小碗	6H	カクラン	8.2	4.5	2.5	○	釉のため不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	I		天場もの
430			皿	6H	カクラン	7.9	3.5	2.4	×	不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
431			小碗	6H	カクラン	8.5	4.7	3.1	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	I		
432			小碗	6H	カクラン	9.4	4.3	2.6	○	○	△	もみ・砂	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	II		
433			小碗	6H	カクラン	8.1	3.9	2.5	○	×	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	I		
434			皿	6H	カクラン	8.2	4.3	2.3	×	○	○	—	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	1		
435			皿	6H	カクラン	7.8	4.3	2.0	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
436			皿	6H	カクラン	8.5	4.9	2.1	×	釉のため不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
437			皿	6H	カクラン	7.8	4.6	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
438			皿	6H	カクラン	7.8	3.9	1.9	×	釉のため不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
439			小碗	6H	カクラン	9.4	5.1	2.6	○	—	×	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	II		体部にひび割れ
440			皿	6H	カクラン	8.0	4.0	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		天場もの
441			小碗	6H	カクラン	8.8	4.5	2.8	○	○	×	もみ	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	I		
442			小碗	6H	カクラン	9.2	4.9	2.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	II		
443			小碗	6H	カクラン	9.6	4.5	3.0	○	—	×	もみ	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	II		
444			小碗	6H	カクラン	9.0	4.6	2.5	○	釉のため不明	×	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	II		天場もの
445			皿	6H	カクラン	8.7	4.5	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
446			皿	6H	カクラン	8.0	3.9	2.4	×	○	△	—	2.5Y6/2	灰黄	良	良	○	3		
447			皿	7G	カクラン	8.3	5.3	2.0	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
448			皿	7G	カクラン	8.3	4.6	2.4	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
449	○	○	皿	7G	カクラン	8.2	4.8	2.1	×	○	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		天場もの
450			皿	7G	カクラン	7.9	4.9	2.2	×	—	○	—	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	1		
451			皿	7G	カクラン	8.0	4.6	2.4	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		タール付着(その部分に穴あり)
452			皿	7G	カクラン	7.9	5.0	2.2	×	—	○	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
453			皿	7G	カクラン	8.4	4.6	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	2		
454			皿	7H	カクラン	8.1	4.6	2.0	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
455			皿	7H	カクラン	8.0	4.1	2.3	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
456			皿	7H	カクラン	7.7	4.0	2.0	×	釉のため不明	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		天場もの 体部にひび割れ
457			皿	7H	カクラン	7.8	4.5	1.9	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
458			皿	7H	カクラン	7.9	4.4	1.8	×	○	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
459			皿	7H	カクラン	8.0	5.0	2.1	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
460			皿	7H	カクラン	7.7	3.9	1.7	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
461			皿	7H	カクラン	8.2	4.8	1.8	×	釉のため不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
462			皿	7H	カクラン	7.6	3.8	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
463			皿	7H	カクラン	6.9	4.4	2.1	×	釉のため不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
464			皿	7H	カクラン	8.2	4.5	2.4	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
465			皿	7H	カクラン	8.3	4.4	2.5	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
466			皿	7H	カクラン	8.3	4.0	2.0	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
467			小碗	7H	カクラン	7.9	4.1	2.4	○	釉のため不明	×	もみ	2.5Y6/2	灰黄	良	良	○	I		
468			皿	7H	カクラン	8.3	4.1	2.1	×	○	○	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	3		
469			皿	7H	カクラン	8.1	4.6	2.1	×	釉のため不明	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	3		天場もの

第6表　遺物観察表6

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
						口径	底径/高台径	器高												
470			皿	7H	カクラン	8.2	4.1	2.0	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		底部～体部にひび割れ
471			小碗	7H	カクラン	8.0	4.5	2.3	○	釉のため不明	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
472			小碗	7H	カクラン	9.1	(4.2)	(2.7)	○	—	×	不明	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		高台端部ハクリ
473			小碗	7H	カクラン	9.2	4.8	2.6	○	○	△	もみ	2.5Y7/4	浅黄	良	良	○	Ⅱ		
474			皿	7H	カクラン	9.1	5.0	2.6	×	—	△	—	2.5Y6/2	灰黄	良	良	×	1		
475			小碗	7H	カクラン	8.9	4.5	2.4	○	—	×	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅰ		
476			小碗	6G	カクラン	9.5	5.0	3.0	○	○	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
477			小碗	6G	カクラン	9.4	4.7	2.5	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
478			小碗	6G	カクラン	8.8	4.5	2.5	○	—	×	もみ	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	Ⅰ		
479			皿	6G	カクラン	8.4	4.1	2.4	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	3		
480			皿	6G	カクラン	7.7	4.5	2.1	×	釉のため不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
481			皿	6G	カクラン	8.1	4.4	2.2	×	○	△板目あり	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
482			皿	6G	カクラン	8.4	4.8	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		体部にひび割れ
483			皿	6G	カクラン	7.5	3.9	1.9	×	釉のため不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
484			小碗	6G	カクラン	8.6	(4.4)	(2.5)	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
485			皿	6G	カクラン	8.5	4.6	2.3	×	釉と付着物のため不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
486			皿	6G	カクラン	8.3	3.9	2.0	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	3		
487			皿	6G	カクラン	7.9	4.9	1.8	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
488			皿	6G	カクラン	8.5	5.2	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
489			皿	6G	カクラン	8.5	4.8	1.9	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
490			皿	6H	カクラン	8.1	4.3	2.0	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
491			皿	6H	カクラン	8.1	3.9	2.1	×	釉と付着物のため不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
492			皿	6H	カクラン	7.6	4.6	1.8	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
493			小碗	6H	カクラン	9.3	3.9	2.7	○	釉と付着物のため不明	×	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
494	○	○	小碗	6H	カクラン	9.2	4.4	2.6	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
495			皿	6H	カクラン	8.3	4.9	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
496			皿	6H	カクラン	8.2	4.6	2.0	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
497			皿	6H	カクラン	7.8	4.2	2.0	×	○	×	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
498			皿	6H	カクラン	7.9	4.2	2.3	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	優良	×	3		
499			皿	6H	カクラン	7.9	4.2	2.2	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
500			皿	6H	カクラン	8.3	4.7	2.3	×	○	○	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
501			皿	6H	カクラン	8.0	4.8	2.1	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
502			皿	6H	カクラン	7.6	4.0	2.0	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	優良	○	3		
503			皿	6H	カクラン	8.4	4.8	2.1	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
504			皿	6H	カクラン	7.5	4.4	2.0	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
505			皿	6H	カクラン	7.5	4.4	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
506			小碗	6H	カクラン	9.4	(4.1)	(3.0)	○	○	×	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅱ		底部にひび割れ
507			小碗	6H	カクラン	9.2	4.3	2.8	○	○	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅱ		
508			皿	6H	カクラン	7.3	4.4	1.7	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
509			皿	6H	カクラン	8.8	4.7	1.9	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
510			皿	6H	カクラン	7.9	4.5	1.8	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	優良	○	1		
511			皿	6H	カクラン	7.7	5.1	1.8	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
512			小碗	6H	カクラン	9.3	(4.2)	(2.6)	○	○	×	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅱ		
513			皿	6H	カクラン	8.5	5.3	2.0	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
514			皿	6H	カクラン	7.7	4.5	2.1	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
515			小碗	6H	カクラン	9.4	5.2	2.7	○	—	×	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅱ		
516			小碗	7G	カクラン	8.8	4.5	2.5	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
517			小碗	7G	カクラン	9.0	4.7	2.7	○	○	×	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅱ		
518			小碗	7G	カクラン	8.8	4.0	2.5	○	○	△	もみ・砂	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅰ		
519			小碗	7G	カクラン	(9.0)	4.6	(2.9)	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		
520			小碗	7G	カクラン	9.3	(4.3)	(2.8)	○	—	×	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅱ		
521			小碗	7G	カクラン	9.1	5.0	2.6	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		
522			小碗	7G	カクラン	8.9	4.8	2.6	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
523	○	○	小碗	7G	カクラン	9.4	5.0	2.9	○	—	×	もみ	10YR8/2	灰白	良	良	○	Ⅱ		
524			小碗	7G	カクラン	7.4	4.2	2.4	○	○	×	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	Ⅰ		
525			小碗	7G	カクラン	9.2	4.5	2.7	○	不明	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		天場もの
526			小碗	7G	カクラン	8.6	4.6	2.8	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		内面底部に補修痕あり
527			小碗	7G	カクラン	8.0	3.8	2.2	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
528			小碗	7G	カクラン	9.0	4.9	(2.6)	○	—	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		
529			皿	7G	カクラン	8.3	4.2	2.0	×	○	○	—	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	1		
530			皿	7G	カクラン	8.4	4.1	2.2	×	—	○	—	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	1		
531			小碗	7G	カクラン	8.6	4.7	2.9	○	—	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅰ		
532			皿	7G	カクラン	8.3	4.0	2.3	×	不明	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		天場もの
533			皿	7H	カクラン	8.6	4.4	2.3	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
534			皿	7H	カクラン	8.2	4.5	2.0	×	—	△	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	2		
535			皿	7H	カクラン	7.5	4.8	2.2	×	不明	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		天場もの
536			皿	7H	カクラン	7.5	4.1	2.3	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	2		天場もの
537			皿	7H	カクラン	8.2	4.6	2.0	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
538			皿	7H	カクラン	7.9	4.7	2.1	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	2		天場もの
539			皿	7H	カクラン	8.3	5.1	2.0	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
540			皿	7H	カクラン	8.0	4.2	2.0	×	不明	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
541	○	○	小碗	7H	カクラン	8.7	5.0	2.7	○	—	△	もみ	10YR8/3	浅黄橙	良	良	○	Ⅰ		
542			皿	7H	カクラン	8.8	5.3	2.1	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
543			皿	7H	カクラン	8.6	4.6	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
544			皿	7H	カクラン	7.3	4.1	1.8	×	—	×	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
545			皿	7H	カクラン	7.7	4.8	2.1	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
546			皿	7H	カクラン	8.2	4.3	2.1	×	—	○	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
547			小碗	7H	カクラン	8.9	(4.4)	(2.8)	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
548			小碗	6G	カクラン	9.5	4.6	3.3	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
549			小碗	6G	カクラン	9.4	(4.9)	(3.1)	○	—	△	もみ・砂	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅱ		
550			皿	6G	カクラン	9.3	5.1	2.7	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	1		
551			小碗	6G	カクラン	9.1	4.8	2.7	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		

第７表　遺物観察表７

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
						口径	底径/高台径	器高												
552			小碗	6G	カクラン	9.4	4.9	2.9	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		底部に穴あり
553			小碗	6G	カクラン	8.8	(4.6)	(2.6)	○	○	×	不明	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		高台端部全てハクリ
554			小碗	6G	カクラン	9.0	4.1	2.7	○	—	×	もみ・砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
555			小碗	6G	カクラン	9.3	4.4	2.7	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
556			小碗	6G	カクラン	6.3	4.9	2.6	○	不明	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅰ		天場もの
557			小碗	6G	カクラン	9.4	4.5	2.8	○	○	×	もみ少々	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		
558			小碗	6G	カクラン	8.8	4.4	2.4	○	—	△	もみ	10YR7/4	にぶい黄橙	良	良	○	Ⅰ		
559			皿	6G	カクラン	8.5	4.9	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
560			小碗	6G	カクラン	8.8	4.1	2.7	○	—	×	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅰ		
561			小碗	6G	カクラン	9.2	4.9	2.5	○	○	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		
562			小碗	6G	カクラン	9.2	4.7	2.9	○	○	×	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅱ		
563			小碗	6G	カクラン	9.1	4.5	2.8	○	—	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅱ		
564			小碗	6G	カクラン	8.5	4.7	2.7	○	—	△	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
565			小碗	6G	カクラン	9.0	4.2	2.6	○	不明	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
566			皿	6G	カクラン	8.5	4.9	2.5	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
567			小碗	6G	カクラン	7.9	3.9	2.3	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
568			小碗	6G	カクラン	8.7	4.1	2.8	○	○	×	もみ	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	Ⅰ		
569			皿	6G	カクラン	8.8	5.5	2.1	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		楕円
570			皿	6G	カクラン	8.3	4.1	2.5	×	—	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
571			皿	6G	カクラン	8.4	4.8	2.3	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
572			皿	6G	カクラン	7.9	4.4	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	2		
573			皿	6G	カクラン	8.2	3.9	2.4	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
574			皿	6G	カクラン	8.2	4.0	2.1	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	2		
575	○	○	皿	6G	カクラン	8.5	4.0	2.6	×	—	×	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
576			皿	6G	カクラン	8.1	3.9	2.0	×	○	○	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
577			皿	6G	カクラン	8.2	4.4	1.9	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		体部にひび割れ
578			皿	6G	カクラン	8.3	4.1	2.2	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
579			皿	6G	カクラン	8.1	4.5	2.5	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
580			皿	6G	カクラン	8.3	4.1	2.2	×	—	×	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		天場もの
581			皿	6G	カクラン	7.5	3.8	2.2	×	○	○	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		静止糸切りか？
582			皿	6G	カクラン	8.3	4.4	2.4	×	—	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
583	○	○	皿	6G	カクラン	7.9	3.6	2.4	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	3		
584			皿	6G	カクラン	8.6	5.0	2.4	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
585			皿	6G	カクラン	8.5	4.7	2.4	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		口縁～体部に多くのひび割れ
586			皿	6G	カクラン	8.2	4.3	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	2		
587			皿	6G	カクラン	8.1	3.9	2.2	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
588			皿	6G	カクラン	7.7	4.4	2.0	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
589			小碗	6G	カクラン	8.2	3.9	2.6	○	—	△	もみ・砂	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
590			皿	6G	カクラン	8.0	3.9	2.1	×	○	○	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
591			皿	6G	カクラン	7.7	3.8	1.9	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
592	○	○	小碗	6G	カクラン	7.4	3.6	2.7	○	不明	×	もみ・砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
593			皿	6G	カクラン	8.2	3.8	2.5	×	不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	3		天場もの
594			皿	6G	カクラン	8.3	4.5	2.4	×	—	△	—	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	1		体部にひび割れ
595			皿	6G	カクラン	7.8	4.6	2.5	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		ゆがみ激しい
596			皿	6G	カクラン	8.1	3.7	2.1	×	—	○	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		口縁～体部にひび割れ
597			小碗	6G	カクラン	8.3	4.4	2.4	○	不明	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
598			皿	6G	カクラン	8.3	4.5	2.4	×	不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
599			皿	6G	カクラン	8.1	4.5	2.0	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	2		
600			皿	6G	カクラン	8.0	3.9	2.1	×	○	○	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
601			皿	6G	カクラン	8.1	4.2	2.0	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
602			皿	6G	カクラン	8.1	4.4	2.4	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
603			皿	6G	カクラン	8.0	4.1	2.3	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
604			皿	6G	カクラン	8.4	5.5	2.3	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
605			皿	6G	カクラン	8.0	4.6	2.0	×	○	○	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
606			皿	6G	カクラン	8.6	5.5	2.3	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	やや粗い	○	1		
607			皿	6G	カクラン	8.0	5.4	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
608	○	○	皿	6H	カクラン	7.8	3.9	2.0	×	—	△	—	10YR7/1	灰白	良	良	○	1		
609			小碗	6H	カクラン	8.3	(4.3)	(2.6)	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
610			小碗	6H	カクラン	9.4	5.1	3.0	○	—	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
611			皿	6H	カクラン	7.8	3.6	2.0	×	○	○	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
612			皿	6H	カクラン	7.9	4.4	1.9	×	—	△	—	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	1		
613			皿	7G	カクラン	8.4	4.3	2.0	×	○	○	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
614			皿	7G	カクラン	8.3	4.7	2.3	×	—	×	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
615	○	○	皿	7H	カクラン	8.0	4.6	2.2	×	—	△	—	2.5Y8/3	浅黄	良	良	○	1		
616			皿	7H	カクラン	7.6	4.6	2.1	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
617			皿	7H	カクラン	7.3	3.9	2.1	×	—	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
618			皿	7H	カクラン	8.1	4.5	2.2	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
619			皿	7H	カクラン	8.1	4.3	2.1	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
620			皿	7H	カクラン	8.4	4.6	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
621			皿	7H	カクラン	8.8	4.7	2.2	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
622			皿	7H	カクラン	8.3	4.2	2.4	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
623			皿	7H	カクラン	7.9	4.7	1.9	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
624			皿	7H	カクラン	8.2	4.8	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
625			皿	7H	カクラン	7.7	4.4	2.0	×	—	○	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
626			皿	7H	カクラン	8.3	4.8	2.1	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
627			皿	7H	カクラン	8.2	5.0	2.2	×	○	△センイ痕	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
628			皿	7H	カクラン	8.4	4.6	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
629	○	○	皿	7H	カクラン	8.3	5.0	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
630			小碗	7H	カクラン	8.4	4.4	2.6	○	—	—	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
631			小碗	7H	カクラン	8.7	4.9	2.6	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
632			小碗	7H	カクラン	8.8	4.9	2.6	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
633	○	○	小碗	7H	カクラン	8.6	4.8	2.6	○	○	△	もみ少々	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	Ⅰ		
634			小碗	7H	カクラン	8.5	4.2	2.7	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
635			小碗	7H	カクラン	8.7	4.8	2.7	○	不明	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの

第８表　遺物観察表８

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
						口径	底径/高台径	器高												
636			小碗	7H	カクラン	8.6	3.6	2.4	△	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		高台全てハクリ
637			皿	6G	カクラン	7.7	4.3	1.8	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	優良	○	1		
638			皿	6G	カクラン	8.1	4.2	2.1	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
639			皿	6G	カクラン	7.8	3.9	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
640			小碗	6G	カクラン	8.9	(4.1)	(2.7)	○	—	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
641			小碗	7H	カクラン	8.4	4.5	2.6	○	不明	×	不明	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの 高台端部ハクリ
642			皿	6G	カクラン	8.3	4.8	2.4	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
643			皿	6G	カクラン	8.0	4.2	2.0	×	○	○	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		口縁～体部にひび割れ
644			皿	6G	カクラン	7.7	4.0	1.9	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
645			皿	6G	カクラン	8.0	4.9	1.8	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
646			小碗	6G	カクラン	8.7	4.5	3.0	○	不明	△	もみ	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○	Ⅰ		天場もの
647			皿	6H	カクラン	8.1	4.5	2.3	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
648			皿	6H	カクラン	8.0	4.8	1.8	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
649			皿	6H	カクラン	7.8	4.2	1.9	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
650			皿	6H	カクラン	8.0	4.2	2.0	×	不明	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		天場もの
651			皿	6H	カクラン	7.7	3.8	2.0	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
652			皿	6H	カクラン	7.8	3.8	1.9	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		底部にひび割れ
653			皿	6H	カクラン	8.3	4.2	2.2	×	不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
654			皿	6H	カクラン	7.7	4.5	1.8	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
655			小碗	6H	カクラン	7.5	4.0	2.4	×	—	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		高台欠損
656			小碗	6H	カクラン	8.0	4.4	2.7	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
657	○	○	小碗	6H	カクラン	8.1	4.4	3.0	○	不明	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
658			小碗	6H	カクラン	7.9	5.0	2.8	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	Ⅰ		
659			皿	5G	灰原	8.3	4.5	2.3	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
660			皿	5G	灰原	7.6	3.9	2.1	×	不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
661			皿	4G	灰原	8.4	4.9	2.4	×	不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
662			皿	5G	灰原	8.2	4.1	2.1	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
663			皿	5G	灰原	7.6	4.5	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
664			皿	4G	灰原	8.7	4.9	2.4	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
665			皿	4G	灰原	7.9	4.5	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
666			皿	4G	灰原	8.2	3.9	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	1		天場もの
667			皿	5G	灰原	8.1	4.1	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	2		
668			皿	5G	灰原	8.5	4.2	2.4	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
669			小碗	5G	灰原	8.6	4.3	2.4	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
670			小碗	5G	灰原	8.4	4.2	2.8	○	—	×	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	×	Ⅰ		
671			皿	6I	灰原	8.1	4.2	1.9	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
672			皿	6I	灰原	9.4	5.4	2.3	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
673			小碗	6I	灰原	9.3	4.3	2.7	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		
674			小碗	6I	灰原	8.5	4.1	2.2	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
675			小碗	6I	灰原	8.7	4.3	2.5	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
676			小碗	6I	灰原	8.2	(4.1)	(2.9)	○	○	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
677			皿	6I	灰原	8.4	4.5	2.3	×	○	○	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
678			皿	6I	灰原	8.0	4.8	2.3	×	—	○	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
679			皿	6I	灰原	7.9	4.6	2.1	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
680			小碗	6I	灰原	8.8	4.1	2.6	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
681			皿	4J	表採	7.6	4.3	2.0	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
682			皿	4J	表採	7.9	4.5	2.2	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	2		
683	○	○	小碗	6I	灰原B区	8.2	4.0	2.7	○	不明	×	もみ	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
684	○	○	小碗	6I	灰原B区	9.1	5.3	3.1	○	—	×	もみ	5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
685			小碗	7I	灰原B区	9.2	4.7	2.4	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
686			皿	7I	灰原B区	7.9	4.4	2.2	×	○	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
687			小碗	6H	灰原D区	8.4	(4.1)	(2.7)	○	—	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
688	○	○	皿	6H	灰原D区	8.2	4.9	2.2	×	—	○	—	10YR7/1	灰白	良	良	○	1		
689			小碗	6H	灰原D区	8.1	3.7	2.4	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
690			皿	6H	灰原D区	8.5	4.4	2.3	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	3		
691	○	○	小碗	6I	灰原D区	8.6	4.0	2.9	○	○	×	もみ・砂	10YR7/3	にぶい黄橙	良好	良	○	Ⅰ		
692			小碗	6I	灰原D区	8.7	4.6	2.6	○	不明	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
693			皿	6I	灰原C区	8.6	4.2	2.0	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
694			皿	6I	灰原C区	8.8	4.7	1.9	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
695			皿	6I	灰原C区	8.4	4.6	2.0	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
696			皿	6H	灰原D区	7.8	4.3	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
697			皿	6H	灰原D区	8.0	4.0	2.1	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
698			皿	6I	灰原D区	8.6	4.7	2.6	×	不明	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
699	○	○	小碗	6I	灰原D区	8.4	4.6	2.7	○	不明	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		天場ものではないが底部中心付近に釉付着
700			小碗	6I	灰原D区	9.5	4.7	2.8	○	○	△	もみ	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	Ⅱ		
701			小碗	6I	灰原D区	8.8	4.0	2.9	○	—	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
702			小碗	6I	灰原D区	9.5	5.0	2.9	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		体部にひび割れ
703			皿	6H	灰原E区	8.9	4.5	2.6	×	不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
704			皿	6H	灰原E区	8.4	5.0	2.4	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	2		
705	○	○	小碗	6H	灰原E区	8.1	4.2	2.7	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
706			皿	6I	灰原D区	8.4	4.4	1.9	×	—	○	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
707			皿	6I	灰原D区	7.5	4.5	2.0	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
708	○	○	皿	6I	灰原D区	8.2	4.2	2.4	×	—	○	—	5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
709			小碗	6I	灰原D区	9.5	5.0	3.1	○	—	×	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
710			小碗	6I	灰原D区	9.1	4.7	2.4	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
711			小碗	6I	灰原D区	9.5	5.0	2.8	○	—	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
712			小碗	6I	灰原D区	9.9	4.5	3.5	○	—	△	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
713			小碗	6H	灰原F区	9.8	(5.1)	(3.4)	○	不明	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
714	○	○	小碗	6H	灰原F区	10.5	5.9	3.4	○	—	△	もみ少々・砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
715	○	○	小碗	7H	灰原A区	9.3	5.4	3.2	○	—	×	砂少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
716			皿	6I	灰原D区	8.0	4.1	2.3	×	不明	○	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
717			小碗	5H	灰原F区	9.1	5.1	2.6	○	不明	—	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
718			小碗	5H	灰原F区	9.2	5.5	3.2	○	—	△	もみ少々・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
719			皿	6H	灰原E区	8.5	4.5	2.1	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	2		

第9表　遺物観察表9

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
						口径	底径/高台径	器高												
720	○	○	小碗	5H	灰原G区	-	3.9	(1.8)	○	—	×	もみ少々	2.5YR7/1	灰白	良	やや粗い	○	不明		高台のみ 底部に穿孔あり
721	○	○	皿	5I	灰原G区	8.1	5.1	2.5	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
722			小碗	5H	灰原H区	9.1	5.6	2.5	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
723	○	○	小碗	5H	灰原H区	9.9	5.3	3.2	○	○	×	もみ・砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
724			小碗		排土	8.2	4.3	2.4	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
725			皿	5H	灰原I区	8.2	4.2	2.1	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
726			小碗	5H	灰原I区	9.4	4.3	2.8	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
727			小碗	5I	灰原E区	11.7	5.9	3.3	○	不明	×	もみ・砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		天場もの 口縁にひび割れ
728			皿	5H	灰原H区	8.7	4.6	2.9	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	×	3		
729			小碗	5H	灰原H区	8.0	3.7	2.9	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
730			小碗	5H	灰原H区	8.9	4.5	2.6	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
731			小碗	5H	灰原I区	8.7	3.9	2.5	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
732			皿	5H	灰原I区	8.6	4.3	2.3	×	不明	×	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
733			小碗	5I	灰原J区	8.9	4.6	2.6	○	—	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
734			小碗	5I	灰原J区	10.6	6.2	3.1	○	不明	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの 口縁にひび割れ
735			皿	5I	灰原I区	7.4	4.8	2.3	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
736			小碗	5I	灰原I区	8.0	4.9	2.5	○	—	△	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
737			小碗	5I	灰原I区	11.4	6.3	3.3	○	—	×	もみ・砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		体部一部にひび割れ
738			小碗	5I	灰原J区	9.3	5.0	2.7	○	—	△	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		
739			皿	4G	灰原	8.0	4.5	2.1	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
740			小碗	4G	灰原	8.7	4.6	2.6	△	—	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		高台ハクリ 天場もの
741			皿	5H	灰原I区	8.1	4.7	2.6	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
742			皿	5H	灰原I区	8.7	4.8	2.5	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
743			小碗	5H	灰原I区	8.3	4.5	2.6	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
744			小碗	5H	灰原I区	10.6	5.5	3.1	○	不明	△	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		口縁～体部にひび割れ 天場もの
745			皿	5H	灰原I区	8.4	5.6	2.1	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
746			皿	5H	灰原I区	8.0	4.5	2.3	×	—	△	—	2.5Y7/3	浅黄	良	良	○	1		
747			皿	5H	灰原I区	(8.2)	4.5	(2.0)	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
748			皿	5H	灰原I区	8.5	4.2	2.4	×	不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
749			皿	5H	灰原I区	8.4	4.7	2.6	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
750			皿	5H	灰原I区	9.0	4.3	2.4	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	1		
751			小碗	5H	灰原I区	8.8	4.4	2.3	○	○	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
752			小碗	5H	灰原I区	8.7	4.9	2.4	○	○	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
753			小碗	4G	灰原N区	8.4	3.9	2.7	○	不明	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
754			小碗	4G	灰原N区	8.4	4.4	2.7	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
755	○	○	小碗	4H	灰原N区	9.2	4.3	2.8	○	不明	×	もみ	10YR7/3	にぶい黄橙	良	良	○	Ⅱ		
756			小碗	4H	灰原N区	9.0	4.1	2.9	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
757	○	○	小碗	4H	灰原N区	10.8	5.7	3.5	○	—	×	砂	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	Ⅲ		
758			皿	4H	灰原N区	8.5	4.6	1.8	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
759			皿	4H	灰原O区	7.8	4.6	2.0	×	不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
760			皿	4H	灰原O区	8.0	4.7	2.0	×	○	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
761	○	○	皿	3H	灰原R区	8.3	4.0	2.3	×	○	△	—	10YR7/2	にぶい黄褐	良	良	○	1		
762			皿	3I	灰原R区	8.2	3.6	2.1	×	—	○	—	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	1		
763			皿	5I	灰原O区	8.3	4.2	2.0	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
764	○	○	皿	5I	灰原D区	8.4	4.0	2.3	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	3		天場もの
765			小碗	7I	灰原A区	8.9	4.3	3.0	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
766	○	○	小碗	7I	灰原A区	9.6	5.4	3.0	○	○	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		外面体部にヘラ状痕あり
767			小碗	6H	灰原B区	9.2	(4.1)	(2.4)	○	—	×	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		楕円
768			小碗	4I	灰原P区	9.9	5.2	3.2	○	○	△	もみ・砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
769			小碗	4I	灰原P区	9.6	5.4	3.3	○	—	△	不明	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○	Ⅱ		高台端部ハクリ
770			小碗	4I	灰原P区	10.0	5.2	3.3	○	—	△	もみ少々	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅲ		
771			小碗	4I	灰原P区	9.4	4.5	3.2	○	—	×	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
772			小碗	4I	灰原P区	9.6	5.0	3.3	○	○	×	不明	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		高台端部ハクリ
773			小碗	4I	灰原P区	9.8	5.4	3.4	○	不明	△	もみ少々	2.5Y8/2	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
774			小碗	4I	灰原P区	8.9	5.4	3.1	○	—	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
775			小碗	4I	灰原P区	10.3	(5.7)	2.9	△	不明	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		天場もの 高台全てハクリ 口縁～体部にひび割れ
776			小碗	4I	灰原P区	9.4	4.4	3.1	○	不明	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの
777			小碗	4I	灰原P区	10.8	5.8	3.3	○	—	×	もみ少々	2.5Y6/2	灰黄	良	良	○	Ⅲ		口縁内面に稜線あり
778	○	○	小碗	4I	灰原P区	9.6	5.8	3.5	○	—	×	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
779	○	○	小碗	4I	灰原P区	8.9	2.5	2.9	○	—	△	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
780			小碗	4I	灰原P区	10.0	(5.8)	(3.9)	○	—	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○	Ⅲ		
781			小碗	4I	灰原P区	9.4	5.3	3.2	○	—	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○	Ⅱ		
782			小碗	4I	灰原Q区	9.1	(5.3)	(3.0)	○	—	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
783			小碗	4I	灰原P区	10.2	5.5	3.0	○	○	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
784			小碗	4I	灰原P区	9.8	5.7	(3.3)	○	○	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
785			小碗	4I	灰原P区	10.1	5.8	3.2	○	—	△	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
786			小碗	6H	灰原C区	10.0	5.8	3.0	○	不明	△	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		天場もの 口縁～体部にひび割れ
787			皿	5I	灰原E区	8.5	4.4	2.1	×	—	○	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
788			皿	5I	灰原E区	8.3	4.1	2.3	×	—	○	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
789			小碗	5I	灰原P区	9.9	5.4	3.5	○	—	×	もみ少々・砂	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅱ		
790			小碗	5I	灰原P区	10.0	(5.9)	(3.4)	○	—	×	もみ少々・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
791	○	○	小碗	7H	灰原A区	11.6	5.5	(3.5)	○	—	×	不明	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		高台端部ハクリ
792			小碗	6H	灰原C区	8.6	4.2	2.4	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
793			小碗	5H	灰原P区	10.2	(5.4)	(2.8)	○	—	△	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
794			小碗	6H	灰原P区	9.3	4.0	2.8	○	—	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
795	○	○	小碗	6H	灰原P区	9.6	5.4	3.1	○	—	△	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
796			小碗	5I	灰原I区	9.6	5.6	3.3	○	—	×	不明	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		高台端部ハクリ
797			小碗	5I	灰原I区	9.7	5.6	3.3	○	—	×	不明	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○	Ⅱ		高台端部ハクリ
798			小碗	5I	灰原P区	10.1	4.9	3.3	○	—	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○	Ⅲ		
799			小碗	5I	灰原P区	9.7	4.8	3.2	○	—	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○	Ⅱ		
800			皿	4I	表採	8.2	5.2	1.8	×	—	△	—	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	1		
801			小碗	4I	表採	8.2	4.1	2.5	○	不明	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		天場もの
802			皿	4I	表採	7.6	4.1	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
803	○	○	小碗	5H	灰原I区	8.1	4.0	3.1	○	○	×	もみ	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		

第10表　遺物観察表１０

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm) 口径	底径/高台径	器高	高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
804			小碗	5H	灰原I区	9.2	4.9	2.6	○	—	△	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
805			小碗	5H	灰原I区	10.3	5.4	3.1	○	不明	×	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		天場もの 楕円
806	○	○	皿	7H	2号窯F区	7.7	4.1	2.5	×	不明	×	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
807			皿	5H	灰原I区	8.0	4.5	2.3	×	不明	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		天場もの
808			小碗	5H	灰原I区	8.9	4.0	2.7	○	—	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
809			小碗	5H	灰原I区	8.2	(3.6)	2.4	○	—	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
810	○	○	小碗	7G	3号窯F区 覆土	9.1	5.0	2.7	○	○	×	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
811			小碗	5H	灰原I区	8.9	4.6	2.6	○	—	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
812			小碗	4H	灰原N区	8.9	4.6	2.5	○	—	△	もみ少々	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	Ⅰ		
813	○	○	皿	5H	灰原N区	8.2	4.6	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
814	○	○	皿	7F	4号窯C区 覆土	8.3	4.0	2.2	×	○	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	3		
815	○	○	皿	7F	4号窯C区 覆土	8.6	4.4	2.2	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	2		天場もの
816	○	○	皿	6G	4号窯F区 覆土	7.6	3.7	2.1	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	3		
817	○	○	皿	7F	4号窯C区	8.5	3.8	2.3	×	—	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	3		
818	○	○	皿	6G	4号窯F区	7.8	4.0	2.5	×	不明	△	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	3		天場もの
819	○	○	皿	6G	5号窯F区	8.2	4.0	2.3	×	—	○	—	2.5Y8/4	浅黄	良	良	○	1		
820	○	○	皿	6G	5号窯F区	8.3	4.0	2.3	×	○	○	—	10YR7/3	にぶい黄橙	良	良	○	1		
821	○	○	皿	7F	4号窯D区 覆土	8.7	5.5	2.1	×	○	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	2		
822	○	○	小碗	7F	4号窯D区	8.4	4.2	2.8	○	—	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
823	○	○	皿	7F	4号窯D区	8.1	4.6	2.2	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	3		
824	○	○	皿	7G	3号窯 床面下施設	8.4	4.9	2.5	×	—	×	—	2.5Y8/1	灰白	良	良	×	1		
825			小碗	7F	灰原A区	10.1	5.8	3.1	○	○	×	もみ少々	5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
826			皿	5G	灰原H区	8.6	4.8	2.7	×	—	△	—	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	1		
827			小碗	6H	灰原D区	9.3	5.4	3.3	○	—	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
828			小碗	5I	灰原J区	10.1	5.9	2.9	○	○	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
829			小碗	5I	灰原I区	(11.0)	6.0	(3.5)	○	—	×	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
830			小碗	5H	灰原I区	10.3	5.8	3.2	○	—	△	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
831			小碗	6H	灰原B区	(11.1)	(5.6)	(3.1)	○	○	×	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
832			小碗	7I	灰原A区	(9.7)	6.0	2.7	○	—	△	砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
833			小碗	4I	灰原P区	9.8	5.6	3.2	○	—	△	砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		口縁部にひび割れ
834			小碗	4I	灰原P区	10.0	5.5	3.1	○	—	×	不明	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		高台端部ハクリ
835			小碗	4I	灰原P区	9.4	5.2	3.2	○	—	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○	Ⅱ		
836			小碗	4I	灰原P区	(9.7)	4.7	(3.6)	○	○	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○	Ⅱ		
837	○	○	小碗	4I	灰原P区	8.8	5.3	2.3	○	—	×	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		
838			小碗	4I	灰原P区	8.8	4.8	2.9	○	—	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○	Ⅰ		
839			小碗	4I	灰原P区	9.6	5.0	3.2	○	—	×	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○	Ⅱ		
840			小碗	4I	灰原P区	9.4	5.2	3.3	○	—	×	もみ少々・砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
841			小碗	5I	灰原I区	9.3	5.9	3.8	○	○	△	もみ少々	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		
842			小碗	5H	灰原L区	10.1	5.5	2.9	○	—	△	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅲ		
843	○	○	小碗	7F	4号窯C区	(8.8)	(4.2)	2.8	○	—	×	砂	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	Ⅰ		

法量の( )は推定値、〈 〉は平均値を示す
内面底部調整痕:○指ナデあり ー回転ナデ
外面底部調整痕:○糸切り痕明瞭に残るもの △糸切り痕あるが不明瞭に残るもの ×完全にナデ消され糸切り痕が確定できないもの
高台の有無:○高台あり ×高台なし △高台が有ったがハクリした

第11表 遺物観察表11

遺物番号	図版の有無	図の有無	器種	G名	出土位置 層位	法量(cm)			高台の有無	内面底部調整痕	外面底部調整痕	高台底面付着痕	マンセル値	色調	焼成	胎土	釉の有無	器形分類	取上番号	備考
						口径	底径/高台径	器高												
844	○	○	片口鉢	6H	カクラン	14.4	10.6	9.3	○	不明？	調整不明瞭	砂？	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	b		
845			片口鉢	6H	カクラン	(22.4)	10.4	(8.6)	○	—	ナデ	センイ痕・砂？	2.5Y7/1	灰白	良	良	×	b		
846	○	○	片口鉢	6G	カクラン	29.8	15.5	11.5	○	○	ナデ	焼台片付着	5Y8/1	灰白	良	良	○	a◎		外面底部中心付近に未調整部分残存
847			片口鉢	6H	カクラン	(23.5)	10.0	(9.2)	○	○	糸切り不明瞭	センイ痕	2.5Y7/2	灰黄	良	良	×	b◎		
848			片口鉢	7H	カクラン	22.5	11.2	8.6	○	○	未調整自然釉	砂？少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	b◎		
849	○	○	片口鉢	7H	カクラン	24.0	13.0	9.9	○	—	ナデ	なし	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	b◎		外面底部中心付近に未調整部分残存
850			片口鉢	5H	灰原I区	25.0	12.1	8.2	○	○	ナデ	なし	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	b◎		
851			片口山茶碗	5H	灰原I区	20.4	9.0	6.1	○	—	ナデ	もみ・センイ痕	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	–		
852			片口鉢	6H	カクラン	(24.0)	11.0	(9.5)	○	—	ナデ	センイ痕	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	やや粗	×	b		
853			片口鉢	5H	灰原I区	(19.6)	12.0	(8.6)	○	○	未調整自然釉	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	b◎		底部～体部にひび割れ
854			片口鉢	5H	灰原H区	(23.5)	11.9	(9.3)	○	○	未調整自然釉	センイ痕	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	b◎		
855			片口鉢	5H	灰原I区	(25.0)	12.6	(9.2)	○	—	未調整自然釉	センイ痕	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	b◎		
856			片口鉢	6G	カクラン	–	9.0	残存8.4	○	—	未調整自然釉	センイ痕	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○	b		底部にひび割れ 口縁欠損
857			壺	6G	カクラン	–	(12.6)	残存10.5	○	—	ナデ	センイ痕	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	–		
858			片口鉢	6G	カクラン	測定不能	(9.1)	(9.5)	○	—	不明	もみ	2.5Y7/2	灰黄	やや不良	良	×	–		
859			片口鉢	6I	灰原	–	8.7	残存8.1	○	—	未調整自然釉	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	×	–		
860			片口鉢	7H	2号窯G区覆土	(23.1)	12.3	(8.6)	○	—	未調整自然釉	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	b◎		
894	○	○	子持ち器台	6I	灰原D区	8.8	4.1	3.2	○	不明	ナデ	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○			
940	○	○	重ね碗	5H	灰原H区	(15.6)	(7.5)	5.3	○	不明	△	もみ	2.5Y6/2	灰黄	良	良	○			重ね枚数：6 ゆがむ
980	○	○	重ね碗皿	7H	カクラン	9.0	4.0	2.6	碗○皿○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○			重ね枚数：碗2 皿1 碗の下に皿付着
986	○	○	重ね碗皿	6F	5号窯床面下施設	15.0	(7.7)	(5.3)	碗○皿不明	不明	△	不明	2.5Y7/1	灰白	良	良	○			重ね枚数：碗5 皿1 高台ほぼ欠損
1039	○	○	重ね皿	6H	カクラン	8.3	5.0	2.2	×	不明	△	–	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○			重ね枚数：7
1223	○	○	重ね皿	6H	カクラン	7.6	4.6	2.0	×	不明	△	–	2.5Y8/1	灰白	良	良	○			重ね枚数：7
1241	○	○	重ね皿	7H	カクラン	9.5	(4.8)	(2.8)	○	不明	×	不明	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○			重ね枚数：8 高台端部すべてハクリ
1397	○	○	重ね皿	7F	4号窯D区覆土	7.8	4.2	2.1	×	不明	△	–	2.5Y8/1	灰白	良	良	○			重ね枚数：2 天場もの（上部個体）
1401	○	○	重ね皿	6F	5号窯D区覆土	8.2	4.7	2.1	×	不明	△	–	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○			重ね枚数：8
1402	○	○	重ね皿	6G	4号窯F区	8.2	4.1	1.9	×	不明	△	–	2.5Y8/1	灰白	良	良	○			重ね枚数：2
1403	○	○	重ね皿	6G	5号窯F区	8.2	4.2	2.4	×	不明	○	–	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○			重ね枚数：3
1405	○	○	重ね皿	6G	5号窯F区	9.2	4.6	2.4	×	不明	×	–	2.5Y8/1	灰白	良	良	○			重ね枚数：5
1406	○	○	重ね皿	7F	4号窯D区覆土	8.6	4.3	2.2	×	不明	△	–	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○			重ね枚数：2 天場もの（上部個体）
1410	○	○	焼台	8G	3号窯	最大長14.9	最大幅15.3	最大高13.7					7.5Y6/1	灰	良					
1434	○	○	壺	6H	カクラン															破片 1439と同一個体参照
1439	○	○	壺	6I	灰原D区	欠損	(10.5)	残存(17.0)	○	欠損のため不明	欠損のため不明	もみ・砂	2.5Y7/1	灰白	良	優良	○			破片
1440	○	○	壺	7I	灰原A区															破片⇒1439接合
1441	○	○	壺	7I	灰原A区															破片⇒1439接合
1445	○	○	片口山茶碗	5H	灰原I区	(14.0)	(9.0)	(5.4)	×	欠損のため不明	△	–	2.5Y6/1	黄灰	良	良	○			
1450	○	○	伊勢場	6G	カクラン	(19.0)	–	残存9.5	×	—	–	–	2.5Y7/4	浅黄						破片
1453	○	○	陶錘	7I	灰原B区カクラン	長さ6.4	幅3.6						2.5Y8/1	灰白						
1460	○	○	重ね碗皿	7G	3号窯床面下施設	16.7	8.1	5.7	○	不明	△	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○			重ね枚数：碗2 皿1
1461	○	○	片口山茶碗	6H	灰原D区	(19.0)	9.0	(6.5)	○	○	△	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○			底部にひび割れ
1462	○	○	不明小型碗	5H	灰原P区	(10.6)	(4.4)	(5.1)	×	欠損のため不明	欠損のため不明	–	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○			
1463	○	○	小碗	5I	灰原P区北東ベルト	(9.4)	5.1	(4.3)	○	○	×	もみ少々	2.5Y7/1	灰白	良	良	○			仏具
1464	○	○	壺	6G	カクラン	(15.4)	–	残存3.6	–	—	–	–	2.5Y7/1	灰白	良	良	○			
1465			片口山茶碗	6G	カクラン	17.5	10.3	残存7.2	欠損×	○	△	欠損のため不明	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○			
1466	○	○	碗 補修	4H	灰原N区	–	–	残存3.1	–	—	–	–	2.5Y7/2	灰黄	良	良	○			補修痕あり
1467			壺	5H	灰原I区	–	–	残存3.3	–	—	–	–	2.5Y7/1	灰白	良	良	○			
1468	×	○	碗	8G	2号窯D区 焼成室	(15.5)	(7.8)	(4.1)	○	×	△	もみ	2.5Y8/1	灰白	良	良	○	B		
1469	×	○	碗	7H	2号窯F区 焼成室	16.5	8.1	5.7	○	×	○	もみ	2.5Y7/1	灰白	やや不良	良	×	B		
1470	×	○	小碗	7H	2号窯F区 焼成室	(9.2)	4.9	(3.0)	○	不明	×	もみ	2.5Y7/1	灰白	良	良	○	Ⅱ		天場もの

法量の( )は推定値、〈 〉は平均値を示す

内面底部調整痕：○指ナデあり －回転ナデ

外面底部調整痕：○糸切り痕明瞭に残るもの △糸切り痕あるが不明瞭に残るもの ×完全にナデ消され糸切り痕が確定できないもの

高台の有無：○高台あり ×高台なし △高台が有ったがハクリした

器形分類：◎体部下半に回転ヘラ削り痕あり

第12表　遺物観察表１２

第３章　自然科学分析

第１節　久分古窯群の考古地磁気学的研究

広岡公夫、植田有加、岩崎仁美
（大阪大谷大学文学部文化財学科）

1. はじめに

昔の人々が生活していた証拠として遺跡に残された炉跡や窯跡などの焼土遺構には、その当時の地球磁場（地磁気）方位やその強度の情報が熱残留磁化として残されている。その情報を高感度の磁力計で読み取って、過去の地磁気変動を復元する研究が考古地磁気学である。地磁気方位は、数十年～数百年のタイムスケールで相当大きな変動をしており、充分、残留磁化測定によって検出できるものである。このような地磁気の変動を地磁気永年変化（geomagnetic secular variation）という。ただ、その変動がどうして起きたのかについては、地磁気変動に関する理論的研究が進んでいないので、説明できない。過去の時代や未来の地磁気変動について予測することは、未だできないのである。そのため、まず、時代がよくわかった窯跡や炉跡の残留磁化測定によって、過去の時代の地磁気変動の様子を明らかにして、今後、その変動を説明できるような理論を構築していくほかに道はない。

地磁気変動の原因の詳細はわからなくても、地磁気が過去にどのように永年変化してきたかを明らかに出来れば、それをもとに、測定した焼土の残留磁化方向を変動曲線と照らし合わせて、焼土が焼かれた年代を推定することが出来るのである。これが考古地磁気法による年代推定法である。

東海地方については、瀬戸・東濃地域を中心とした考古地磁気測定結果をまとめて、東海版考古地磁気永年変化曲線が作られ（広岡・藤澤、2003）、年代推定に応用されている。

発掘調査された大府市内の山茶碗古窯についての考古地磁気測定は、相当数にのぼる。すなわち、海陸庵１・２号窯および神明１・２・３号窯（広岡ほか、1996）、深廻間Ａ１・２号窯（広岡・佐竹、2005）、深廻間Ｂ１・２・３号窯（広岡ほか、2006）、深廻間Ｃ１・２号窯（広岡ほか、2006）、ガンジ山Ａ１・２・３号窯（広岡・佐竹、2000）、瀬戸Ｂ１・２・３・４号窯（広岡・井上、2006）、石亀戸１・２・３号窯（広岡・小暮、2006）、砂原古窯（広岡ほか、2007）などである。

2. 考古地磁気の変動

地磁気の直接観測によって得られた偏角・伏角の最古の観測記録は、１６世紀中頃以降、英国ロンドンのグリニッヂで得られている。それ以来の 400 年余りの継続観測記録を見ると、地磁気方位は明らかに変わっており、永年変化が認められる。しかし、その変動周期は、もっと長いものらしく、この観測期間内では周期性は得られていない。ひょっとしたら、不規則な変動をしていて周期

性などはないのかも知れない。

観測の記録のない、より古い時代にまで遡って地磁気の変動の様子を調べるためには、残留磁化を測定する考古地磁気学的手法に依らねばならない。考古地磁気測定によって得られた永年変化は観測記録から得られた永年変化と区別するために、考古地磁気永年変化（archeomagnetic secular variation、または、archaeo-secular variation）という。

東海・北陸地方から北部九州に至る西南日本各地の遺跡に残された焼土の考古地磁気学的測定によって、過去2,000年間の考古地磁気変動が相当詳しく調べられており、西南日本における考古地磁気永年変化曲線（Hirooka、1971, 1983, 1991；広岡、1977）として、考古地磁気年代推定に利用されてきた。窯跡や炉跡の焼土の残留磁化を測定し、得られた磁化方向を上記の考古地磁気永年変化曲線と照合することによって、年代を推定することができるのである。

しかし、各地の考古地磁気データが増加するにしたがって、考古学的には全く同時代と考えられる異なる地域の考古地磁気データには、明らかに差異のあることが明らかになってきた。西南日本の範囲内では殆ど地磁気方位に地域的な差異がないとして作られた考古地磁気永年変化曲線では、地磁気方位の地域差は考慮されていなかった。そこで、考古地磁気データが充分に蓄積されている北陸地方（福井・石川・富山３県に新潟県西部を加えた地域）と、東海地方（岐阜・愛知・三重３県と静岡県西部を加えた地域）で得られたデータのみを用いて永年変化曲線が求められた。北陸版（広岡、1989）および東海版（広岡・藤澤、2003）考古地磁気永年変化曲線がそれである。北陸や東海地方の遺跡の考古地磁気年代推定にはこれらの永年変化曲線が用いられている。

2. 考古地磁気試料の採取と測定

久分古窯群では、２・３・４・５号窯から試料が採取された。これら４窯からそれぞれ12個の考古地磁気試料が得られている。２号窯の試料番号はCT3331～3342、３号窯の番号はCT3351～3362、４号窯の番号はCT3371～3382、５号窯の番号はCT3391～3402で、総計48個である（第13表）。これらは全て、方位が詳しく測られた定方位試料である。

定方位試料の採取は、我々のグループが永年試行錯誤の末に確立した採取法で、石膏で固めて石膏表面に平面を作り、その面の最大傾斜線方位とその傾斜角を測定してから採る方法である。この方法では面はいくら傾斜していてもかまわないので、最もよく焼けたと思われる部分を選んでサンプリングすることができる。この方法によって比較的短時間に精度のよい定方位試料が得られる。

定方位サンプルの採取方法の手順は次の通りである。

1) まず、古窯址床面のよく焼けている部分を選んで、試料として採取する焼土（こぶし大）の周りに深さ数ｃｍの溝を掘る。このとき、焼土が動かないように、焼土の根元部分が遺構につながったままの状態が保たれるように気を付ける。溝が堀り上がったら、こぶし大部分の土片や土埃をきれいに取り除いておく。古窯中の試料採取部位が自由に選べる場合は、焼成室中央部の中軸線沿いの部分で採取する。側壁際や窯尻、焚口近くは、焼成中の窯内磁場が歪んでいる可能性があり、正確な地磁気の方位を示さないおそれがあるからである。

2) 次いで、多めの水で溶いた石膏（牛乳程度）をその部分にかけ、全体がくずれないようにする。その後、濃いめに溶いた石膏（ソフトクリーム程度）を焼土の表面にのせ、数ｃｍ角のアルミ板を押し付けて石膏の上面に平面をつくる。先に薄い石膏をかけるのは焼土表面の細かい凹凸の中にも石膏がしみ込んで補強するのと、後でかける濃い石膏とよく馴染んで試料が壊れ難くなるからである。

3) 石膏が固まった後に、アルミ板をはがして、石膏平面の最大傾斜線（これを pitch という）の方位とその傾斜角（dip）を考古地磁気試料採取用に特に改造された特製クリノメーター（Hirooka、1971）で測り、野帳に記録する。石膏平面には、その面の走向（strike）と傾斜方向を示す３点と試料の番号を油性マーカーで記す。

4) １本刃の手鍬を用いて石膏で固めた試料を遺構から掘り起こす。

5) 試料の裏面にも石膏をかけて補強した後、１個ずつ壊れないように紙で包む。

通常、遺構の大きさにかかわらず、１遺構当りこのような試料を 10～15 個採取して、研究室に持ち帰る。

持ち帰った試料は、試料表面に記されている方位を示す３点をもとに、一辺 34 mm の立方体に切断・製形する。製形にはダイヤモンド・カッターを使用し、切断面にはその都度、石膏をかけてくずれないように保護しておく。

方位の測定にはクリノメーター（特製クリノコンパス）の磁針を用いているので、磁北を基準にした方位となる。したがって、磁北が真北からずれている角度（現在の偏角）分だけ偏ったものになっている。

遺跡現場の現在の偏角（D_{2000}）は、ＧＰＳ受信機を用いて求めた遺跡現場の緯度・経度から、国土地理院の西暦 2000 年の実験式（2006 年理科年表、2005）を用いて計算し、

D_{2000}＝　-7.2°（西偏 7.2°）

を得た。遺跡現場の緯度（Lat.）・経度（Long.）とともに、D_{2000} の値も第 13 表に載せてある。残留磁化測定結果の偏角はこの値を用いて真北を基準にしたものに補正されている。

残留磁化の測定には大阪大谷大学に設置されている夏原技研製のリングコア型スピナー磁力計（SMM-85 型）を使用し、試料１個につき６回置き直しをして測定した。縦型のこの磁力計では、回転軸は鉛直方向であるので、１回置きで回転軸に垂直な平面（水平面）内の直交２成分の磁化を測定することができる。したがって、６回置き直すと１２成分が得られ、３次元ベクトルである磁化ベクトルの直交３成分（Ｘ・Ｙ・Ｚ）のそれぞれを４回ずつ測ることになる。これら４個の値の平均値をＸ・Ｙ・Ｚのそれぞれの磁化成分とする。

試料が保持している自然残留磁化（natural remanent magnetization、略して、NRM）には、最終焼成後に付加された不安定な磁化成分も含まれている。それを効果的に除去するためには、段階交流消磁実験を行うとよい。今回は消磁磁場の段階として、2.5 mT、5.0mT、7.5 mT、10.0 mT の４段階を設定した。NRM の測定の後、この４段階で消磁を行なった。段階ごとに、磁化強度の減少度を参考にしながら磁化方向のまとまり具合をみて、最もまとまりがよくなる段階を選定して、それを最適消磁段階とし、その時の平均磁化方向を考古地磁気データとして採用する。通常の多く

の場合は、2.5mT～7.5mT の段階でまとまりが最もよくなり、それより上の段階ではばらつきが大きくなる場合が多い。しかし、10.0mT まで消磁しても、まだ、まとまり具合が改善しつつある場合は、12.5mT、15.0mT、20.0mT の消磁段階を追加し、磁化方位がばらつきはじめるまで消磁をし、最適消磁段階を求めた。考古地磁気年代推定は、こうして得られた考古地磁気データを用いて行われる。

久分古窯群２・３・４・５号窯の NRM および上記の最適消磁段階の残留磁化測定結果を第 14～21 表に示しておく。これらの表中に＊印を付けた試料は、磁化方向が大きくずれていて、地磁気の化石とはいえない向きに磁化しているものである。試料中に大きな礫（その中心部は充分に温度が上がっていない）が含まれていたのか、天井や窯壁片が紛れ込んでいた部分を試料として採取したのか、あるいは、磁化獲得後の傾動や発掘時の攪乱などで動いた部分であったかなど、何らかの理由で磁化が当時の地磁気方位とは大きくかけ離れてしまったものと考えられる。このような試料は、２号窯では３個（CT 3331, 3332, 3335）、３号窯でも３個（CT 3357, 3359, 33621）、４号窯では１個（CT 3380）、５号窯では４個（CT 3391, 3399, 3401, 3402）を数えた。

上記のような外れた磁化方向を示す試料を除外して、古窯の NRM および各消磁段階で、段階ごとに平均磁化方向および統計的なばらつきの程度を表わすパラメータ（フィッシャーの信頼角：α_{95} と、フィッシャーの精度係数：K）を計算によって求めた。統計計算にはフィッシャーの統計法（Fisher、1953）を用いた。平均磁化方向がその古窯の真の磁化方位と考えられるものであるが、測定結果はばらつきを持っており、その分だけ不正確さが含まれているので、平均磁化方向からずれる可能性がある。α_{95} はその可能性の大きさを示すものであり、真の磁化方位が平均磁化方向の廻りに 95% の確率で入る範囲を示している。また、Kは、個々の試料について、求められた平均磁化方向向きの磁化成分が磁化方向をばらつかせる成分の何倍であるかを表すパラメータである。したがって、α_{95}は値が小さいほど個々の試料の磁化方向の集中度が高くまとまりが良いことを示し、Kの値は大きいほど磁化方向のまとまりがよいことを示す。 通常まとまりのいい古窯の場合はα_{95}は 2°台以下で、同一古窯から得られた試料個数が多いほど小さくなり、精度が高くなる。Kは、試料個数には関わらず、値が大きいほど個々の試料のばらつき程度が小さくなることを意味し、まとまりの良い古窯では 500 以上の値をとる。

各消磁段階の統計処理の結果は第 22 表にまとめられている。最適消磁段階は【　】で括って示されている。２号窯の最適消磁段階は 7.5mT、３号窯のそれは 15.0mT、４号窯では 12.5mT、５号窯では 2.5mT となった。３号窯と５号窯の α_{95} はともに 3.6°であり、通常のものよりばらつきが大きく、推定年代値の誤差が大きくなる。

同表の平均磁化強度を見ると、２号窯は 10^{-3}（Am^2/kg）のオーダーの磁化強度を保有しており通常の窯跡より少し強い強度を示している。他の古窯も 10^{-4}のオーダーとなっており、全ての古窯は充分に加熱されたことを示している。

3. 考古地磁気と年代推定

第22表の最適消磁段階の考古地磁気データ（【　】で括ったもの）を東海版考古地磁気永年変化曲線（広岡・藤澤、2003）に載せたのが第28図である。考古地磁気年代はこの図から求められる。図中の●が各窯の平均磁化方向を示しており、それを囲む円がフィッシャーの信頼円（α_{95}）で、誤差の範囲を表す。●印に最も近い永年変化曲線上の点の年代が考古地磁気推定年代となり、推定年代幅（年代誤差）は信頼円が覆う永年変化曲線の線分の長さとなる。今回の考古地磁気測定結果は、きれいには永年変化曲線上に載っていないので、離れた分だけ年代誤差は大きくなると考えられる。

この図に見られるように、3号窯と5号窯では信頼円が大きく、推定年代の誤差が大きくなることがわかる。また、伏角は、5号窯→2号窯→4号窯→3号窯の順に深くなっているので、永年変化曲線の伏角の変動傾向から、考古地磁気学的には5号窯が一番古く2号窯、4号窯、3号窯の順に新しくなると考えられる。

推定される考古地磁気年代は、

久分2号窯　：　A.D. 1070±20年
久分3号窯　：　A.D. 1130±50年
久分4号窯　：　A.D. 1090±20年
久分5号窯　：　A.D. 1050±50年

となろう。

引用文献

Fisher, R. A.（1953）Dispersion on a sphere, Proceedings of Royal Society of London, Series A, vol.217, 295-305.

Hirooka, K.（1971）Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan, Memoirs of Faculty of Science, Kyoto University, series of Geology & Mineralogy, 38, 167-207.

広岡公夫（1977）考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol.15, 200-203.

Hirooka, K.(1983) Archaeomagnetism of baked clays : Results from Japan. in 'Geomagnetism of Baked Clays and Recent Sediments'. ed. by K.M. Creer, P.Tocholka and C.E. Barton, Elsevier, Amsterdam, 150-157.

広岡公夫（1989）古代手工業生産遺跡の自然科学的考察、－考古地磁気学、古地磁気学の立場から－、「北陸の古代手工業生産」、北陸古代手工業生産史研究会編、真陽社、225-284.

Hirooka, K.（1991）Quaternary paleomagnetic studies in Japan. The Quaternaqry Research(第四紀研究), vol.30, 151-160.

広岡公夫、藤澤良祐（2003）東海地方の地磁気永年変化曲線、考古学と自然科学、vol.45,　-日

本文化財科学会誌-、29-54.

広岡公夫、佐竹俊昭（2000）ガンジ山Ａ古窯跡群の考古地磁気研究、「ガンジ山Ａ古窯跡群～大府桃山土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書～」、大府市文化財調査報告書、第４集、大府市教育委員会、102-123.

広岡公夫、佐竹俊昭（2005）深廻間Ａ古窯跡群の考古地磁気学的研究、「深廻間Ａ古窯跡群～大府特定深廻間土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告～」、大府市文化財調査報告書、第５集、愛知県大府市教育委員会、160-172.

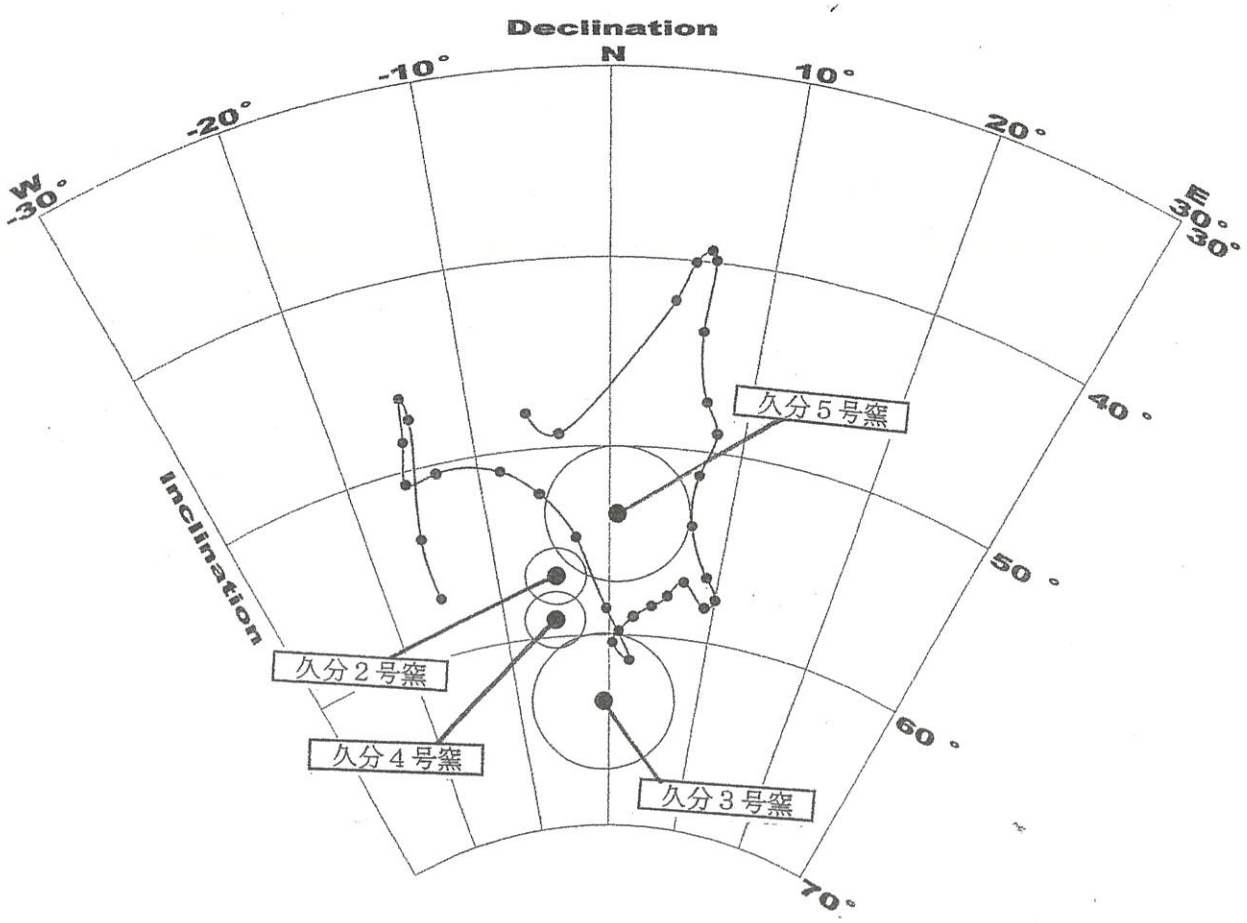
広岡公夫、井上裕香（2006）瀬戸Ｂ古窯跡１・２・３・４号窯の考古地磁気年代推定、文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究・公募研究Ｄ01、平成 16 年度～平成 17 年度研究成果報告書、広岡公夫編、25-40.

広岡公夫、小暮亮宣（2006）石亀戸古窯の考古地磁気年代推定の研究、文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究・公募研究Ｄ01、平成 16 年度～平成 17 年度研究成果報告書、広岡公夫編、41-61.

広岡公夫、水上裕美、川浪英子（1996）海陸庵・神明古窯址群の考古地磁気年代、「海陸庵古窯址群・神明古窯址群、～大府半月地区区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書～」、大府市文化財調査報告書、第２集、愛知県大府市教育委員会、138-151.

広岡公夫、小暮亮宣、金井友理、吉原 新（2006）深廻間Ｃ古窯群の考古地磁気学的研究、文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究・公募研究Ｄ01、平成 16 年度～平成 17 年度研究成果報告書、広岡公夫編、10-24.

国土地理院（2006）偏角分布図(2000 年)、「理科年表 2006」、東京天文台編、丸善、756.



第 28 図　西暦 700 ～ 2000 年の東海版考古地磁気永年変化曲線（広岡・藤澤、2003）と久分古窯群の考古地磁気測定結果.

Declination：偏角、Inclination：伏角.

古窯名	試料個数	試料番号
久分２号窯	12	CT3331～3342
久分３号窯	12	CT3351～3362
久分４号窯	12	CT3371～3382
久分５号窯	12	CT3391～3402

Lat.：35° 02′ 17.7″ N、 Long.：136° 56′ 29.6″ E
$D_{2000} = -7.2°$

第13表　久分古窯群から採取した考古地磁気試料個数と試料番号

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（$\times 10^{-4}$ Am^2/kg）
*CT 3331	8.0	51.9	6.56
* 3332	48.8	44.1	8.80
3333	-5.2	8.58	13.2
3334	-6.4	57.1	26.1
* 3335	-3.7	42.9	12.0
3336	-4.6	54.6	19.9
3337	-3.2	60.5	13.1
3338	-0.7	55.6	30.8
3339	-11.4	56.0	23.7
3340	3.1	56.8	25.5
3341	-8.4	57.5	38.7
3342	-6.6	55.0	22.4

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第14表　久分２号窯のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（$\times 10^{-4}$ Am^2/kg）
*CT 3331	7.6	52.8	6.33
* 3332	47.8	44.2	8.58
3333	-6.5	57.3	12.8
3334	-4.3	57.9	25.6
* 3335	-4.9	44.4	12.1
3336	-3.8	54.3	19.9
3337	-3.7	59.2	12.5
3338	-0.6	56.1	29.5
3339	-10.4	56.2	22.8
3340	0.8	56.9	24.7
3341	-8.2	56.6	37.5
3342	-6.2	56.5	21.9

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第15表　久分２号窯の７．５ｍＴ（最適消磁段階）の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
CT 3351	-7.8	59.1	11.3
3352	-3.0	60.0	5.37
3353	16.0	59.3	4.56
3354	-4.2	61.7	3.42
3355	11.5	62.3	2.12
3356	1.0	59.7	3.54
* 3357	5.3	42.5	0.897
3358	11.2	67.3	1.75
* 3359	-8.9	30.1	0.897
3360	-15.5	64.0	0.960
3361	3.2	63.1	1.66
* 3362	-6.2	30.3	0.424

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第16表　久分３号窯のＮＲＭ の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
CT 3351	-6.7	60.2	10.1
3352	-1.9	61.3	5.05
3353	10.5	61.7	3.63
3354	-1.6	62.5	3.38
3355	5.7	63.2	1.97
3356	0.8	60.5	3.39
* 3357	-8.5	46.3	0.602
3358	8.0	69.8	1.35
* 3359	-10.0	37.5	0.586
3360	-25.3	64.8	0.638
3361	6.4	63.9	1.15
* 3362	15.6	53.7	0.465

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第17表　久分３号窯の１５.０ｍＴ（最適消磁段階）の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
CT 3371	-7.2	58.4	1.20
3372	-2.0	58.6	1.31
3373	0.4	60.9	1.20
3374	-4.8	57.7	2.68
3375	-0.4	58.3	1.32
3376	-2.7	60.9	1.34
3377	-7.4	58.0	2.36
3378	-10.2	63.0	1.18
3379	11.7	60.7	0.860
* 3380	-4.5	36.5	0.161
3381	-2.2	58.7	1.49
3382	-21.8	58.0	0.0598

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第18表　久分４号窯のＮＲＭ の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
CT 3371	-8.0	58.5	0.908
3372	-5.2	58.7	0.950
3373	-4.9	62.5	0.937
3374	-6.9	57.7	1.88
3375	-2.8	57.5	0.965
3376	-2.0	60.8	1.04
3377	-7.8	58.9	1.85
3378	-9.2	62.5	0.842
3379	-1.6	59.6	0.637
* 3380	9.3	42.2	0.106
3381	-1.9	58.1	0.981
3382	-6.8	54.6	0.0528

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第19表　久分４号窯の１２．５ｍＴ（最適消磁段階）の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
*CT 3391	3.0	71.9	3.80
3392	5.9	49.2	3.95
3393	1.7	55.0	2.95
3394	1.2	51.8	1.95
3395	-4.0	46.8	2.86
3396	6.9	47.5	2.69
3397	2.5	58.2	0.296
3398	1.4	56.0	1.06
* 3399	-48.6	66.5	0.443
3400	-6.7	54.7	0.190
* 3401	6.8	6.9	0.509
* 3402	24.4	71.4	0.145

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第20表　久分５号窯のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2/kg）
*CT 3391	-0.6	72.8	3.71
3392	3.3	51.7	4.01
3393	4.0	55.9	2.87
3394	4.1	50.8	1.42
3395	-3.8	47.4	2.74
3396	6.3	48.8	2.61
3397	0.0	58.8	0.276
3398	-1.0	55.7	0.995
* 3399	-48.5	61.9	0.377
3400	-8.9	58.6	0.179
* 3401	9.4	-0.1	0.529
* 3402	-0.4	69.9	0.129

＊：フィッシャーの統計計算の際に除外したもの.

第21表　久分５号窯の２．５ｍＴ（最適消磁段階）の磁化測定結果

遺構名	消磁段階	n/ N	D (° E)	I (°)	α_{95} (°)	K	平均磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am^2/kg)	
2号窯	NRM	9/12	-4.8	56.9	1.9	742.4	23.7	
	2.5mT	9/12	-5.2	57.0	1.7	900.5	23.0	
	5.0mT	9/12	-5.1	56.8	1.8	810.7	20.7	
	【 7.5mT	9/12	-4.8	56.8	1.5	1182.6	23.0	】
	10.0mT	9/12	-5.4	57.1	1.8	860.9	23.0	
3号窯	NRM	9/12	1.3	62.2	3.5	219.3	3.85	
	2.5mT	9/12	-1.0	61.8	3.9	174.0	3.73	
	5.0mT	9/12	-0.7	62.5	4.0	170.6	7.28	
	7.5mT	9/12	-1.2	62.5	4.1	158.7	3.62	
	10.0mT	9/12	-1.4	62.8	3.8	179.9	3.59	
	12.5mT	9/12	-1.4	63.3	3.7	199.7	3.31	
	【 15.0mT	9/12	-0.6	63.5	3.6	208.6	3.41	】
	20.0mT	9/12	-1.1	61.8	4.2	148.9	3.21	
4号窯	NRM	11/12	-5.7	59.5	2.0	501.0	1.36	
	2.5mT	11/12	-5.6	59.8	2.2	415.9	1.31	
	5.0mT	11/12	-6.4	59.3	2.4	372.0	1.31	
	7.5mT	11/12	-4.1	59.2	1.8	648.4	1.20	
	10.0mT	11/12	-4.6	58.6	1.6	846.2	1.06	
	【 12.5mT	11/12	-5.2	59.1	1.5	908.2	1.00	】
	15.0mT	11/12	-4.9	58.4	1.9	558.4	1.01	
5号窯	NRM	8/12	1.2	52.5	3.5	254.5	1.77	
	【 2.5mT	8/12	0.7	53.6	3.6	235.8	1.89	】
	5.0mT	8/12	-0.3	53.5	3.8	210.0	1.81	
	7.5mT	8/12	1.3	53.5	3.9	198.5	1.70	
	10.0mT	8/12	0.8	54.8	4.8	134.2	1.61	

n/N：採択試料個数／採取試料個数、　D：平均偏角、　I：平均伏角、
α_{95}：フィッシャーの信頼角、　K：フィッシャーの精度係数.
【　】：考古地磁気データとして採用したもの.

第22表　久分古窯群の考古地磁気測定結果

第２節　久分古窯群出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ
藤根　久・中村賢太郎

1. はじめに

久分古窯群は、大府市に所在する山茶碗・小皿・片口鉢・壺などを焼成した鎌倉時代の古窯である。

ここでは、この古窯から出土した炭化材について樹種同定を行い、燃料材の特徴について調べた。

2. 試料と方法

炭化材試料は、４号窯出土炭化材２試料、５号窯出土炭化材３試料、灰原出土炭化材６試料の合計 11 試料である。

炭化材試料は、３断面(横断面・接線断面・放射断面)を 5mm 角以下の大きさに整え、直径１cm の真鍮製試料台に両面テープで固定し銀ペーストを塗布した後、金蒸着を行った。観察および同定は、走査型電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV 型）を使用した。

3. 結果および考察

炭化材の樹種同定を行った結果、常緑針葉樹のマツ属複維管束亜属、常緑広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下クヌギ節）、落葉広葉樹のコナラ属コナラ節（以下コナラ節）、クリであった（第23 表）。

４号窯では、マツ属複維管束亜属、コナラ属のクヌギ節およびコナラ節が検出された。

５号窯では、マツ属複維管束亜属、コナラ属のクヌギ節およびコナラ節、クリが検出された。

灰原では、マツ属複維管束亜属、コナラ属のクヌギ節およびコナラ節が検出された。

以上の状況から、灰原を含めて検出された樹種が燃料材として利用されたことが推定される。なお、市内における中世の山茶碗窯の燃料材を見ると、同様にマツ属複維管束亜属やコナラ属のクヌギ節やコナラ節、クリが利用されている（植田，2005；植田，2006）。

試料No.	遺構・位置	地区	層位	取上げNo.	樹種	形状	サイズ(mm)
1	4号窯	C区(7F)	覆土	9-1	コナラ節、マツ属複維管束亜属	ミカン割,破片	r=13,47x32x20
2			燃焼室	10-1	クヌギ節	丸木	d=19
3	5号窯			9-2	クリ、クヌギ節	丸木	d=25,d=22
4				9-3	コナラ節	丸木	d=22
5				9-4	マツ属複維管束亜属	破片	65x35x11
6	灰原	(6I)		7-1	マツ属複維管束亜属	半裁	r=43
7		I区(5H)	3層	8-1	マツ属複維管束亜属	破片	80x80
8		R区(3H)	1層	8-2	-	灰化	
9		B区(6H)北東ベルト	4層	8-3	コナラ節	ミカン割	r=20
10		D区(6I)		10-2	マツ属複維管束亜属	丸木	d=30
11		I区(5H)		10-3	クヌギ節	丸木	d=27

第 23 表　久分古窯群から出土した炭化材と樹種同定結果（サイズ欄、d;直径、r;半径）

以下に、同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

(1)マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　図版13　1a-1c(№6)

仮道管、水平と垂直の樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞、放射柔細胞および放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は急で、晩材の量は多く、垂直樹脂道は早材から晩材にかけて見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管があり、その内壁には鋸状の肥厚がある。放射組織は1～10細胞高である。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがあり、アカマツは二次林の代表樹種である。自然分布ではアカマツは内陸部に、クロマツは海岸部に多い。木材は、建築材のほか杭材や車両材などに利用される。

(2)コナラ属コナラ亜属コナラ節　*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　図版13 2a-2c（№9）

年輪の始めに大型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では薄壁の角ばった小型の管孔が火炎状にかつ放射方向に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性単列のものと集合放射組織から構成される。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。代表的なコナラ節であるコナラは、加工がややしにくく乾燥すると割れや狂いが出やすい。

(3)コナラ属コナラ亜属クヌギ節　*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　図版13 3a-3c(№3),

年輪のはじめに大形の管孔が 1～3 層配列し、その後小型・厚壁の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材である。放射組織は、同性単列のものと合放射組織から構成される。

クヌギ節は、落葉性高木であり、関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。材は、重厚で割裂性が良い。現在においても薪炭材として重要な樹木である。

(4)クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版13　4a-4c（№3）

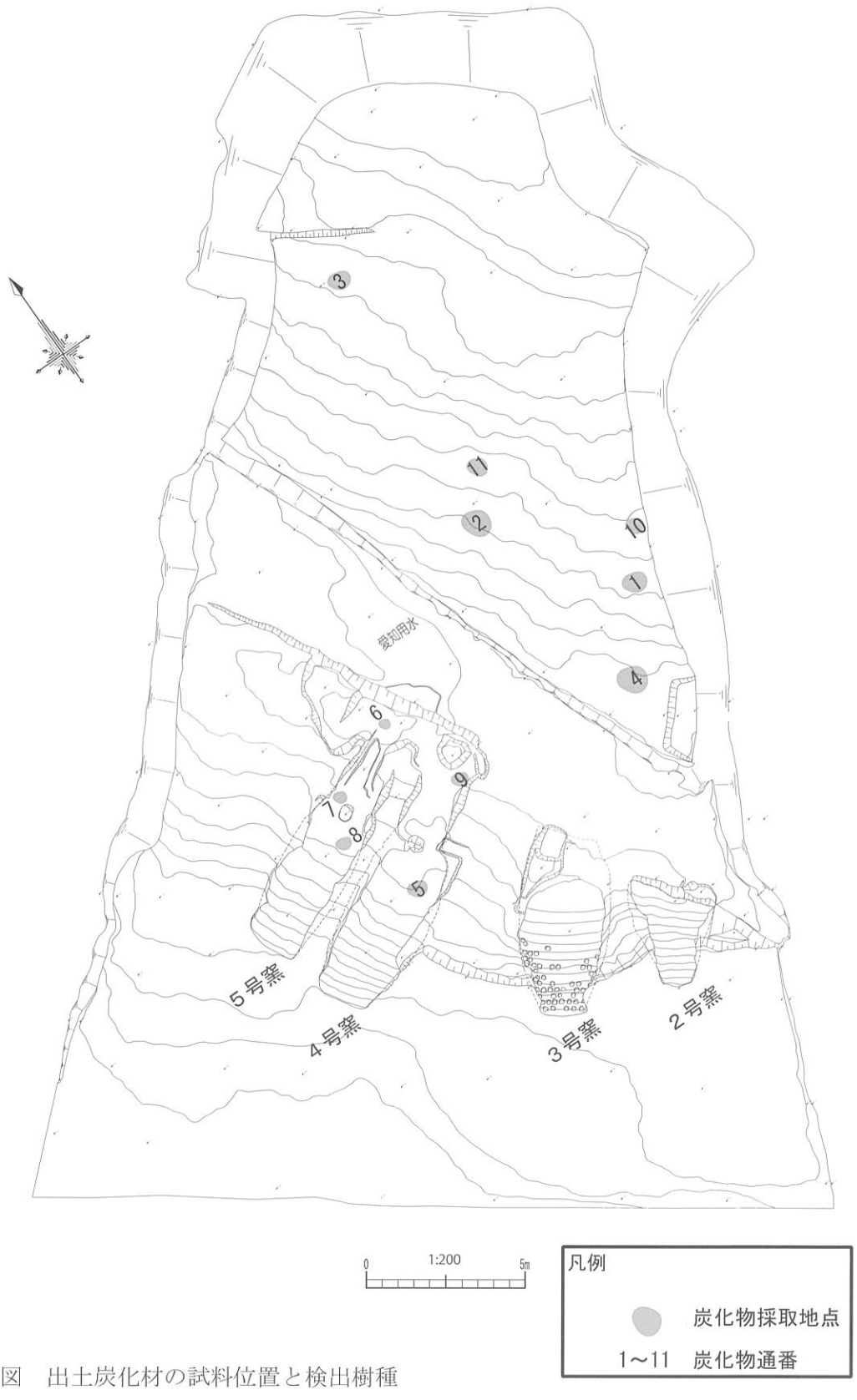
年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性、4-15細胞高である。道管との壁孔は孔口が大きく交互状･柵状である。

クリは、北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通に生育する落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性に優れている。

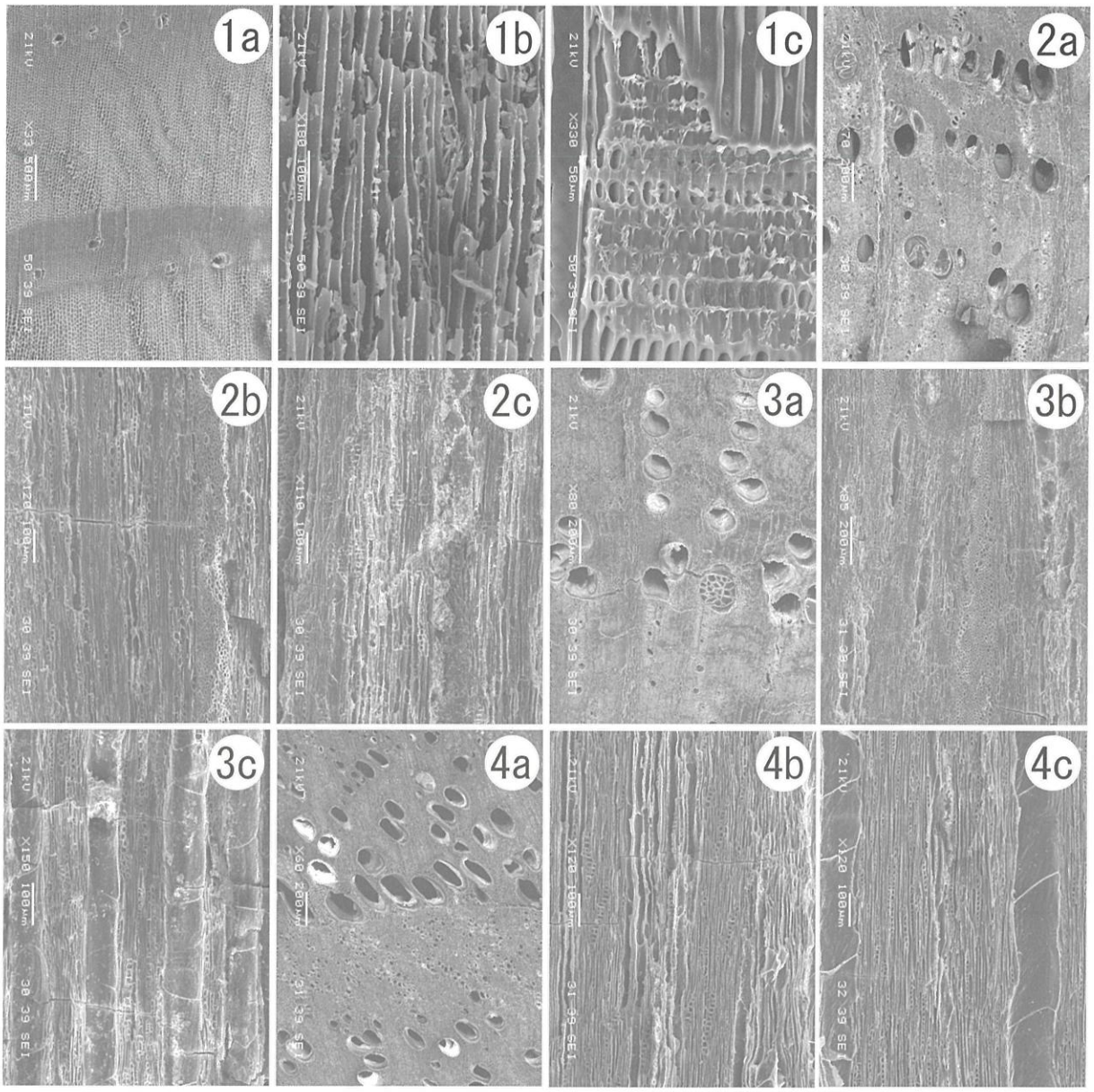
引用文献

植田弥生 (2005) 深廻間Ａ古窯跡群出土炭化材の樹種同定. 深廻間Ａ古窯跡群, 大府市教育委員会, 173-182.

植田弥生 (2006) 深廻間Ｂ古窯跡群出土炭化材の樹種同定. 深廻間Ｂ古窯跡群, 大府市教育委員会, 91-96.



第 29 図　出土炭化材の試料位置と検出樹種



図版 13　木材組織の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c.マツ属複維管束亜属（No.6）　2a-2c.コナラ属コナラ節（No.9）

3a-3c.コナラ属クヌギ節（No.3）　4a-4c.クリ（No.3）

第３節　市内および周辺地域の古窯の燃料材に関する考察

黒沼保子
（株式会社パレオ・ラボ）

1. はじめに

久分古窯群は、大府市に所在する山茶碗・小皿・片口鉢・壺などを焼成した鎌倉時代の古窯である。市内の古窯の燃料材の樹種については、これまでに多くの樹種同定が行なわれ、古窯燃料材の樹木利用について検討できる段階になった。

ここでは、市内および知多半島に所在する古窯燃料材に関する樹種利用について今後の課題を含めて考察した。

2. 市内古窯燃料材の樹種利用

久分古窯群の４号窯、５号窯および灰原から出土した炭化材の樹種同定を行なった。その結果、マツ属複維管束亜属、クリ、クヌギ節、コナラ節の４分類群が検出された。マツ属複維管束亜属、クヌギ節、コナラ節は４号窯、５号窯、灰原の全てから、クリは５号窯からのみ検出された。炭化材の形状は破片状で、元の木取りがわからないものも数点あったが、直径 2～3cm の丸木、半径 2～4cm 程度の半裁とミカン割りがあり、燃料材の太さが揃えられていた可能性もある。比較的径の細い丸木を利用していることから、移入品ではなく遺跡周辺の樹木を伐採したと考えられる。また、割合としてはややマツ属複維管束亜属が多いように思われるが、量比を検討するには分析点数があまり十分とは言えない。

大府市内の山茶碗窯跡で行なわれた燃料材の分析では、マツ属複維管束亜属、クリ、コナラ節、クヌギ節が主体をなす点が確認されている。大府市内における各古窯跡の燃料材の樹種構成を第 24 表にまとめた。窯跡によって各樹種の量比が若干異なる傾向がみられる。例えば、深廻間Ａ古窯跡群やガンジ山Ａ古窯跡群などでは、クヌギ節・コナラ節がマツ属複維管束亜属やクリより多く検出されている（植田，2005；植田,2006 ほか）。一方、羽根山古窯跡群、砂原古窯跡、森岡第１号窯跡群、深廻間Ｂ古窯群では、マツ属複維管束亜属が優勢となる。また、瀬戸Ｂ古窯跡群のようにマツ属複維管束亜属、クヌギ節、コナラ節のいずれもが多数検出されている古窯跡もある。しかし、これらの古窯跡における樹種の量比の違いが何に起因するかは現時点では不明である。久分古窯群の燃料材については、周辺古窯の基本的な燃料材の樹種構成と一致している点は確認できるが、分析点数が少ないので確実ではない。今後分析点数が増えれば、量比についての検討が可能になるであろう。またクリについては、燃料材としての利用の他、深廻間Ａ古窯跡群では窯の施設構築材としても用いられていることから（植田，2005）、出土状況と併せて検討する必要がある。

3. 知多半島および猿投・瀬戸地域における古窯燃料材の樹種利用

久分古窯群が所在する大府市は、南は知多半島と接しており、北には猿投・瀬戸地域が存在するが、この両地域では燃料材に利用される樹種に違いがみられる。猿投・瀬戸地域の窯で使用されていた燃料材は、須恵器窯および灰釉陶器窯ではクヌギ節・コナラ節が優先し、これにクリとマツ属複維管束亜属が含まれるが、中世の山茶碗窯になるとクリ、コナラ節・クヌギ節よりもマツ属複維管束亜属が優先する。例えば、みよし市の黒笹3号窯・21号窯および瀬戸市の広久手18・20・30号窯跡などでは須恵器窯・灰釉陶器窯と山茶碗窯の調査が行なわれており、上記のような燃料材の変遷が顕著にみられる（植田，2000a；植田，2001）。

一方、知多半島に所在する中世の古窯群の燃料材については、早野によって集成および考察が行われている（早野，2007）。これによると、12世紀に山茶碗や甕を焼成していた窯跡ではシイノキ属が優先する傾向にあるが、13世紀以降になると二次林化に伴って増加したと考えられるマツ属複維管束亜属の利用が顕著になる。しかし樹種構成は窯跡によって異なることも多い。例えば、13世紀半ばの鎗場・御林古窯址跡などでは、マツ属複維管束亜属よりもシイノキ属やアカガシ亜属などの常緑広葉樹が優先する他、イヌシデ属やコナラ節などの落葉広葉樹も多種類確認されている。また13世紀後半の桜鐘古窯群や13世紀前半の芝山F古窯跡では、マツ属は検出されず、シイノキ属、ヒサカキ、クスノキ、サクラ属などの常緑および落葉広葉樹のみで構成されている。マツ属複維管束亜属が優勢となる傾向は特に沿岸部で多くみられるが、夏敷古窯跡など一部の内陸の古窯でも、マツ属複維管束亜属のみで構成される窯跡がある。夏敷古窯跡は海運での製品輸送の可能性が示唆されている窯跡で、燃料材も遺跡周辺で伐採するのではなく、他の地域より搬入された材を利用していた可能性が考えられている。

以上から、猿投・瀬戸地域では主に二次林化した森林を利用していた傾向がうかがえ、知多半島の内陸部では自然植生の樹種を燃料材として用い、局所的に二次林化した地域や沿岸部ではマツ属複維管束亜属などの樹種が用いられていたと考えられる。

上記2地域と大府市内における燃料材の樹種構成を比較すると、大府市内の古窯跡は二次林要素の強い樹種を利用している点で猿投・瀬戸地域の樹種構成の傾向と類似しているが、山茶碗窯では必ずしもマツ属が優勢しない点で異なる。しかし、マツ属複維管束亜属が優勢だが、クヌギ節とクリの他にアカガシ亜属、ミズキ属、エゴノキ属など数種類の広葉樹が検出されている森岡第1号窯跡群のように、市内の他の窯跡と異なり、知多半島の傾向に類似する古窯もある。

周辺植生と燃料材を比較するには、花粉分析など他の分析と併せて検討する必要がある。久分古窯群とは時期が若干異なるが、猿投・瀬戸地域にある巡間E窯跡において、14世紀代の山茶碗を焼成していたSY01と古瀬戸を焼成していたSY02の灰原で花粉分析が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社，2003）。その結果、マツ属およびマツ属複維管束亜属が顕著にみられ、クリやコナラ亜属なども一定量みられるなど、二次林要素の強い樹種が多く確認された。したがって、窯跡周辺には二次林が広がっていたと考えられるが、一方でモミ属やモチノキ属など二次林要素以外の樹種もある程度検出されており、元来の自然植生が残る森林もある程度窯跡周辺にみられた可能性がある。同窯

の燃料材の樹種同定でもマツ属複維管束亜属とクリが多く検出されているほか、モミ属、アカガシ亜属、サクラ属などが検出されており、花粉分析の結果と一致している（植田，2003）。

久分古窯群周辺で燃料材として多く用いられているマツ属複維管束亜属とクヌギ節、コナラ節は、前述の通り二次林的要素の強い分類群である。これらの二次林を構成する樹木は生長が早いことから、繰り返し伐採して利用する薪炭材には適していると考えられる。燃料材を窯跡周辺の森林から伐採していたとすると、久分古窯群周辺でも二次林化が進行していたと推測される。しかし、巡廻間 E 窯跡のように本来の自然植生であるシイ-カシ林も残っていた可能性もあり、窯跡周辺から燃料材を得ていた場合、燃料材に適したマツ属複維管束亜属やクヌギ節、コナラ節などの樹種を選択的に利用していた可能性がある。また久分古窯群においては径の揃った丸木が多いことから、径の太さも選択において考慮されていたかもしれない。

今後、花粉分析など他の分析と併せて検討することにより周辺植生との関わりがより明確になると思われる。また分析点数が増加すれば、大府市内における燃料材の樹種構成の量比を検討することも可能になり、瀬戸・猿投地域や知多半島との比較もより詳細に行なえるようになるであろう。

4. おわりに

ここでは、大府市内およびその周辺に所在する古窯燃料材に関する樹種利用について考察した。今後の課題としては、古窯の周辺域の低地堆積物の花粉分析を行ない樹木植生について調べたうえで、燃料材に関する樹種選択の実態について検討する必要があると考えられる。

引用文献

早野浩二（2007）考察とまとめ．愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター編「夏敷古窯跡　蛇廻間古窯跡」：145-169，愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター．

パリノ・サーヴェイ株式会社（2003）巡間 E 窯跡の花粉分析．愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター編「巡間 E 窯跡」：73-78，愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター．

植田弥生（1999）森岡第 1 号窯跡群出土炭化材の樹種同定．愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター編「森岡第 1 号窯跡群」：57-62，愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター．

植田弥生（2000a）炭化材の樹種同定．三好町教育委員会編「北部畑総南工区藤塚地内埋蔵文化財発掘調査報告書」：106-108，三好町教育委員会．

植田弥生（2000b）炭化物について．大府市教育委員会編「ガンジ山 A 古窯跡群」：124-129，愛知県大府市教育委員会．

植田弥生（2001）広久手 18・20・30 号窯跡出土炭化材の樹種同定．瀬戸市埋蔵文化財センター編「広久手 18・20・30 号窯跡」：235-246，瀬戸市埋蔵文化財センター．

植田弥生（2003）巡間 E 窯跡遺跡出土炭化材の樹種同定．愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター編「巡間 E 窯跡」：79-82，愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター．

植田弥生（2005）深廻間Ａ古窯跡群出土炭化材の樹種同定．大府市教育委員会編「深廻間Ａ古窯跡群」：173-182，愛知県大府市教育委員会．

植田弥生（2006）深廻間Ｂ古窯跡群出土炭化材の樹種同定．大府市教育委員会編「深廻間Ｂ古窯跡群」：91-96，愛知県大府市教育委員会．

植田弥生（2007）砂原古窯出土炭化材の樹種同定．大府市教育委員会編「砂原古窯跡」：79-84，愛知県大府市教育委員会．

植田弥生（2009）瀬戸Ｂ古窯跡群の出土炭化材の樹種同定．大府市教育委員会編「瀬戸Ｂ古窯群奥谷古窯跡」：173-142，愛知県大府市教育委員会．

植田弥生（2010）羽根山古窯跡から出土した炭化材の樹種同定．大府市教育委員会編「羽根山古窯跡群」：152-158，愛知県大府市教育委員会．

遺跡名	時期	検出位置			検出樹種	マツ属	クリ
瀬戸B古窯跡群	12世紀後半	灰原			マツ属複維管束亜属多数・クヌギ節多数・コナラ節多数	3 多数 多数	2
		2号窯	F区				
			灰原				
			焼成室焚口				
		3号窯					
		4号窯					
森岡第1号窯跡群	12世紀中葉～後葉	灰原02			マツ属複維管束亜属多数＞クヌギ節3・アカガシ亜属3＞クリ2・ミズキ属2・エゴノキ属2・その他広葉樹2	多数	
		灰原03				多数	2
深廻間A古窯跡群	12世紀後半～13世紀初頭	SK1			クヌギ節87＞クリ22・コナラ節22＞マツ属複維管束亜属複数	複数	4
		1号窯	焼成室	床面下施設		4	9
				埋土中		8	9
			燃焼室				
深廻間B古窯跡群	12世紀後半～13世紀初頭	1号窯	窯内		クヌギ節27＞コナラ節12＞マツ属複維管束亜属6＞クリ１		
		2号窯	焚口			6	1
			焼成室				
羽根山古窯跡群	12世紀末～13世紀中葉	床面下	1号窯		マツ属複維管束亜属27＞クヌギ節6＞コナラ節5＞クリ2＞コナラ属根材1（※破片数ではなく検出された地点数）	1	1
		焼成室	1号窯			2	
			2号窯			2	1
			3号窯			2	
			4号窯			1	
		燃焼室	3号窯			2	
			4号窯			1	
			5号窯			1	
		焚口	1号窯			12	
		灰原				3	
		SD03・SK01・SU01					
ガンジ山A古窯跡群	12世紀末～13世紀中葉	灰原・灰層			マツ属複維管束亜属34＞クヌギ節32＞コナラ節8	19	
		2号窯燃焼室				3	
		3号窯	焚口			6	
			窯内覆土上層				
			焼成室			6	
砂原古窯跡	13世紀前半	焚口	A区		マツ属複維管束亜属6＞クヌギ節3＞コナラ節2	1	
		焚口～燃焼	B・C区			1	
		燃焼室	C区			1	
		焼成室	F・H区			3	
久分古窯群	13世紀半ば	４号窯	覆土		マツ属4＞クヌギ節3・コナラ節3＞クリ1	1	
			燃焼室				
		5号窯				1	1
		灰原				3	

第24表　大府市内における燃料材の樹種一覧

第４節　総括

今回出土した遺物は調査区全体で、碗 7557 点、小碗・小皿 4391 点、鉢 15 点、重ね碗 796 組（2853 点）、重ね小碗・小皿 1057 組（3174 点）、重ね碗皿組 28（点）、焼台 152 点、片口山茶碗 4 点、伊勢型塝 4 点、壷 4 点、子持ち器台 1 点、仏具小碗 1 点、陶錘 1 点が出土した。その多くが愛知用水支線埋設工事により破壊された撹乱部分に属しており、窯内から出土した遺物は少量であった。

なお、碗、皿、鉢類については底径が 1/2 以上残存するものを 1 個体とし、他の器種については、破片から明らかに 1 個体と判別できるものをカウントした。

今回確認された窯 4 基は北東向き斜面の標高約 35.5～38.5m に築窯された窖窯である。いずれの窯も後世の削平により多くの部分が破壊されており、また、窯体埋土の堆積状況や灰原の重複関係、窯体と灰原の関係などがつかめず、検出された窯体の前後関係がはっきりとは解明できなかった。築窯の方向が 2 号窯Ｓ-37°-W、3 号窯Ｓ-38°-W、4 号窯Ｓ-61°-W、5 号窯Ｓ-66°-Wであることから 2・3 号窯で 1 グループ、4・5 号窯で 1 グループと考えられる。

本窯の出土遺物は碗類、皿類、鉢類の 3 種類が主体である。窯内の遺物の出土数は少ないが、小碗がまとまって出土していること、小皿の中に、底部が円柱状に突出する個体が確認されること、碗の中には高台が丁寧に付けられ、その変形が少なく、体部が丸みを帯びるものが少なからず確認されることなどから、赤羽・中野編年の 2 型式から 3 型式、12 世紀中期から後期にかけ操業されたと考えられる。2・3 号窯グループと 4・5 号窯グループの遺物を比べると、2・3 号窯グループの方が若干古いと思われる。

考古地磁気年代測定によると 5 号窯が一番古く、2 号窯、4 号窯、3 号窯の順に新しくなり、実年代は 11 世紀前半から 12 世紀後半との結果が出ており、型式編年や築窯方向から推定した年代順とはズレが生じた。

周辺の遺跡をみてみると、砂原古窯（平安末～鎌倉初期）、瀬戸Ｂ古窯群（平安末～鎌倉初期）、別岨古窯群（平安末～鎌倉前期）などがあり、本古窯群とほぼ同時期に多くの窯が操業していたと考えられる。

【参考文献】

愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編　窯業 2　中世・近世　瀬戸系

愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史』別編　窯業 3　中世・近世　常滑系

中野晴久 1994「生産地における編年について」『「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

日本福祉大学知多半島総合研究所 2013『知多半島の歴史と現在』№17

愛知県埋蔵文化センター2013『別岨古窯群』　愛知県埋蔵文化センター調査報告書　第 187 集

『砂原古窯』　大府市文化財調査報告書第 8 集

『瀬戸Ｂ古窯群・奥谷古窯』大府市文化財調査報告書第 10 集

公益財団法人瀬戸市文化振興財団　2012　『古瀬戸の誕生「陶祖藤四郎」伝説とその時代』

青木修 2012「中世常滑窯における焼成器種とその形態的分類について」『愛知県史研究』第 16 号

報告書抄録

ふりがな	せとしーこようぐん・きゅうぶんこようぐん
書名	瀬戸C古窯群・久分古窯群
副書名	大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ
巻次	
シリーズ名	大府市文化財調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	鈴木智恵　伊藤羊子　服部孝信　古田功治
編集機関	大府市教育委員会(歴史民俗資料館)
所在地	〒474－8701　大府市中央町五丁目70番地
発行年月日	西暦2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °’”	東経 °’”	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せとこようぐん 瀬戸C古窯群	おおぶしきょうわちょう7ちょうめ 大府市共和町7丁目	23223	170	35° 02’ 12.83”	136° 56’ 51.94”	20050601 ～ 20051015	100㎡	区画整理事業
きゅうぶんこようぐん 久分古窯群	おおぶしきょうせいちょう4ちょうめ 大府市共西町4丁目	23223	100	35° 02’ 17.35”	136° 56’ 29.09”	20050601 ～ 20051027	1000㎡	区画整理事業

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瀬戸C古窯群	古窯跡	鎌倉時代前半	窯体3基・灰原	碗・皿・鉢・片口碗など	2号窯より片口碗が出土。大府市内での片口碗出土は初。
久分古窯群	古窯跡	平安時代末期～鎌倉時代前期	窯体5基・灰原	碗・皿・鉢	

要約	瀬戸C古窯群は中世山茶碗窯3基を調査した。いずれも後世の削平を受けており、1号窯は焼成室の一部、2・3号窯は焼成室と燃焼室のそれぞれ一部と分焔柱が残存していた。3号窯は、排水のためと思われる溝が確認された。また2号窯からは、大府市内では初となる片口碗が出土した。いずれの窯も、中野編年の4型式から5型式、1190年頃から1250年頃の操業と推定される。
	久分古窯群は事前に確認されていた中世山茶碗窯5基の内、工事区域内の4基を調査した。いずれも後世の削平により、天井部は消失していた。2・3号窯は焼成室の一部、4・5号窯は焼成室と燃焼室の各一部と分焔柱が残存していた。また3・4・5号窯では、床面の下に碗を敷き詰めた床面下施設が確認された。いずれの窯も、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけて操業されたと考えられる。

大府市文化財調査報告書　第１１集

瀬戸Ｃ古窯群

久分古窯群

大府共和西特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ

平成 26 年 3 月 31 日発行

発行　愛知県大府市教育委員会
住所　〒４７４－８７０１
　　愛知県大府市中央町五丁目７０番地
印刷　株式会社 愛知印刷工業